

『達磨大師三論』と『少室六門』の成立と流布

伊 吹 敦

はじめに

初期の禪宗思想を今日に伝えるものとしては、敦煌出土文獻を先ず挙げなくてはならないが、それとは別に、従来から朝鮮や日本に伝えられてきたものがあり、それに勝るとも劣らない価値を持っている。なかでも、朝鮮の『禪門撮要』や、日本の『達磨大師三論』、『少室六門』に含まれる諸文獻は、その代表的なものと言えよう。そして、これらの文獻の傳承過程を探ることは、その成立時期や流布の状況を明らかにする上でどうしても必要なことであり、それは、そのまま、初期禪宗史解明への重要な視點を提供するものである。

しかし、今日に至るまで、このような視點に立って、これらの文獻を研究することが十分に行われてきたとは、とても言えない状況にある。その意味で、椎名宏雄氏の「諸本對校『達磨大師三論』」、ならびに「『少室六門』と『達磨大師三論』」という二つの論文⁽¹⁾は、この方面において、先驅的、かつ、劃期的意義を持つものであるであろう。氏は、先ず、前者において、駒澤大學に藏される五山版『達磨大師三論』を底本に、現存する諸本の對校を行い、その成果に基づいて、後者において、『達磨大師三論』と『少室六門』の成立について論ぜられたのである。

氏の、この二つの論文は、大變な勞作ではあるが、しかし、私の見るところでは、その議論には、いまだ十分とは言い難いところがしばしば見受けられるように思われる。そして、これこそが、私がここに、この小論を著わす所以なのである。私は、以下において、『達磨大師三論』、ならびに、『少室六門』の系統を辿ることによって、結果的に、氏の主張の多くを否定することになろうが、とはいえ、それにも拘わらず、この小論の多くが、氏の論文に負うものであることは素直に認めておかななくてはならない。

一 椎名氏の説

以下において、私は、この問題に對する私見を述べたいと思うが、その前に、論

述の都合上、先ず、先行する椎名氏の説を一瞥しておきたい。

先ず、氏は、五山版『達磨大師三論』について、およそ、以下のように述べられている。

- 1 『達磨大師三論』の異本として六種が知られるが、五山版（慶應大學蔵本、ならびに駒澤大學蔵本）が最古のものである。
- 2 五山版の特徴として、収録各書の冒頭に、それぞれ序文が付されていること、ならびに、本文中に割行文字や空白部分が少なからず存在することを挙げることができる。
- 3 五山版に特徴的な割行文字や空白部分の存在は、それが據った原本が、既に摩滅や蟲損などのある古版で、それに忠實な復刻であることを示すものである。
- 4 無著道忠は、高麗本の『達磨大師三論』を見ているが、彼がその序文として掲げるものを見るに、五山版と順序、内容とも全同である。このことは、『達磨大師三論』の高麗版と五山版とが同文異版の関係にあることを示すものであって、五山版は、高麗版の翻刻か、その原本である宋版の覆刻であるに違いない。

一方、五山版『少室六門』に関しては、次のように言う。

- 1 『少室六門』の異本として、代表的なものに八種が存在するが、最も古いものが、六地藏寺所蔵の五山版であって、その他の諸本は、それから派生したものである。
- 2 五山版は末尾を缺くが、この忠實な謄寫本と認められる内閣文庫蔵本によれば、この五山版には、もともと序跋の類は存在しなかったと考えられる。
- 3 この五山版は、阿部隆一、川瀬一馬の兩氏によれば、鎌倉末期から南北朝初期にかけての、中世初期に刊行された精刻の覆宋版であるという。従って、『少室六門』は、宋代の編輯と認めるべきである。

このようにして、氏は、『達磨大師三論』についても、『少室六門』についても、宋代の編輯であるとして、従来、漠然と唱えられていた、中世日本における編輯という考え方を完全に否定されたのである⁽²⁾。

しかし、事はそう簡単ではない。氏は、『達磨大師三論』を宋代の編輯と考える根拠を、上述のように、五山版に見られる割行や空白部分の存在、ならびに、高麗本があったという無著道忠の記録に求めているのであるが、後に明らかになるように、五山版『達磨大師三論』の割行や空白部分は、氏の言われるように、その底本の摩滅や蟲損などによるものでは決してないし、『達磨大師三論』に高麗本があったというのも極めて疑わしいのである（ただし、それに収められる個々の文獻に高麗本があった可能性を否定するものではない）。また、『少室六門』に關しても、阿部、川瀬兩氏は、必ずしも明確な根拠を示しているわけではないのだから⁽³⁾、その見解だけに基づいて、中國での編輯と決めつけるのには問題があろう。これらの外にも、椎名氏の議論には、重要な事實を見逃していたり、事實誤認と思われるところが多々見受けられるのであるが、それら諸點については、追って言及することにしたい。

いったい、『達磨大師三論』や『少室六門』に含まれる「達磨の著作」が、當初、日本で注意されるようになったのは、日本達磨宗との關聯においてであつたらしい⁽⁴⁾。

最近、注目されているように⁽⁵⁾、經豪の『正法眼藏抄』（1303～1308年撰）には、

達磨宗ニハ、破相論・悟性論・血脈論トタテ、マツ世間ノ法ヲ破シテ正ヲサトルト云ハズ、ステニ測度ナルヘシ。⁽⁶⁾

という文が見えるし、日本達磨宗の著作と見倣されている⁽⁷⁾『見性成佛論』にも、「語性論ニ罪業ハ、ウタカイノコ、ロヨリヲコレリト釋セリ」と『悟性論』を引用しているのである⁽⁸⁾。

また、日蓮の禪宗批判は、直接には、日本達磨宗を標的としたものとされているが、彼の晩年の思想を伝える日向（1253～1314）の『金剛集』にも、「禪祖師頌筆事」と題して、『血脈論』、『悟性論』、『破相論』を、かなりの長文に互って引用しているのである⁽⁹⁾。

日本で達磨の言葉が注目されるようになった端緒は、恐らく、日本達磨宗が『三論』を持ち出したことに由來するのであって、それは、やがて、他の文獻に含まれるそれへの關心をも惹起したものと思われる。實際、『少室六門』に含まれるもののうち、『二種入』と『安心法門』については、後に論ずるように、十三世紀後半から十四世紀前半にかけて、少なくとも一部の禪僧の間では注目されていたことが確認できるものである。

五山版『少室六門』の刊行は、十四世紀前半と見られるし、『達磨大師三論』のそれは、その刊記から、至徳四年（1387）と知られるから、これら五山版の刊行が、日本達磨宗による『三論』の擧揚を承ける形で行われたことは、間違いあるまい。

つまり、これらの典籍が見出されたのは、日本達磨宗という、日本における新たな思想運動を通してなのであり、この意味で、『達磨大師三論』や『少室六門』に宋版が存在したかどうかという問題とは別に、その刊行は、正しく、日本の思想状況を反映するものだったのである。柳田聖山氏は、『達磨大師三論』について、椎名氏の立論に基づいて、五山版を覆宋版と認めた上で、「もともと、『達磨三論』は早く唐代に、日本に伝えられたようで、……先にいう宋本の三論に先立って、日本で三論が集められる可能性は大きい」と述べておられるが⁽¹⁰⁾、正に、その通りであろうし、それは、『少室六門』についても同様に言うことであろう。

上述のごとく、当時の日本にあっては、『達磨大師三論』や『少室六門』は、重要な意義を有していたと考えられるのであるが、これに對して、当時の中國にも、これらが纏められるような機運がはたして存在したであろうか。確かに『血脈論』や『二種入』、『安心法門』については、宋代においても、なお重視されていたことを知ることができるが⁽¹¹⁾、『破相論』や『悟性論』については、少なくとも中國に関しては、それが伝えられていた形跡すら認めることができないのである。

そもそも、『破相論』は、神秀と密接な關聯を持つ初期禪宗文獻であり、北宗禪に特徴的な附會的解釋によって佛教的概念を説明することに主眼が置かれている。一方、『悟性論』にも、この傾向を認めることができるが⁽¹²⁾、このことは、この二つが、後に述べるように、既に唐代において一緒に傳持されていたらしいこととも呼應するものである。

しかし、いずれにせよ、このような附會的解釋は、神會による南宗禪の樹立以後、禪宗内では、ほとんど歴史的役割りを終えてしまったものである。そのようなものが、いったいどうして、宋代において、再び採り擧げられなくてはならなかったというのだろうか。中國に行ったこともなく、従って、中國の思想状況について、ほとんど何も知らぬ大日能忍や、その弟子たちが、古く日本に傳わっていた「達磨の著作」によって、禪を全く新たな思想として把握しようとしたのとバラレルな状況が、宋朝禪にも存在したとでもいうのだろうか。

私は、以下の論述において、椎名氏の意見とは全く逆に、『達磨大師三論』、『少室六門』の二書が、日本における編輯であり、日本傳來の文獻を基礎として、それ

に、宋版、あるいは、その翻刻たる高麗版を取り込み、または参照することで成立したことを示そうと思う。その議論は多岐に亙るが、おおよそ、以下のような手順に沿って論述を進めて行きたいと思う。

- 1 五山版『達磨大師三論』所収の諸論を、他本と対照することで、その底本の由來を探る。
- 2 五山版『達磨大師三論』の成立と密接な關聯を持つ、金澤文庫本の『悟性論』と『破相論』の來歴を探る。
- 3 五山版『達磨大師三論』と金澤文庫本との關係から、五山版が、古來、日本に伝えられていた本に基づくものであることを示す。
- 4 『破相論』に見られる錯簡によって、五山版『少室六門』が日本における編輯でしかありえないことを示すとともに、それに含まれる種々の文獻について、そのソースを探る。
- 5 叡山文庫本の存在を提示することで、五山版『達磨大師三論』自體の變遷を辿る。
- 6 以上の論點を踏まえた上で、『達磨大師三論』と『少室六門』の諸本の系統を明らかにする。

従って、先ず、五山版『達磨大師三論』所収の諸論を一つ一つ検討しなくてはならないわけであるが、しかし、その前に、叙述の必要上、次の二つの問題を先ず片付けておく必要がある。即ち、現存する五山版『達磨大師三論』の本文の確定と、大谷大學本『達磨大師三論』の成立事情の解明である。

二 五山版『達磨大師三論』の本文の確定

既に言及したように、椎名氏は、前掲の論文、「諸本對校『達磨大師三論』」において、『達磨大師三論』の重要性に鑑み、駒澤大學藏本を底本に、總計七種の異本を對校する形で、その本文を提示された。これは、大變繁雜な作業であって、その労力は並み大抵のものではなかったろうと推察されるのであるが、校正が十分でなく、かなりの誤植が見受けられるのは遺憾である。

やがて明らかになるように、以下における私の議論は、五山版の本文を前提とし、その一字一句を問題にする形で展開されるので、その精確さには萬全を期さなくてはならない。そこで、次に、その誤植の箇所を一覽の形で明示しておきたい（異體

字と認めうるものについては問題にしない。なお、〈 〉は割行であることを示し、□は一字分空白であることを示す。また、所在箇所は、椎名氏の翻刻のページ数と行数で示す）。

	椎名氏の 翻刻	原 刻 本	箇 所
血 脈 論	可以即證	可以印證	180／8
	狂費工夫	枉費工夫	180／9
	如河恆沙	如恆河沙	182／1
	參參知識	參善知識	182／3
	若欲直會	若欲眞會	184／16
	〈於一〉	〈一於〉	186／10
	心性	心生	188／7
悟 性 論	靡天	靡大	188／13
	非天非小	非大非小	188／14
	妙眼	妙服	189／11
	凡言一法	凡言一心	190／21
	即眞法滅	則眞法滅	191／17
	男相	男□相	193／7
	遍萬	遍滿	195／13

	椎名氏の 翻刻	原 刻 本	箇 所
破 相 論	和愍	和尚	196／9
	修行	修□行	199／12
	妄虚	虚妄	201／13 ～14
	鈍銀	鈍根	201／15
	兩國	西國	202／2
	繪彩	繪彩	202／18
	以爲散	以爲散花	202／18
	花所以者	所以者	202／18
	虚切	虚功	203／10

以上、誤植と認められるものを提示したが、實は、椎名氏のテキストの問題點は、これのみに留まるものではない。誤植とは言えないが、翻刻としては、いかがかと思われる點が何箇所も見受けられるのである。即ち、上にも觸れたように、この版本には割行部分とともに、空白の部分がしばしば見られるのであるが、駒澤大學藏本には、その空白部に後の人が文字を書き入れた例が何箇所もあるのに、椎名氏は、それを區別せず、元來の本文と全く同じように扱っているのである。

確かに、駒澤大學藏本の書き込みは元來の本文とよく調和する形で書かれていて判別しにくいので、氏がそれに気がつかなかったのも無理はない。私も最初は気づかなかったのであるが、慶應大學藏本と較べてみたところ、文字に違いがあったの

で、どうしたことかとよく見てみたところ、それが後代の書き込みであることが判明したのである。慶應大學蔵本は、椎名氏の言うように、駒澤大學蔵本と全くの同版であるが¹³⁾、慶應大學蔵本の空白部にも後代の書き込みが行われており、このため、両者の間に文字の相違が生じているのである。これらの書き込みは、それ自體として、重大な資料価値を持つものであるが、しかし、當面の論述において重要なのは、元來の刻本の部分であるから、これらは排除されなくてはならない。次にそのような箇所の一覧を示しておく（〔 〕で囲まれた部分が後代の書き込みと認められる部分である）。

		駒澤大學蔵本	慶應大學蔵本	原 刻 本	箇 所
血 脈 論	A	輪廻□	輪廻〔縁〕	輪廻□	181／19
	B	無〔性〕	無〔性〕	無□	187／16
悟 性 論	C	非直	非眞	非直	191／10
	D	種〔心〕	種〔子〕	種□	192／15
	E	男□相	男〔子〕相	男□相	193／7
	F	〔化身〕亦云應身	〔化身〕亦云應身	□□亦云應身	194／5
	G	□□□□□	〔者即是雪山〕	□□□□□	194／6
	H	佛〔智〕	佛〔智〕	佛□	194／10
	I	〈□經云心〉	〈〔此〕經〔者〕心〉	〈□經云心〉	195／3
破 相 論	J	生□	生〔子〕	生□	197／3
	K	□行	〔苦〕行	□行	199／12

慶應大學蔵本では、Cの場合、「眞」の字の「あし」の部分のみが書き込みである。つまり、「直」に「ハ」を書き加えて、「眞」に改めているのである。また、Iでは、元來の「云」の字の上に上書する形で、「者」の字が書かれている。

なお、椎名氏が「無刻」としている部分にも、実際には、そうでない場合がある。即ち、氏の翻刻でいえば、一九四頁の八行目の「上中下□」の部分である。この「□」の箇所を實際に駒澤大學蔵本に当たてみると、それが無刻なのではなく、實は、塗り潰されていることが分かる。ここには、慶應大學蔵本では「説」の文字が存し、

しかも、それは、明らかに刻されたものであるから、元來、「説」の字があったのを、駒澤大學藏本は衍字と見て、塗り潰してしまったのである。

以上、椎名氏の翻刻の誤植を正すとともに、現存する二種の五山版『達磨大師三論』の状態に言及しつつ、その原型の復元を行った。ここで、かなりの紙幅をさいて、このような作業を行ったのは、後に述べるように、この本に特徴的な空白部分や割行文字が、その成立の過程と密接な関係にあると見られるからであり、そのことを論ずるためには、何としても、先ず、空白部分と割行部分を特定しておくことが必要不可欠であるからである。従って、以下の叙述では、椎名氏の翻刻を上に掲げた一覧によって正した上で、使用することとする。

三 大谷大學藏『達磨大師三論』について

次に、大谷大學藏『達磨大師三論』の素性を明らかにしておきたいが、この寫本に關しては、既に、椎名氏に次のような指摘がある⁽¹⁴⁾。

- 1 天文二十一年（1552）に、舜濟慶林によって寫された寫本である。
- 2 『傳心法要』を合綴しており、しかも、この『傳心法要』のテキストは、『景德傳燈錄』卷九に収録される古形を留めるものであるが、このことは、『血脈論』の序文に、「惟有達磨血脈論。并黃檗傳心法要二説。最爲至論」というのと照應する。
- 3 三論が、『破相論』、『血脈論』、『悟性論』の順に配置されているが、これは、他に全くその例を見ないものである。
- 4 文字語句が五山版『達磨大師三論』と大きく相違し、その相違點の多くが五山版『少室六門』に一致する。特に、『破相論』に見られる錯簡が存在するのは、五山版『少室六門』と大谷大學藏本のみである。
- 5 『血脈論』の序文の撰者を、五山版『達磨大師三論』は「任哲作」とするが、この本は「任作哲」としており、しかも、『建昌府志』によれば、この「任作哲」のほうが正しいと考えられる。

椎名氏は、上の2、5のような點から、「してみれば、大谷本は任哲の時の宋版か、またはこれを承ける系統の古鈔本とみるべきかも知れない」と疑いながらも、4のような事實から、結局は、大谷大學藏本を「五山版『三論』と、五山版『六門』本との中間的な存在」と見、「五山版『六門』本の内容と、同じく『三論』本の形式とを合様

した一本ではないかと思われる」と言うに留まったのである⁽¹⁵⁾。

確かに、五山版『少室六門』との文字の一致は無視することができないし、『破相論』に見られる錯簡は、後に述べるように、明らかに、五山版『少室六門』編集の際に起きたものであって、その錯簡を承ける大谷大學藏本が、五山版『少室六門』と無関係だとは絶対に言えないが、しかし、それにも関わらず、五山版『達磨大師三論』と、五山版『少室六門』とからだけでは、「任哲作」という誤った名前を、「任作哲」という、本来の正しい名前に改めることはできないはずなのである。

このような難点が生ずる理由は、思うに、氏が、大谷大學藏本中の「三論」を同一の経緯で伝えられたものと考えていることに存するのである。しかし、これを二つ、つまり、「血脈論」と「悟性論+破相論」という二つに分けて考えれば、全ての問題は一挙に解決する。即ち、紹興二十三年（1153）に任作哲が刊行したのは、その序文に見られるように、『血脈論』と『傳心法要』とであったはずであり、この「血脈論+傳心法要」に、五山版『少室六門』中の『悟性論』と『破相論』を加えたのが大谷大學藏本であると考えるのである。

このように考えれば、大谷大學藏本のみが、『血脈論』において、どうして、元來の「任作哲」という正しい名前を保持しているのかということも説明されるし、五山版『少室六門』との類似の生じた理由も理解できるのである。そして、實際、私は、この推定が正しいものであることを示す證據を本文中に指摘することができるのである。

先ず、氏の對校によって知られるように、大谷大學藏本と五山版『少室六門』との類似は、確かに著しいものではあるが、しかし、『血脈論』に限って言えば、必ずしも、それは甚だしいとはいえない。全體に亘って文字に相違があるうえに、『少室六門』所収本には一部に脱落すら見られるのである⁽¹⁶⁾。

更に、末尾には次のような重大な相違がある。即ち、五山版『少室六門』に収められる『血脈論』の末尾では、本文が終わった後、

- イ 吾本來此土。傳法救迷情。
- 一華開五葉。結果自然成。
- ロ 江槎分玉浪。管炬開金鎖。
- 五口相共行。九十無彼我。

という二つの偈文を載せるが（ただし、この部分は原本が破損しているため、椎名氏に従って、内閣文庫藏本によって補う⁽¹⁷⁾）、一方、大谷大學藏本は、先ず、

ハ 心心難可尋。

寬時遍法界。窄也不容針。

我本求心不求佛。了知三界空無物。

若欲求佛但求心。只這心心心是佛。

我本求心心自持。求心不得待心知。

佛性不從心外得。心生便是罪生時。

という頌を掲げた後、上のイの偈文のみを載せる。

ところが、このハの頌は、五山版『少室六門』では、第一句から第三句までは、『安心法門』（第四門）の末尾に附されている頌の初め三句に当たり、また、第四句から第十一句にかけては、『破相論』（第二門）の末尾に附された頌に当たるのである。しかも、『破相論』では、第四句から第七句までと、第八句から第十一句までの順序が逆になっている⁽¹⁸⁾。

五山版『達磨大師三論』や、朝鮮系の『禪門撮要』所収本も大谷大學藏本と全く同じ構成をとっているし、『少室六門』は、『安心法門』について、「宗鏡及正法眼藏載之」というにも関わらず、『宗鏡録』にも『正法眼藏』にも、このハの頌はないのであるから、『安心法門』には、元來、末尾に頌はなかったとみてよいであろう。つまり、ハの頌は、元來、大谷大學藏本のように、『血脈論』の末尾に一括してあったとみられるのである。従って、『少室六門』の方が、『血脈論』の末尾にあった、ハの頌を、三つに分割し、第一句から第三句を『安心法門』の末尾に、また、第四句から第十一句までを『破相論』の末尾に移したと考えざるをえないのである。

『少室六門』を見るに、『心經頌』以外の五門の末尾にはいずれも偈文が附された形になっている。第三門の『二種入』末尾の頌は、『傳燈録』達磨章から抜粋して作られたものであることは明らかであり⁽¹⁹⁾、また、上に掲げた、『血脈論』末尾の口の頌も、『傳燈録』達磨章に見られる識であるから⁽²⁰⁾、これらの頌は、『少室六門』が達磨の著作を集めたものとして編纂された際に、形式を整えようとして、加えられたのであろうと思われる。恐らく、『血脈論』の偈文の移動も、このような形式上の統一の一環として行われたのであろう。要するに、少なくとも、『血脈論』に関しては、大谷大學藏本は、明らかに五山版『少室六門』とは系統を異にし、それ以前の形態を保つものといえるのである。

このように見てくると、大谷大學藏本の『血脈論』の序が、元來の「任作哲」という正しい撰者名を保存している理由がよく理解できる。つまり、この事實は、大谷

大學藏本が、序の作者が「任作哲」から「任哲作」に誤られる以前の、より信頼性の高い底本に基づいたことを示すものであるが、大谷大學藏本が『傳心法要』を合綴していることからすれば、その底本こそは、任作哲が刊行した「血脈論+傳心法要」というテキストそのものであったと考えられるのである。

それでは、序者が「任作哲」から「任哲作」に誤られたのは、五山版『達磨大師三論』に始まるのかといえば、そうではない。というのは、無著道忠は、『少林三論并四品校讎』において、高麗本の序文を引用しているが、それをみると、既に「任哲作」となっているのである。このことは、五山版『達磨大師三論』が、『血脈論』の底本として用いたものが高麗本であったことを示すに外ならない。そして、これに對して、大谷大學藏本の『血脈論』は、宋代刊行の元本を髣髴させるものと言えるのである。

以上、大谷大學藏本の『達磨大師三論』の成立について、『血脈論』を中心に論じたが、『悟性論』や『破相論』については、『少室六門』と密接な関係にあることは確かであるものの、決して、それをそのまま承けたものではない。しかし、このことについては、後で、別に論ずることとしたい。

四 五山版『達磨大師三論』の成立について

以上、豫備的な議論を終えたから、次に、本題である、五山版『達磨大師三論』の検討に移りたい。

1 『血脈論』

先ず、『血脈論』であるが、これについては、上に述べたように、一應、高麗本を底本としていえることができる。そのことを確認するためには、現在知られている諸本を對照する必要があるが、その相違の全てをここに掲げることは繁雜であるばかりか意味もないので、特に、宋版に基づくことが確實と思われる大谷大學藏本との相違箇所についてのみ、諸本間の相違を掲げることにする。ただし、單なる書き間違いや異體字と見うるものについては省略してある。なお、割行や空白部分の表記は、先に準じることとする。以下においても同様である。

五山版『三論』	大谷大學藏本	禪門撮要本	五山版『六門』	箇所
達磨	なし	序文なし	序文なし	180/1
任哲作	任作哲	序文なし	序文なし	180/2
任哲	任作哲	序文なし	序文なし	180/10

五山版『三論』	大谷大學藏本	禪門撮要本	五山版『六門』	箇所
何起	起	何起	何起	181／11
佛不識	佛而不識	佛不識	佛而不識	181／13
〈外覓〉	外覓	外	外覓	181／13
即	性即	即	性即	181／15
輪迴□	輪迴緣	輪迴緣	輪回	181／19
茫茫	忙忙	茫茫	忙忙	181／21
一物可得	可得一物	一物可得	一物可得	181／22
令心	心	令心	令心	181／22
盡是	盡皆	盡是	盡皆	182／6
魔說魔家	魔家	魔說魔家	魔說魔家	182／9
受報	受法	受報	受法	182／15
輪迴	輪回	輪迴	輪回	182／15
〈作如〉是	作如是	如是	作如是	183／2
見在	現在	見在	現在	183／5
師曰	師云	師云	師云	183／5
師曰	師云	師云	師云	183／10
拘	抱	拘	拘	183／14
其〈中事〉	其中事	其中	其中事	183／18
惟佛	佛	惟佛	唯佛	183／19
知	識	識	識	184／8
見前	現前亦	見前	現前亦	184／10
亦莫	莫	亦莫	莫	184／13
怕怖	恆怖	怕怖	怕怖	184／13
妄相	妄想	妄相	妄想	184／15
佛見法見	佛見	佛見法見	佛見法見	184／15
即得	得	即得	即得	184／16
亦	亦深	亦	亦	185／3
屬及	屬乃	屬及	屬及	185／9

五山版『三論』	大谷大學藏本	禪門撮要本	五山版『六門』	箇所
托生	託生	托生	託生	185／10
〈除障〉	除	除	除障	185／11
魔攝	被魔攝	魔攝	被魔攝	185／11
示見	示現	示見	示現	185／13
妄想	妄想遞	妄相	妄想	185／16
眼睹	眼見	眼見	眼見	185／20
不昧	不明	不昧	不昧	186／5
〈一切〉法	一切法	一法	一切法	186／5
驅驅	區區	驅驅	區區	186／7
驅驅	區區	驅驅	區區	186／7
長坐	衿長坐	長學坐	長坐	186／8
中得第〈一於〉	第一於	中得第一	第一於	186／10
〈皆無識佛〉	皆無識佛	無識	皆無識佛	186／11
見今	現今	見今	現今	186／16
熱	報	熱	無熱	187／1
輪廻	輪回	輪廻	輪回	187／8
奈它何自	奈他何自	奈他何自	奈他何	187／9
無性	無精	無情	無情	187／16
笑	咲	笑	覺	187／21
笑	咲	笑	覺	187／21

この一覧を見て、直ぐ氣付くことは、五山版『達磨大師三論』所収本と『禪門撮要』所収本、大谷大學藏本と五山版『少室六門』所収本とが、それぞれ、極めて近い関係にあるということである。『禪門撮要』は隆熙元年（1907）に朝鮮で刊行されたものであって、その底本が何であったかは分からないが⁽²¹⁾、恐らく、隆慶年間（1567～73）に刊行されたという安心寺刊本⁽²²⁾、あるいは、萬曆七年（1579）に刊行された普願寺刊本⁽²³⁾などに據ったのであらう⁽²⁴⁾。無著は、伯瑛和尚所藏の高麗本（同じく無著が見たという萬山和尚手寫本も、恐らく、高麗本による謄寫であらう）のほかに、南涌院に藏される朝鮮

刊本も見ているが⁽²⁵⁾、あるいは、それが、この安心寺刊本や普願寺刊本であったのかも知れない。しかし、いずれにせよ、この『禪門撮要』所収本が朝鮮傳來の本に基づいたということには間違いあるまいと思われる。とすれば、それが高麗本の系統に出づるものであったことは想像に難くない。そして、この本と五山版『達磨大師三論』との類似は、やはり、五山版『達磨大師三論』が高麗本を底本にしたという、上の推定を裏付けるものであるといえよう。そして、一方、大谷大學藏本と五山版『少室六門』との類似は、五山版『少室六門』が底本とした『血脈論』が、任作哲刊行の宋版であったことを示すものにほかならないであろう。

ところで、上の表で、五山版で割行になっている部分と空白になっている部分に着目してみると非常におもしろいことに気付く。先ず割行部分について見てみると、それは、全て、『禪門撮要』所収本と『少室六門』所収本とで文字に相違が見られる箇所当たり、しかも、その部分に限っては、全て『少室六門』所収本に一致するのである。これは、五山版『達磨大師三論』が『禪門撮要』所収本と同じく高麗本を承けるものとみられることからすれば、極めて異例である。

また、これらの部分において重要なことは、『禪門撮要』所収本と『少室六門』所収本との間に文字数の違いがあり、しかも、全ての場合において、『少室六門』のほうに『禪門撮要』所収本より字数が多いのである。例えば、「外覓」(181/13)の場合、『禪門撮要』所収本が「外」の一字に作るのを、五山版『達磨大師三論』では、割行で「外覓」の二字に作るのであるが、版本は、この二字を、ちょうど一字分のスペースに刻しているのであって、割行という形式は、一字分に二字を押し込めるための止むをえざる方法として用いられていることが知られる。これによって推測されることは、この部分が後からの補正であろうということである。つまり、当初は、『禪門撮要』所収本のように「外」の一字が刻されていたのを、後で宋版系の本と對校した結果、その誤りに気付き、その部分のみを改めたわけだが、その際、正しい文のほうに文字数が多かったために、このような割行という形態を取らざるをえなかったのである。このように考えることによって、他の割行部分も、全てが説明されるので、この推定は、ほぼ間違いのないものとみてよい。

次に、空白部分について考えてみると、『禪門撮要』所収本に「縁」という字がある部分(181/19)が、五山版『達磨大師三論』では空白になっているので

あるが、大谷大學藏本や『少室六門』といった宋版系の本では、この文字は初めから存在しないから、この場合も、元來、『禪門撮要』のように「縁」という字が刻されていたのを、後で、宋版系の本との對校によって衍字であることが知られたために、刻した文字を削ってしまったのだと考えることができる。

このように見てくると、五山版『達磨大師三論』の『血脈論』は、当初は、現在の本文より、ずっと『禪門撮要』所収本に近かったと推定されるわけだが、このことは、その底本が高麗本であり、それをそのまま刻したものであったことを雄辯に物語っている。そして、その後、より信頼性の高い宋版系の本によって、本文の一部を改めたのが、今日の五山版『達磨大師三論』の本文なのであって、そこに見られる、割行文字、空白部分は、その際の補正の痕跡と見ることができるのである。

なお、『血脈論』の日本渡來に関しては、『園城寺傳記』卷一之二の「新羅明神御事」の條に、『文殊千鉢經』を説明して、

此經。高祖御入唐時。從智慧輪三藏傳授之御經也。御歸朝時。可有御隨身之所。翻譯依不終。無其儀。爰成尋阿闍梨入唐之時。知高祖之御本意。千鉢經十卷。五臺山記。達磨血脈論。庚申經。副消息被送三井唐院 成典使。⁽²⁶⁾

というから、既に、任作哲による刊行以前に、成尋（延久四年〈1072〉入宋）によって日本にもたらされ、園城寺の唐院に送られていたようである。しかし、この本のその後の流傳については、なんら知られるところがなく、その系統を引くことが確かな、いかなる寫本の存在も確認できないのは遺憾である。

また、稱名寺の「小經藏目錄」（劍阿手澤本）には、「破相論 一帖」や、「悟性論 二帖」と並んで、「血脈論 二帖」と見えるが⁽²⁷⁾、この目錄は、十四世紀初頭のものと考えられるので、ここに列名されている『血脈論』が、五山版の『達磨大師三論』や『少室六門』の底本となんらかの關係を有していたということも十分に考えられる。特に、この目錄に掲げられている『破相論』や『悟性論』が現在の金澤文庫本であり、それが、後に明らかになるように、『達磨大師三論』や『少室六門』の底本と密接な關係にあったことを思えば、なおさらである。

このほか、『血脈論』は、賴寶（1279～1330）の『諸法分別抄』に、「達磨大師血脈論云。三界混起。同歸一心。云云」と冒頭部が引かれているほか⁽²⁸⁾、英心（1289～1354）の『菩薩戒問答洞義鈔』（徳治三年〈1308〉撰）

にも、

隋達磨大師血脈論曰。除此心外。終無別佛可得。乃至。自心是佛。亦不得將佛禮佛。不得將心念佛。佛不誦經。佛不持戒。佛不犯戒。佛無持犯。亦不造善惡。若欲覓佛。須見佛性。即是佛。若不見性。念佛誦經。持齋持戒。亦無益處。誦經得聰明。持戒得生天。布施得福報。生佛終不得佛。已上。⁽²⁹⁾

と引用されている。

このほか、抜隊得勝(1327～1387)は、その假名法語たる『鹽山和泥水集』や『鹽山假名法語』に、「達磨大師ノ云」、「初祖ノ云」として、『血脈論』の文を合計五箇所に見えて引いているので⁽³⁰⁾、十四世紀の前半には、これが廣く流布していたことを知ることができる。そして、實際、『普門院經論章疏語錄儒書等目録』によって、十四世紀の半ばには、東福寺にも『血脈論』が藏されていたことが確認できるのである⁽³¹⁾。

つまり、至徳四年(1387)に刊行された『達磨大師三論』や、それに先だって編輯、刊行されたと推定される『少室六門』に、『血脈論』が収められたのは、このような流布と呼應するものだったのである。

2 『悟性論』

次に『悟性論』の検討に移りたいが、これについては、『血脈論』のように簡単にはいかない。というのは、はっきりと宋版に基づくことが確認できる本が存在するわけではないし、また、無著道忠が高麗本を見ており⁽³²⁾、第四回大藏會に高麗本が出品されたことが知られるから⁽³³⁾、少なくとも大正時代までそれが存在していたことは確かなのであるが、その本の所在は、現在、不明となっており、見ることはできないのである。ところが、椎名氏が前掲論文で明らかにされたように、近年(1968年)、韓國(金井山梵魚寺)で刊行された『新刊懸吐禪門撮要』には、この、『悟性論』が含まれているのである⁽³⁴⁾。

『新刊懸吐禪門撮要』は、基づいた底本を明示していないし、私が目にしたどの韓國の圖書目録にも、『悟性論』に関する記載は、一切、見られなかったので、この本が何に基づくものであるかについては、全く不明である。しかし、次に掲げるような理由によって、これが、高麗本の系統を引く、朝鮮傳來のものに基づいたことは、間違いないように思われる。

- 1 椎名氏の御厚意により、その本文を他本と對校することができたが、『達磨大師三論』系の諸本と較べると、かなりの相違を見ることができる。『少室六門』とは近いと言いうるが（これは、両者が同系統に屬することを示すものである）、それでも、重要な點で、多くの違いを見出すことができる。
- 2 この文獻に高麗本があったことは、上述のように疑いえないから、その系統を引く傳本が存在したとしても、なんら不思議はない。
- 3 それ以前には、その傳承が知られていなかったにも拘わらず、『新刊懸吐禪門撮要』に至って、新たに収録されたものとして、外に、『心經頌』があるが、その本文は、甚だ問題の多いもので⁽³⁵⁾、日本のものに據ったとはとても考えられない。特に、これには、經文の後に「頌曰」の二字があるが、後に論ずるように、この種の本は、日本では、極めて稀れである。従って、朝鮮傳來の寫本に基づいたと考えられるが、このように、『心經頌』が朝鮮に傳わったテキストに基づくと考えられる以上、それと同時に収録された『悟性論』が、同様に、朝鮮傳來のものに基づいた可能性は十分にある。
- 4 後述のごとく、江戸時代に刊行された『少室六門』の中には、部分的に、この『新刊懸吐禪門撮要』所収本とだけ一致する本文を持つものがあり、その祖本に基づいて本文を改めたと推定できる。

ただ、この『新刊懸吐禪門撮要』所収本については、その底本が何であるか明らかでないので、この文獻を扱う時には、十分な注意が必要であろう。

一方、日本に伝えられたテキストとしては、現在、金澤文庫、眞福寺文庫にそれぞれ寫本を藏しており、また、外に記録に見えるものとして、古くは、圓珍が將來した本があったようであるし⁽³⁶⁾、目録の記載によって、かつては、高山寺や建仁寺にも傳わっていたことが知られる⁽³⁷⁾。

外に、記録によって、多少なりともその内容を窺いうるものとして、無著が『少林三論并四品校讎』において、五山版『達磨大師三論』と對校している「雜華院唐古本」がある。また、かつて、積翠軒文庫にも文永十一年（1274）書寫の寫本を藏していたというのが⁽³⁸⁾、現在、その所在は不明である。

五山版について考える前に、ここで、これら日本に伝えられた寫本について

少し検討しておきたい。

先ず現存する二種の寫本であるが、金澤文庫本は、奇しくも積翠軒文庫舊藏本と同じ文永十一年に書寫されている。そして、その書寫者は、筆跡から、願行房憲靜と推定されている⁽³⁹⁾。一方、眞福寺文庫本は完本ではなく、全体の半ばほどまでを有するのみで、その後を缺き、従って、その書寫年代や書寫者を知ることとはできない⁽⁴⁰⁾。

いま、この二つの寫本を比較してみるに、文字の異同は極めて頻繁に見ることができるが、ここで重要なのは、その異同が、はたして古い起源を持つものであるかということであろう。そして、それは、他の諸本との比較によって測られなくてはならないのである。たとえば、他本と比較した場合、金沢文庫本だけが本文を異にしている例は極めて多いのであるが、その多くは、脱落や寫誤であることが明らかな場合であって、それ自體の書寫、あるいは、それに比較的近い祖本の書寫に際して生じたものと見ることができるものなのである。従って、それらは、その系統を考える上では、ほとんど何の役にも立たないのである。次に、このような視点に立って、有意味と思われる相違を列挙してみよう。

	五山版『三論』	金澤文庫本	眞福寺文庫本	五山版『六門』	箇所
A	序文あり	序文なし	序文なし	序文なし	188／12 ～9／11
B	達磨大師悟性論	悟性論 菩提達磨説	菩提達磨悟性論	第五門悟性論	189／12
C	即名諸佛	名爲見佛	名爲見佛	即名諸佛	189／14
D	〈若能〉	能	能	能	189／17
E	處	處也	處也	處也	189／20
F	捨身	捨心	捨心	捨心	190／3
G	無心相處	無想處	無相處	無相處	190／9
H	彼岸異於此岸	此岸異於彼岸	此岸異於彼岸	此岸異於彼岸	190／10 ～11
I	聖人	非聖人	非聖人	非聖人	190／13
J	行也	也	也	行也	190／13

	五山版『三論』	金澤文庫本	眞福寺文庫本	五山版『六門』	箇所
K	動	此動	此動	動	190／14
L	何以故	何以故者	何以故者	何以故	190／22
M	持心	將心	將心	將心	191／2
N	不持心	不將心	不將心	不將心	191／2
O	則佛法生	佛法生	佛法生	則佛法生	191／17
P	悟時	若悟時	若悟時	若悟時	191／21
Q	總而言	惣而言	惣而言	總而言之	192／6
R	見色性不著	見色性不善	見見性不善	この句なし	192／6
S	大道中證	大道中語	大道中悟	この部分なし	192／13
T	爲如來種□	是如來種心	爲如來種心	爲如來種	192／15
U	〈不可〉得道	可得導	可得導	不可得道	192／16
V	萌芽	身牙	身芽	萌芽	192／16

この一覧によって、金澤文庫本と眞福寺文庫本が最も近く、五山版『達磨大師三論』が、これらから最も隔たっており、五山版『少室六門』がその中間的な位置にあるテキストであることが知られよう。これらの例は、確かに金澤文庫本と眞福寺文庫本の親近性を示すものといえるが、實は、兩者間で文字が相違している場合も多く見られ、むしろ、そちらのほうが多いとすら言いうるほどなのであるが、それにも拘わらず、それらの相違は、轉寫されるうちに生じた、比較的新しいものと見てよいと思う。

一方、「雜華院唐古本」については、無著の對校によって、その一部が知られるに過ぎない。無著が言及しない部分については、恐らく、五山版『達磨大師三論』と同じであったとみてよいであろうが、確證はない。しかし、無著のわずかな言及からでも、これが、金澤文庫本と同系統の寫本であったことを知ることができる。譬えば、無著は、この本の末尾近くの部分について次のような記載をしている。

無令兩失 失下有者字。又兩失者下有

度者運也。持者護也。禮者運。拜者伏也。在口曰誦。在心曰念。念曰憶也。心者出世之門戶。是解脫之關津。知門戶者。豈慮難成。識關津者。何憂不達。

五十六字。⁽⁴¹⁾

これは、「雜華院唐古本」では、五山版『達磨大師三論』の『悟性論』に比して、上に掲げた五十六字の挿入があったことを示すものである。また、最末尾について、無著は、

更若 —— 不識 偈了又云

三界所尊者。謂之道。萬法同觀者。謂之門也。

有十七字。⁽⁴²⁾

といい、同じく、十七字の挿入があったことを伝えるが、これらの文は、既に、石井修道氏が指摘しているように⁽⁴³⁾、金澤文庫本にも存在し、それを特徴づけるものともいえる最も重大な相違点なのである⁽⁴⁴⁾。

また、先の一覧で掲げた点について言えば、無著の言及によって、A、C、D、E、F、Iの部分については、金澤文庫本や眞福寺文庫本と一致することが確認できるが、このうち、特に、Cでは、金澤文庫本、眞福寺文庫本とのみ一致している。また、Rの部分では、金澤文庫本とだけ共通し、Sでも、「大乘中語」と、金澤文庫本と最も近い本文となっている。

とはいえ、これら三本の間にかなりの文字の相違を見ることができるということも事実であるが、これも、眞福寺文庫本がそうであったように、寫本として伝えられるうちに、文字に相違をきたしたものと見てよからう。

以上、見てきたように、眞福寺文庫本や、無著のいわゆる「雜華院唐古本」は、金澤文庫本と同系統と認められるのであるが、この系統の諸本のなかで、その全文が知られるのは金澤文庫本だけであるので、以下、金澤文庫本によってこの系統を代表させることとし、眞福寺文庫本や雜華院唐古本については、特に必要でない限り、それへの言及は避けることにしたい。ただ、金澤文庫本は、必ずしもよい寫本とは言えず、明らかな脱落、寫誤と見られる部分が多いのは遺憾である。

次に、金澤文庫本と比較しつつ、五山版『達磨大師三論』に収められる『悟性論』の成立を探ってみたいが、比較する箇所は、割行、ならびに空白部に限ることとする。というのは、『悟性論』の場合、高麗本を承けると考えられる『新刊懸吐禪門撮要』所収本が存在するものの、その底本がいかなるものであったかについては明らかでないので、『血脈論』のように、これとの相違箇所に照準を合わせて比較するという方法を採用することに對しては、躊躇を禁じえないのであるが、割行、空白部分については、『血脈論』の場合と同様、補正の跡と考えることができ、その成立と密接

に關係するものと見做すことができるからである（なお、『新刊懸吐禪門撮要』所収本は、以下に掲げるものうち、Dを「種子」とする外は、全て、五山版『少室六門』と共通するので、以下の叙述においては、それへの言及は省略する）。

	五山版『三論』	金澤文庫本	五山版『六門』	箇所
A	〈可以〉	可以	可以	189／15
B	〈若能〉	能	能	189／17
C	〈乃名〉	乃爲	乃名	191／9
D	種□	種心	種	192／15
E	〈不可〉	可	不可	192／16
F	〈本來未〉	來	來	193／3
G	男□相	男女相	男相	193／7
H	〈亦如〉	亦如	亦如	193／10
I	〈化爲〉	爲	化爲	193／17
J	□□如來	如來如來	如來	194／3
K	〈不在中〉	中	不在中	194／3
L	□□亦云應身	亦云應身	この句なし	194／5
M	〈時即〉報身	報身	即報身	194／6
N	□□□□□	者即是雙林	修善雪山	194／6 ～7
O	〈者報〉身	報身	者報身	194／7
P	〈者法〉身	法身	者法身	194／7
Q	〈尚無〉	無	尚無	194／8
R	〈也人有〉	人有	有	194／8
S	佛□	佛	佛是	194／10
T	業〈不造〉	業造	業造	194／13
U	豈〈□不〉	豈不	豈不	194／17
V	〈□經云心〉	云心	此經者心	195／3

先ず、割行の部分から見て行こう。割行部分のうち、A、C、Hの三つは、一字分

のスペースに二字を刻しているが、金澤文庫本、『少室六門』とも、二字であって、この部分に限っては、五山版『達磨大師三論』の最初のテキストが、金澤文庫本、『少室六門』のいずれとも異なり、ただ一字のみであったことを示している（Aの部分に関しては、私が見た全ての本が「可以」の二字に作っているのも、もと、いかなる文字が刻されていたか全く分からないが、Cについては眞福寺文庫本が「乃」とし、また、Hについても、後に述べる叡山文庫本が「亦」と、それぞれ一字に作っているのも、元來、これらの文字のいずれかであったものと思われる）。

次に、E、I、K、O、P、Qの六つは、金澤文庫本が一字であるのに對して、『少室六門』の對應部分が二字、乃至三字であって、しかも、五山版『達磨大師三論』が、一字分のスペースに『少室六門』と同一の二字、乃至三字を刻している場合である。この場合、元來は金澤文庫本と同じ文字が一字刻されていたのを、後で補正した結果、『少室六門』と同じ本文となったのだと考えられる。

B、F、Tの三つは、金澤文庫本と『少室六門』とが同じ一文字であるのを、五山版『達磨大師三論』が、割行によって、一字分のスペースに、二字、乃至三字を刻している場合である。この場合、元來は、金澤文庫本、『少室六門』と同一のテキストであったのが、補正によって異なったものとなったのであろう。

M、Rの二つは『少室六門』が一字であるのに對して、五山版『達磨大師三論』が、一字分のスペースに、二字、乃至三字を刻している場合であって、兩者とも、金澤文庫本の該當する部分は、文字数が合致しないので、五山版『達磨大師三論』の當初のテキストは『少室六門』と同じものであったことが想定できる。

最後に、U、Vの二つは、割行でありながら、その文字の一部が削られている場合であって、恐らく、このことは、二度の補正を経ていることを示すものであろう。しかし、當初の字數は、Uは一文字、Vは二文字であって、Uについては、金澤文庫本『少室六門』本と同じく、「不」の一字であったろうし（ただし、この場合、どうして、このような形態になっているのか明らかではない）、Vについては、金澤文庫本と同じ、「云心」であったであろう。

次に、空白部分の考察に移りたい。先ず、D、G、Jの三つについては、金澤文庫、本の當該箇所に、空白部分の字數に相當する文字が存在し、一方、『少室六門』では、初めから全く文字が存在しないから、元來は金澤文庫本と同一の文字があったとみてよいであろう。また、Nについても、五山版『達磨大師三論』は五字分空白なのであるが、『少室六門』の當該箇所に四字が存在するのに對して、金澤文庫本のその部

分には、正しく五字が存在するから、当初は、金澤文庫本と同一の文字があったとみてよい。しかし、Sについては、金澤文庫本に文字がなく、『少室六門』に文字が存在する部分について、空白部分が存在するわけだから、この場合は、上とは逆に、元來は『少室六門』と同一の文字があったと見てよい。最後に、Lの部分であるが、この場合、五山版『達磨大師三論』の空白部分に相當する文字は、金澤文庫本にも『少室六門』本にも見られないから、当初は獨自の文字があったことが知られる（後に述べる叡山文庫本や河村本では「化身」の二字が存在し、慶應大學藏本、駒澤大學藏本の二種の五山版のいずれにも、同じく、「化身」の二字が書き込まれていることからすれば、ここに元來存在した文字が、この「化身」であったことは、ほぼ間違いない）。

以上の推定によって、五山版『達磨大師三論』の割行部分、ならびに無刻部分の當初の形態について、その異同を纏めると次のようになる。

- 1、金澤文庫本、『少室六門』の兩者と共通・・・B、F、T、Uの四箇所
- 2、金澤文庫本と一致、『少室六門』と相違
・・・D、E、G、I、J、K、N、O、P、Q、Vの十一箇所
- 3、『少室六門』と一致、金澤文庫本と相違・・・M、R、Sの三箇所
- 4、金澤文庫本、『少室六門』の兩者と相違・・・A、C、H、Lの四箇所

こうしてみると、五山版『達磨大師三論』の『悟性論』の當初の本文が、今のものよりも遥かに金澤文庫本に近かったことが知られる。しかし、一方で、『少室六門』と一致したと思われる部分も存在するが、これらについては、その数が少ないことからすれば、金澤文庫本が轉寫に際して、文字を誤ったと考えて問題ないであろう。また、金澤文庫本にも『少室六門』にも一致しなかったと考えられる部分も少数に留まるので、この場合は、『達磨大師三論』の底本が、轉寫のうちに、寫誤を生じていたものと見做すことが許されよう。

そして、ここで注意すべきことは、五山版『達磨大師三論』における補正は、B、F、Tのような、金澤文庫本と『少室六門』とで共通する部分に對しても行われているということであって、このことは、五山版『達磨大師三論』の『悟性論』のみに銀海撰の序文が存することと併せて、補正の際に依據した本が、これら一聯の本とは別系統のものであったことを示すものとも考えられる。とすれば、それは、上に言及した高麗本、あるいは、それが基づいた宋版以外には考えられないわけである

が、實は、ここには、重大な疑義が含まれているのである。しかし、これについては、後で、再び考えてみたい。

3 『破相論』

最後に、『破相論』の成立について論じたいが、その方法として、『悟性論』と全く同一の方法を採ることとする。

ところで、『破相論』は、北宗の神秀作とされる『觀心論』の異本であって、敦煌本が數種、『禪門撮要』所収本など、朝鮮本に數種、更に、金澤文庫と眞福寺文庫に『觀心破相論』と題する寫本を合計四種傳えるほか、『少室六門』にも『破相論』と題して収められるなど、多くの異本の存在が知られている。そこで、先ず、それら諸本について一瞥しておかなくてはならない。

先ず、敦煌本である。敦煌本として、今までに、次の六本が知られている。

- 1 スタイン二五九五號
- 2 スタイン五五三二號
- 3 ペリオ二四六〇號
- 4 ペリオ二六五七號
- 5 ペリオ四六四六號
- 6 龍谷大學藏本

これら諸本の詳細については別に考察しなくてはならないが、『禪門撮要』所収本と同じく、『觀心論』と題していることから窺われるように⁽⁴⁵⁾、それらは、全て、朝鮮本と同系統に屬するようである。ただ、これらの諸本は、『觀心論』の元來の形態を探る上で、いかに重要なものであっても、五山版『達磨大師三論』との間に直接的な関係はあり得ないから、ここでは、これらに對する言及は避けることにしたい。

一方、朝鮮本としては、現存するものに、次の五本が知られている。

- 1 鷄林府刊本（元統三年〈1335〉刊）⁽⁴⁶⁾
- 2 安心寺刊本（隆慶四年〈1570〉刊）⁽⁴⁷⁾
- 3 開心寺刊本（萬曆八年〈1580〉刊）⁽⁴⁸⁾
- 4 報恩寺刊本（咸豐一一年〈1861〉刊）⁽⁴⁹⁾
- 5 『法海寶筏』所収本（光緒九年〈1883〉刊）⁽⁵⁰⁾
- 6 『禪門撮要』所収本（隆熙元年〈1907〉刊）⁽⁵¹⁾

更に、記録に見えるものとして、無著のいわゆる南涌院藏朝鮮刻本の存在が知られるし、同じく、無著の言う「養華院萬山手寫本」も同系と思われる⁽⁵²⁾。しかし、これらは、いずれも、「觀心論」と題し、その本文にも大きな相違は見られず、同系統と認めうるから⁽⁵³⁾、ここでは、影印本が流布している『禪門撮要』所収本を代表として採り上げ、他の本には言及しないこととする。

最後に、日本傳來の諸本であるが、金澤文庫には、次の三本を藏している。

- 1 建仁元年(1201)、大甫丸寫、『達磨和尚觀心破相論』
- 2 建長四年(1252)、夜叉王丸寫、『達磨和尚觀心破相論』
- 3 古寫本

1と2は、從來から知られていたが、椎名氏の前掲論文、「『少室六門』と『達磨大師三論』」によって、3の存在が初めて明らかにされた。ただし、その内容については不明であるので、遺憾ではあるが、以下において言及することができない。従って、ここで問題とすべきは、1と2である。

これらは、いずれも一三世紀の寫本であるが、『破相論』に言及する文獻として、源信作という『眞如觀』があり、その成立も一三世紀の初め頃とされているから⁽⁵⁴⁾、これら寫本が寫されたのは、その流布と呼應していたと考えられる。

この二つの寫本は、その標題が一致していることから窺われるごとく、同系統に屬している。即ち、兩者の本文には、一致點が非常に多いうえに、全く同じ箇所錯簡が存在し、會昌五年に書かれた龔朗なるものの跋文も共通するのである。

既に、關靖氏も述べておられるように⁽⁵⁵⁾、1は、2に較べて書寫年代が古いうえ、寫誤も少ないが⁽⁵⁶⁾、本文獻を『金澤文庫資料全書』に収めるに当たって建長四年本を底本とした鏡島元隆氏が言われたように、その寫本には、「剥落の箇所が處々にみられ、底本とできないものである」から⁽⁵⁷⁾、以下においては、鏡島氏に倣って、建長四年本をテキストとして採用することとしたい。従って、以下において、「金澤文庫本」と表記されている『破相論』は、原則として、全て、この寫本を指すことを御承知をお願いしたい。

また、眞福寺文庫本についても、書寫年や書寫者は明らかではないが、標題を同じくし、龔朗の跋を有するばかりか、金澤文庫本と全く同じ錯簡が存在するなど、本文も近いから、やはり、同一系統の寫本であることは明らかであるので、先の「金澤文庫本」で、これを代表させることとし、以下においては、特に必要のない限り、

これには言及しないことにする⁽⁵⁸⁾。

次に、これら諸本を、五山版『達磨大師三論』の『破相論』の割行部分、及び空白部分について比較すると次のようになる。

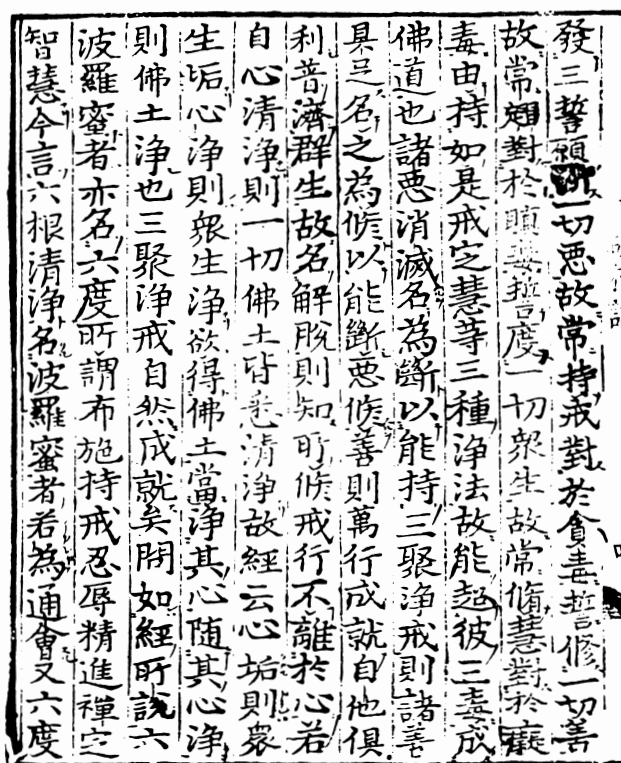
	五山版『三論』	金澤文庫本	禪門撮要本	五山版『六門』	箇所
A	生□	生及	生	生及	197／3
B	〈胡言〉	胡	胡名	胡言	198／20
C	〈名六〉	云	名六	云六	199／9
D	〈誓度〉	誓度	誓度	誓度	199／10
E	修□行	修苦行	修菩薩行	修行	199／12
F	斷一切惡故常持戒對於貪毒誓修一切善故常〈習定〉	持一切淨戒對於貪毒誓斷一切惡常修一切善	持三聚淨戒常修戒對貪毒誓斷一切惡故常修定對瞋毒誓修一切善故常修慧	斷一切惡故常持戒對於貪毒誓修一切善故常習定	199／12～13
G	〈不相〉應	不相應	不相應	不相應	205／16
H	〈無是〉處	無是處	無是處	無是處	206／9
I	〈外明〉	外明	常明	外明	207／5

先と同じように考えると、D、G、H、Iについては、当初は、金澤文庫本、『少室六門』本のいずれとも異なっていたと考えられるが、A、B、C、Eについては、元來は、金澤文庫本と同じであったとみてよいであろう。そして、このうち、Aのみは、『少室六門』とも一致していたと考えられる。

また、Fは、金澤文庫本と『少室六門』との間で、最も大きく文字が相違する部分であるが、この部分の末尾に、五山版『達磨大師三論』では、割行が見られるのである。ここで、この部分の字数を較べてみると、金澤文庫本が、十九字であるのに對して、『少室六門』本は二十一字であり、五山版『達磨大師三論』も、全くこれに同じい。しかし、實際に、五山版『達磨大師三論』の當該部分を調べてみると、末尾の「習定」が割行になっているのみならず、「一切」の二文字は、割行ではないものの、上下に一字分のスペースに刻されているのであり、従って、當該部分の文字数は確かに二十一字なのであるが、それが、ちょうど、金澤文庫本と同じ十九字分のスペースに刻されているのである。つまり、この部分においても、当初は、金澤文庫本と

全く同じ文字が刻されていたのである。特に、このFの部分、この當該箇所のみ文字が太く、明らかに他と字體が相違しているの、このことは、これら問題の部分が後からの補刻であることの有力な根拠となる（圖1 参照。第一行目から第二行目が該當箇所である）。

（圖1）



このように見えてくると、五山版『達磨大師三論』の『破相論』の当初のテキストは、今のものより、遥かに金澤文庫本のそれに近かったと想定されるのである。そして、それが補正された後のテキストは、多く、『少室六門』と一致しているが、しかし、全同ではない。特に、Aでは、補正によって『少室六門』とも異なるテキストになってしまっているし、Cのように、補正の結果、朝鮮本と同じになった箇所も見られるのである。

『破相論』の本文の補正が何に基づいたかは大きな問題であって、これについては、後で再び考えてみたいが、いずれにせよ、『悟性論』と『破相論』とに關しては、五山版『達磨大師三論』のそれは、當初は、今のものより、遙かに金澤文庫本に近い本文であったことは、ほぼ間違いないのである。それでは、五山版『達磨大師三論』と金澤文庫本との關係は、いったい、いかなるものであったのだろうか。次にこのことについて論じてみたいが、その前に、金澤文庫本の『悟性論』と『破相論』相互の關係を明らかにしておかななくてはならない。

五 金澤文庫本の『悟性論』と『破相論』との關係について

金澤文庫本の『悟性論』と『破相論』は、少なくとも現存するものについて言えば、書寫者も異なり、それぞれ別個に金澤文庫に傳えられたと見てよい⁽⁵⁹⁾。そして、『悟性論』の書寫は、文永十一年(1274)であり、『破相論』の書寫は、建仁元年(1201)、ならびに建長四年(1252)であるから、両者は、西暦一千二百年頃には、既に、全く別々に書寫されていたと推測される。しかし、兩者には、無視できない、極めて重要な關聯が見られるのである。そして、それが認められるのは、實は、先に言及した、無著のいう「雜華院唐古本」や金澤文庫本『悟性論』に見られる二つの附加部分においてなのである。

その第一のものは、金澤文庫本では、次のものであった。

度者運也。持者護也。禮者運也。拜者伏也。在口日誦。在心日念。念日憶也。心者出世之門戶。是解脫之關津。知門戶者。豈慮難入。識關津者。何憂不達。⁽⁶⁰⁾

これについて、かつて、禿氏氏は、「この一節は後人の附加したものとは思はれない。元來あったのが、寫傳せられる間に失はれ、『少室六門集』で見える様な形態となったものと思ふ。即ちこの古寫本の方が原形に近いに相違ない」と言われたが⁽⁶¹⁾、これに對して、椎名氏は、前掲論文で、「内容的に後代に潤色されている傾向をうかがわせるものである」と言っている⁽⁶²⁾。

しかし、この文章は、前後の文脈と繋がらないばかりか、その意味自體、明確ではないので、これを「後代の潤色」だなどと言うことは、とてもできない相談であろう。では、禿氏氏の言うように、これは元からあったのかと言えば、決してそうではない。というのは、これを『破相論』の本文と比較すると、これらが、それからの

抜き書きであるという事実が知られるからである⁽⁶³⁾。次に、試みに、この部分に對應する、『破相論』の文章を掲げてみよう（なお、括弧内は、椎名氏の翻刻の頁数と行数である）。

六度者運也。六波羅蜜喻若船筏。（200／11）

持者護也。所謂。於諸戒行。如法護持。（203／11）

夫禮者敬也。拜者伏也。所謂恭敬眞性。屈伏無明。名爲禮拜。（204／1）

且如誦之與念。義理懸殊。在口曰誦。在心曰念。（206／7）

念者憶也。所謂。憶持戒行。不忘精進。勤了如是義。名爲念。（206／4）

涅槃常樂。由息心生。三界輪迴。亦從心起。心是出世之門戶。心是解脫之關津。

知門戶者。豈慮難成。知關津者。何憂不達。（206／10～207／1）

下線部分が、金澤文庫本の附加部分に對應する。両者はほとんど全同であって、しかも、文章の順序もほぼ等しい。このことから、金澤文庫本の附加部分が、『破相論』の一部を恣意的に抜き出したものであることは明らかであろう。

恐らく、これは單なる備忘であって、それが、筆寫される過程で、誤って本文に紛れ込んだものであろうが、しかし、このことは、少なくとも、ある時期、金澤文庫本『悟性論』が、『破相論』と一緒に傳持されていたことを物語るものである。

第二の部分は、更に重要である。なぜなら、これは、金澤文庫本の『悟性論』と『破相論』とが、もともと連續して書寫されていたことを示すものであるからである。

先ず、問題の部分は、

三界所尊者謂之道。萬法同視者謂之門。⁽⁶⁴⁾

であるが、金澤文庫本『悟性論』は、これを、本文の末尾に掲げられた夜坐偈の後に書き添えているのである。

夜坐偈が七字四十句の詩であるから、恐らく、この二句も、その一部と見なされたのであろうが、夜坐偈の末尾の部分は、

妙理玄奧非心測。不用尋逐令疲極。若能無念即眞求。更若有求還不識。

（196／3）

であって、文章が續かないうえに、これら二句では一句八字となっており、字數そのものが一致しないのである。では、これは、後代の人が、勝手に附加したものか

といえば、そうではない。というのは、次のような重要な事実が知られるからである。

即ち、金澤文庫本『破相論』の冒頭部分は、最初に、

達磨大師破相論 可禪師門 無名僧序

という標題があつて、次に、いわゆる、無名僧の序文が、

道在身心。理無繩墨。眞如幽隱。超對治門。……

と續くのであるが⁽⁶⁵⁾、無著道忠が引く、高麗本『破相論』なるものの序文は、次に掲げるように、その冒頭部分が、これとは大いに異なっている。

觀夫三界所尊者。謂之道。萬法同觀者。謂之門。道在身心。理無繩墨。眞如幽隱。超對治門。……⁽⁶⁶⁾

つまり、金澤文庫本に比して、冒頭に十八字の附加があるのであるが、そのうちの十六字は、上に掲げた、金澤文庫本『悟性論』の末尾の附加部分と共通するのである。そして、文脈からみて、「三界所尊者。謂之道」というのは、「道在身心」というのと、よく對應するから、無著のいわゆる「高麗本」の方が、本來の形態を保つものとみてよいであろう。つまり、金澤文庫本は、『悟性論』において、誤つて、その末尾に『破相論』の冒頭部分を取り込むとともに、一方、『破相論』では、ちょうど、その部分を缺いているのである。

このことは、とりもなおさず、金澤文庫本の『悟性論』と『破相論』が、元來は、この順序で連續して書寫されていたことを示すものであろう。つまり、両者が、元來、連續していたがために、『破相論』の冒頭部分が、『悟性論』の末尾部分と誤られるというようなことが生じたのであり、ある時期以降、それぞれ個別に書寫されるようになって、その際の不備をそのまま傳えて來たのである。

六 金澤文庫本『悟性論』『破相論』と『達磨大師三論』の成立

上に、金澤文庫本の『悟性論』と『破相論』が、元來は一體のものであったということを論じ、その根據として、金澤文庫本が、『破相論』の序文の冒頭部分を缺く一方、『悟性論』の末尾に、その文が挿入されているという事實を掲げたが、いま、五山版『達磨大師三論』の『破相論』の冒頭を見るに、やはり、問題の一文を缺いてい

るのである。つまり、五山版『達磨大師三論』は、この金澤文庫本の不備をそのまま承けているのであって、このことは、五山版『達磨大師三論』が、少なくとも、その中の『破相論』に関しては、金澤文庫本の系統に属していることを示すものである。ところで、金澤文庫本『破相論』の末尾には、

此論乃是諸經骨髓。究竟眞門。依此教行。即名頓悟。縱有退失。猶勝二乘。時時看之。甚有道理。亦是默傳心印。時大唐會昌五年乙丑歲春二月八日寫。遇奉傳上日本和尚。結當來之因。

越州判懸汝洲子龔朗書。⁽⁶⁷⁾

と、その傳來の経緯を記しているので、これが、唐の會昌五年（845）に、龔朗なるものが書寫し、日本の和尚に與えたものを祖本とすることが知られるが、上に論じたごとく、元來、『悟性論』と『破相論』が、この順序で連続して書寫されており、しかも、その『破相論』の末尾に上掲の跋文があったとすれば、この跋文は、必ずしも『破相論』に限られるものと見做すべきではなくて、この兩者に共通するものであったと考えることができるのである⁽⁶⁸⁾。

それはともかく、五山版『達磨大師三論』の『破相論』が、この本を承けるということとは、とりまなおさず、それが日本傳來の本に基づくということであって、椎名氏と言われるように、中國に、既に五山版の元となった『達磨大師三論』が存在したわけではないことを如實に示すものである。そうであってみれば、上述のごとく、五山版『達磨大師三論』の『破相論』の本文が、當初においては、今のものより、金澤文庫本に近かったということも當然であるといえよう。

『悟性論』については、これまでの叙述では、このような確固たる證據を挙げることはできていないが、五山版『達磨大師三論』の本文が、當初においては、現行のものより、ずっと金澤文庫本に近かったらしいことは、『破相論』と同様であるから、やはり、日本傳來の寫本を底本とした可能性は十分に認められよう⁽⁶⁹⁾。

勿論、金澤文庫本の『悟性論』、『破相論』と、『達磨大師三論』のそれらとの間には、實に多くの文字の相違が見られるが、それらは、書寫の際に生じたものと考えて問題ないであろう。なぜなら、唐の會昌五年から、五山版『達磨大師三論』が刊行された至徳四年（1387）までは、實に五百年以上が経過しており、その間、ずっと書寫によって伝えられたのであるから、文字に相違が生ずるのはむしろ當然とも言えるからである。

實際、明らかに金澤文庫本系であることが確認される寫本として、『悟性論』には、金澤文庫本のほかに、眞福寺文庫本、雜華院唐古本の二種が知られ、また、『破相論』には、上述のごとく、金澤文庫本に三種と、眞福寺文庫本の存在が知られているが（後に論ずるように、慶應大學藏本の『破相論』に對校されている「イ本」も、これと同系統と見做しうる）、それらの間には、實に多くの文字の相違が認められるのである。

従って、五山版『達磨大師三論』が、唐の會昌五年に書寫され、後に日本に齎された「悟性論+破相論」という形態のテキストを祖本とし、日本での書寫の過程で生じた種種の異本の中のいずれかを底本としたという先の推定に無理があるとは思われない。

ただ、このように考えた場合、障礙となるのは、五山版『達磨大師三論』の『悟性論』に見られる、常樂院銀海撰の序文の存在であろう。というのは、金澤文庫本や眞福寺文庫本には、この序文がなく、また、「雜華院唐古本」についても、無著がわざわざ「無序」と註記しているから⁽⁷⁰⁾、やはり、序文がなかったと考えられるからである。日本傳來の本に銀海の序がなかったとすれば、どうして五山版にこれがあるのだろうか。あるいは、これは、底本を異にすることを意味するのではないのだろうか。

しかし、五山版『達磨大師三論』を實地に調べてみると、實に興味深いことに、この『悟性論』の序文のみ版式が異なっていることが分かる。即ち、五山版の版式は、次の三種からなっているのである。

a 『血脈論』の序文一丁。本文一丁～十一丁。

『破相論』の本文一丁～五丁。

b 『悟性論』の序文一丁～二丁。

c 『悟性論』の本文一丁～九丁。

『破相論』の本文六丁～十一丁。

a と c の部分は、行格は、二十字十一行で等しいが、界線の位置がやや異なり、また、版心の魚尾の位置も異なっている（圖2、及び、圖3参照）。これが二種類となっている理由は不明であるが、『破相論』という一つの文獻に對して、二通りの版式を用いていることからすれば、成立時期の相違などを示すものではなく、單なる便宜的理由に基づくのであろう。

(圖2)

達磨大師血脈論
三果混起同歸一心前佛後佛以心傳心不立文字
問曰若不立文字以何為心答曰汝問吾即是汝心
吾答汝即是吾心吾若無心因何解念汝汝若無心
因何解問吾問吾即是汝心從無始時大以未乃
至施為運動一切時中一切處所皆是汝本心皆是
汝本佛即是佛而復知是除此心外終無別佛可
得離此心外莫菩提涅槃無有是處自性真實非因
非果法即是心義自心是菩提自心是涅槃若言心
外有佛及菩提可得無有是處佛及菩提皆在何處
譬如有入以手捉虚空得否虚空但有名而無相

(圖3)

達磨大師悟性論
夫道者以齊滅為體備者以離相為宗故經云齊滅
是菩提滅諸相故佛者覺也人有覺心得菩提道故
名為佛經云離一切諸相即名諸佛是知有相是無
相之相不可以眼見唯以智知若聞此法者生一念
信心此人以義大乘起三界三界者貪嗔癡是返貪
嗔癡為戒定慧即名起三界然貪嗔癡亦無實性但
據衆生而言矣若返照了了見貪嗔癡性即是佛性
貪嗔癡外更無別有佛性經云諸佛從本來常寂於
三毒長養於白法而成於世尊三毒者貪嗔癡也言
大乘家上乘者皆是菩薩所行之處無所不乘亦無

これに對して、bの部分は、界線や魚尾の位置が異なっているのみならず、魚尾の形にも相違が見られる。その上、行格も、第一丁が二十字十行であるのに対して、第二丁は、二十字十一行であって一定しない(圖4参照)。

(圖4)

第1丁右

菩提達磨悟性論序
常樂院銀海序
聆夫天地無邊無際惟尚應量虚空廣大
無量是尚廣大徒無始以來非大非小性使無始
已來非量非邊真智所以太虛可取心不可把虛空
可捨心不可棄般若無見而能見是理涅槃無生而
能生此智見無見之見假名為真智生無生之生假
稱為真理此智真智而非但智無生所生故此理真
理而非但理無見所見故于妄知非但智者常見涅
槃理非但理者常生般若智般若智不二而理智
宛然理智宛然般若涅槃無體但有名字名字無林

第2丁右

智不及見聞無窮知解不可著文字不可依言說若
看文字不可作心不可任心不可止心不可滅心自
性真佛誰作任止滅門覺妙性佛不說一字善星八
萬調達六萬年誦誦欲是不見性說故善哉不運一
毫之功全開寶藏非用般若之力頓獲玄珠懷常可
病達善見藥王康康形者得天衣妙服誰智人乍值
此論不登虚空山哉

特に、この二丁のみが、このように異なる版式を採っていることは、やはり、特別な意味を持つと解さなければなるまい。恐らく、これは、この部分が後に他本によって補われたことを示すものであると見てよからう。とすれば、五山版『達磨大師三論』は、少なくとも『悟性論』に関しては、なんらかの異本、それも、金澤文庫本系統に属さないある本を参照していることになる。そして、金澤文庫本や『少室六門』本と異なる文章に改められた場合、その本が、主として、『悟性論』の本文の補正に際して用いられたと考えてよいことになるだろう。

それは、先に述べたように、高麗本、あるいは、それが基づいた宋版以外には考え難いのであるが、無著の掲げる高麗本『悟性論』の序文は、どういうわけか、「常樂院銀海序」という撰者名を缺いているのである。もし、これが、無著の不手際でないとすれば、高麗本には、これが無かったことになる。とすると、五山版『達磨大師三論』が参照した本は、高麗本ではなく、それ以前の本、即ち、宋本ということにならざるをえないであろう。

ところが、ここには、先にも少しく触れたように、重大な疑義があるのである。というのは、『悟性論』において補正された部分の文字は、高麗本の系統を引くと考えられる『新刊懸吐禪門撮要』所収本とは、必ずしも一致していないのである。先にも述べたように、『新刊懸吐禪門撮要』のそれらの部分の多くは、五山版『少室六門』と共通し、しかも、そのような部分が改められている例がしばしば見られるのであるから、これらの場合、宋版などに基づく補正であるとは、とても見做しがたいのである。

しかも、銀海の序文も、私見によれば、稚拙な文章と見受けられるから、柳田聖山氏の主張されるように⁽⁷¹⁾、銀海を日本僧とする見方がでてくるのも十分に頷けるのであるが、無著が言うように、高麗本に、既にこの序文があったとすれば、銀海を日本人と見ることは、なんとしても許されないであろう。とすれば、椎名氏が前掲論文で指摘している、建昌軍の常樂院などを考慮に入れるべきであろうと思われる⁽⁷²⁾。

以上の考察よりして、甚だ不自然なことではあるが、銀海の序文は、宋本から補われたが、その本文の補正は、必ずしもそれに基づくものではなかったと結論せざるをえないと思われる。

『破相論』に宋本や高麗本があったかということについては、懷疑的にならざるをえない。というのは、『破相論』には、『血脉論』や『悟性論』に見られるような、

刊行に際してのものと見られる序文がないし、無著の言及以外には、いかなる文獻にも、その存在を示す記録を留めていないからである⁽⁷³⁾。しかも、敦煌本や朝鮮系の諸本は、いずれも『観心論』系に屬し、『破相論』系の日本傳來の本とは、明らかに系統を異にしているのであるから、なおのことである。

しかし、無著は、「高麗本」と稱するものの序文を掲げており、しかも、その序文には、金澤文庫本に見られる不備がないのであるから、どうしても、それが、日本の諸本とは別系統のものであったと考えざるをえないように思われる。とすれば、五山版『達磨大師三論』が、本文の補正に用いた本が、それであったことも考えられるわけであるが、後に論ずるように、五山版『達磨大師三論』の本文自體の變遷からは、それを確證することはできないので、假に、無著の言うように、『破相論』に高麗本があったことを、そのまま是認したとしても、それは、『達磨大師三論』の補正には、何らの影響をも與えなかったと考えざるをえないのである。恐らく、その理由は、その本が、極めて稀れな天下の稀觀書であったことに求めることができよう。

七 金澤文庫本の將來者について

上に考えたように、金澤文庫本の『悟性論』と『破相論』とが、元來、一體であり、會昌五年の書寫であることを示す『破相論』末尾の跋文は、實は、『悟性論』と『破相論』とに共通のものであったとすると、次に問題とすべきは、これを我が國に傳えたのは、いったい誰だったのか、ということであろう。

跋文にいう、「日本和尚」を同定する手掛かりは、「會昌五年乙丑歲二月八日」という紀年と、「越州」という地名だけである。會昌五年（845）當時、中國にいた主要な日本人僧として、圓仁、圓載、慧萼の名を挙げることができる。そのうち、圓仁については、彼の『入唐求法巡禮行記』の記載によって、二月八日には、長安にいたことが知られるから、恐らく、関係はないであろう⁽⁷⁴⁾。

これに對して、圓載に關しては、越州は直接的關係をもつて現れてくる。先ず、同じく、『行記』の會昌四年二月の條に、圓載が、「越州軍事押衙姓潘」なるものに託して、圓仁に書を送ったことを記し、また、その潘押衙の話として、圓載が入京を希望し、越州の牒を請うけて、潘押衙に託して中書門下に進めたが、宰相に却下され、入京は叶わなかった由を記載している⁽⁷⁵⁾。更に、この九年後の、大中七年（853）、圓珍の入唐に際して、やはり、圓載は越州からやってきて、國清寺で彼に逢っている⁽⁷⁶⁾。

しかし、圓載は、乾符四年（877）、歸朝に際して、携えた數千卷の佛典、儒書とともに海に歿したから、假に、「日本和尚」が圓載であったとしても、それを日本に齎すことができたはずはないのである⁽⁷⁷⁾。

ここで考えるべきは、圓珍の『福州温州台州求得經律論疏記外書等目錄』にある、次の記載であろう。

達摩和上悟性論一卷 隨身⁽⁷⁸⁾

この目錄が現在の形になったのは、大中八年（854）九月二日のことであるが、書き始められたのは、同年二月七日であって、それは、ちょうど、圓珍が圓載に初めて會った直後に當たるのである⁽⁷⁹⁾。そして、『悟性論』と『破相論』とが、當初、連寫されていたとすると、その全體を『悟性論』と呼んだことも十分に考えられることである。

しかし、この目錄の記載をみると、二月八日以降については、所得に従って書き足したと見ることができるが、この「達摩和上悟性論」は、二月十一日から十七日にかけて圓珍が自づから寫し取った「修禪道場碑銘」⁽⁸⁰⁾などよりかなり後、また、四月頃の求得と見られる「止觀輔行搜要記」⁽⁸¹⁾などより、更に後に列せられているから、『悟性論』が目錄に書き込まれたのは、やはり、四月以降と見なくてはならないであろう。

もしも、『悟性論』が圓載から贈られたものであったとすれば、二箇月以上もたって初めて目錄に記載されたこととなるが、これは全く不自然なので、やはり、圓載とは関係なく求得したと見なくてはなるまい。つまり、圓珍所得の『悟性論』は、金澤文庫本とは、全く別のものと見られるのであって、『悟性論』に関しては、相い隔てず、少なくとも二度、日本に將來されたことになるのである。當時、圓珍は、國清寺に在ったから、このことは、『悟性論』が浙江あたりでかなり流布していたことを示すものであろう。

慧萼については、圓仁の『入唐求法巡禮行記』の會昌五年七月五日の條に、

又日本國惠萼閤梨〔弟〕子。會昌二年禮五臺山。爲求五臺供。就李液德船却歸本國去。年年將供料到來。今遇國難還俗。見在楚州云云。⁽⁸²⁾

と見え、金澤文庫本の祖本が寫された五箇月程後には、楚州邊りにいたらしい。もっとも、小野勝年氏は、當時、圓仁がいたのが「蘇州」であるから、この「楚州」は誤字で、「蘇州」の誤りであろうという⁽⁸³⁾。蘇州ならば、越州からそれほど隔たつてはい

ない。また、これより先、會昌四年（844）の三月から五月にかけて、慧萼が蘇州の南禪院にあって、『白氏文集』の書寫を行ったことが確認されている⁽⁸⁴⁾。とすれば、金澤文庫本の跋にいう「日本和尚」が、慧萼を指す可能性は十分にある。

慧萼は、しばしば日本と唐の間を往復したし⁽⁸⁵⁾、その所得の本が日本に齎され、流通したことも知られている。即ち、彼が、白居易の生前に、その自筆本によって書寫した、かの貴重なる『白氏文集』は、日本に伝えられ、種々の轉寫本を生んだのである。そして、實際、かつて、その系統を引く本が、かなりの數、金澤文庫に傳わっていたことが知られるのである⁽⁸⁶⁾。従って、同じく金澤文庫に伝えられた『悟性論』や『破相論』が、慧萼が齎したものに基づく可能性も否定することはできないであろう⁽⁸⁷⁾。

八 『少室六門』の成立について

『少室六門』についても、椎名宏雄氏は、五山版以前に宋本が存在し、五山版は覆宋版にすぎぬという。しかし、少なくとも『破相論』については、これが金澤文庫本と同様、會昌五年に龔朗が書寫し日本の和尚に託した本を祖本とするものであることは確かであって、従って、氏の主張は成り立たない。それは、次の事實によって明らかである。つまり、『少室六門』の『破相論』には、末尾に錯簡がみられるが、これが、金澤文庫本に見られるようなそれを補正しようとした結果と見るのであ

る。先ず、敦煌本や朝鮮本によって、錯簡がないことが確認できる五山版『達磨大師三論』によって、この部分を示すと、次のような順序になっている。

- A 又六時行道者。……徒自疲勞。而於眞性。一無利益。又（203／6～10）
- B 持齋者。當須會意。……不免輪迴。豈成功德。（203／10～204／5）
- C 問。如温室經說。……欲令受持洗浴之法。（205／1～4）
- D 故假世事。比喻眞宗。……如來當爾。（205／5～12）
- E 爲諸大乘利根者說。非爲小智下劣凡夫。所以今人無能解悟。（205／12）
- F 其温室者。即身是也。……明知。洗外非佛說也。（205／13～18）
- G 問。經說。言至心念佛。……知關津者。何憂不達。（206／1～207／1）
- H 竊見今時淺識。……眞門幽祕。寧可具陳。略述（207／2～7）
- I 觀心。詳少分。（207／7）

ところが、金澤文庫本は、EからHまでの四つの部分を、誤って、AとBとの間に挿入してしまい、A-E-F-G-H-B-C-D-Iの順としてしまっているのである。従って、AとE、HとB、DとIの接續部分において、文が續かず、意味が通らなくなっている。そのため、金澤文庫本の錯簡は、一見して明らかなのであるが、この錯簡は、少なくとも、建仁元年や建長四年に金澤文庫本が書寫された時に生じたものではない。この錯簡の位置は、これら寫本の紙の繼ぎ目とは一致しないから⁽⁸⁸⁾、それ以前に生じていたのを、これら金澤文庫本は、その錯簡のままに書寫したのである。

ところで、『少室六門』の『破相論』にも、ちょうどこの部分に文章の順序の相違が見られる。このこと自體、金澤文庫本と『少室六門』との関係を物語るものであるが、そこでは、次のような複雑な順序を採る。

A-B-G-C-F-D-E-H-I

金澤文庫本の順序と較べて、この配列で重要なことは、やはり錯簡は見られるものの、AとBは正しく接續し、またHとI、DとEの間も正しく接續しているから、金澤文庫本に見られた不連續部分は、一應解消され、文意の通ずるものとなっているということである。依然として見られる錯簡は、GとFの部分であるが(GとFの部分を移動しさえすれば、元來の順序に復することができる)、Gの部分は、「至心念佛」についての獨立した問答であるから、その位置が、C、D、E、Fの『温室經』に關する問答と前後しても、文意の上では、なんら問題はない。また、元來、C-D-E-Fの順であった文章が、『少室六門』では、C-F-D-Eの順になっているわけだが、多少の不自然さは残るものの、何とか文意は通ずる。従って、『少室六門』の本文は、元來のものでないにしても、一應、理解可能なものなのである。

しかし、このような順序の変更をわざわざ行わなければならなかったのは、金澤文庫本のような文意の通じないものが先ずあって、刊行など、それをどうしても補正しなくてはならない理由が存在して、止むをえずなされたと考えるべきであろう。そうでなければ、このような順序の変更を敢えてする理由などありえないからである。従って、『少室六門』本は、金澤文庫本と同系統のテキストに基づきつつ、それに見られた錯簡を補正しようとした結果、このような順序になったのだと考えてよいであろう。

實は、金澤文庫本の錯簡は、ただ一箇所のみであって、このことに氣付けば、そ

の補正は簡単であったのであるが、『少室六門』の編者は、それに気付かず、止むをえず、錯簡部分を短い断片に分割して、なんとか文意の通ずるように、それを配列し直したのである。このこと自體、『少室六門』の編者が、乱丁の補正に資するような、信用するに足る對校本を持っていなかったことを示すものである。つまり、『少室六門』の『破相論』は、金澤文庫本系統の一本のみに基づいて成立したのである。

ところで、前述のごとく、五山版『達磨大師三論』には錯簡は存在しないのであるが、これも、實は、もともと錯簡がなかったのではなく、やはり、その刊行の際に補正が行われた結果と見做しうるのである。そのことは、二種の金澤文庫本（夜叉王丸書寫本と大甫丸書寫本）と、五山版の『達磨大師三論』、『少室六門』の比較、對照によって知ることができる。即ち、椎名氏の翻刻でいえば、二〇五頁の一六行目に、「惱塵」という句があるが、夜叉王丸書寫本には、五山版『達磨大師三論』同様、これがあるのに、大甫丸書寫本と五山版『少室六門』では、これを缺いているのである。つまり、この場合、錯簡のあるテキストとないテキストの雙方において、この句のあるものもないものが存在することになる。

また、これと同様の例として、二〇七頁七行目の「眞門」という言葉を擧げることができる。即ち、夜叉王丸書寫本が、この句を、『達磨大師三論』と同様、「眞門」とするのに對して、大甫丸書寫本と『少室六門』本は、ともに「眞如」としているのである⁽⁸⁹⁾。

今、理解の便のために、この関係を表に示せば、次のようになる。

	亂丁あり	亂丁なし
「惱塵」あり 「眞門」	夜叉王丸書寫本	五山版『達磨大師三論』
「惱塵」なし 「眞如」	大甫丸書寫本 五山版『少室六門』 (補正不十分)	—

このような事實を説明する假説としては、恐らく、次の二つ以外には考えられないであろう。

1. これら四つのテキストに共通する祖本に亂丁が生じ、その後、それが、二つの系統に分かれた。即ち、ある系統の寫本は、「惱塵」という

一節を脱し、また、「眞門」を「眞如」に誤った。しかし、他の系統の本には、そのような誤りはなかった。前者を承けるものが、大甫丸書寫本と『少室六門』本であり、後者を承けるのが、夜叉王丸書寫本と『達磨大師三論』本である。そして、このうち、『少室六門』と『達磨大師三論』は、刊行に際して亂丁の補正を行ったが、『達磨大師三論』の補正が正確であったのに對して、『少室六門』の補正は十分ではなく、一部に錯簡を残した。

- 2 四つのテキストの共通の祖本が、先ず、「惱塵」の一句を有し、「眞門」とする系統と、「惱塵」を脱し、「眞如」とする系統の二つに分かれ、その後、前者を承けるもののうちの夜叉王丸書寫本、後者を承けるもののうちの大甫丸書寫本と『少室六門』本の三本が、全く同じ箇所にも錯簡を生じ、そのうち、『少室六門』本のみがその補正を行ったが、結果的には不十分に終わった。

このうち、第二の假説は、系統を異にする寫本が、全く同じ箇所にも錯簡を生じたという、ほとんどありえないような假定を含まざるをえないがゆえに、全く現實性を持たない。それゆえ、第一の假説を採用せざるをえないのである。

つまり、現在の五山版『達磨大師三論』には、確かに錯簡を含んでいないが、これは、その底本の亂丁を、首尾よく補正した結果だと見られるのである。これも、『達磨大師三論』が日本傳來の寫本を底本にしたものであり、日本における編輯であることの有力な根據となろう。そして、このことから知られることは、日本傳來の『破相論』は、少なくとも、今日、その存在を知りうるものについては、全て、かつて錯簡が存在したということであって、このことは、この錯簡が極めて古い時期に起こったことを示すものである。

金澤文庫本『破相論』は、會昌五年に、龔朗が書寫して日本の和尚に託したものを祖本とするが、外國の和尚に不備のある本を託すなどということは、まずありえないことであるから、當初は、この錯簡は存在しなかったのであろうが、恐らく、その後、間もなく、これが生じ、以後の諸本は、全て、これを踏襲することになったのである。

『少室六門』の『悟性論』については、先に觸れたように、本文の文字が、『新刊懸吐禪門撮要』所収本と非常に近いことからして、恐らくは、高麗本、あるいは宋本などに基づくものであろう。特に、『少室六門』が、『悟性論』の末尾に『破相論』の

冒頭部を混じていないことは、注目すべきことである。しかし、『新刊懸吐禪門撮要』所収本との間にも、かなりの文字の相違が見られるので、それが據った底本は、恐らく、『新刊懸吐禪門撮要』の祖本である高麗本と見るよりは、むしろ、宋本そのものであったと考えるべきであろう。

なお、『少室六門』の末尾には、「圓始終常妙極眞離性情緣理空志照滅身至淨明」という二〇字を圓形に配した「眞性頌」なるものが附されている。これが、『人天眼目』巻六から取り込まれたものであることは明白であるが、『新刊懸吐禪門撮要』所収本『悟性論』の末尾に、これが添えられていることを考えると、これは、既に、高麗本に存していたのであろうし、その祖本たる宋本にあった可能性も否定できない。とすれば、『少室六門』は、それをそのまま承けたとも考えうるであろう。

ところで、この『人天眼目』の「眞性頌」には、次のような評が附されている。

達磨西來。九年面壁。獨神光立雪。斷臂自證。巧說不得。只許心傳。上根既契。便欲西歸。猶憐中下之機。強留二十字。稱云。眞性偈。翻復讀之。成四十韻。各有旨趣。蓋爲老婆心切。狼藉不少。庶幾。後代兒孫。因指見月。儻有個漢。向性字未形之前領略。文彩自彰。匪從他得。翻咲老胡。正好。痛與拄杖。

靈隱慧昭大師可光述⁽⁹⁰⁾

ここにいう、「靈隱慧昭大師可光」は、恐らくは、『續傳燈錄』卷一三に見える⁽⁹¹⁾、靈隱文勝（1026年頃の人）の弟子、靈隱照と同一人物であろう。大正藏本は、「慧昭」とするが、これに對校されている五山版では、これが、「慧照」となっている。五山版を是とすべきであろう。とすれば、一一世紀には、この頌は、既に、達磨のものとして流布していたことになる。

また、『少室六門』の『血脈論』についても、やはり、先に論じたように、任作哲が刊行した宋版に基づくものと考えることができる。

『少室六門』は、『達磨大師三論』と共通する、第二門『破相論』、第五門『悟性論』、第六門『血脈論』のほかに、第一門『心經頌』、第三門『二種入』、第四門『安心法門』の三つを収めているので、ここで、これらのソースについて、少し考えておきたい。

先ず、『心經頌』であるが、このテキストとして外に知られるものは、椎名氏が、その存在を指摘された『新刊懸吐禪門撮要』所収本のみである。このテキストについては先に觸れたが、その來歴も分からないうえに、誤字が甚だ多く、決してよいテキストとはいえない。朝鮮傳來の典籍は古形を保っている場合が多いので、この點で、この文獻

は、極めて異例である。しかしながら、先に掲げたような理由から、この本を日本の『少室六門』などに基づく翻刻と考えるのは、恐らく、無理であろう。本文に不備が多いのも、長い間、寫本として伝わっていたことを示すもので、却って、朝鮮傳來のものであることを證するものとも言える。従って、朝鮮には、この本が、古く伝わっていたと考えられるから、『少室六門』は、恐らく、その祖本（高麗本、あるいは宋本）に基づいたものと推測される。

第三門の『二種入』と第四門の『安心法門』が、元來、より長大な一つの文獻の一部であったことは、既に、鈴木大拙氏によって明らかにされている⁽⁹²⁾。即ち、これらは、いずれも、鈴木氏によって、「四行論長卷子」と名づけられたものから抜き出したものであって、後人が、その中の一部を達磨の教えのエッセンスとして別文獻に仕立てたものなのである。しかし、『少室六門』に収められるこれら文獻は、直接には、中國で既に行われていた抜粹に基づくもので、敦煌寫本⁽⁹³⁾や、それと密接な関係にある朝鮮本⁽⁹⁴⁾とは直接の関係をもたないごとくである。

そのうち、先ず、『二種入』については、『少室六門』以外にも、『續高僧伝』卷一六、『景德傳燈録』卷三〇、『佛祖歴代通載』卷九に、そのテキストが含まれているほか⁽⁹⁵⁾、卍續藏經に、「菩提達磨大師略辨大乘入道四行觀」と題する別行本を収めている⁽⁹⁶⁾。

『續高僧伝』、『景德傳燈録』、『佛祖歴代通載』に収められるテキストには、相互に本文に異同が認められるが、『少室六門』のテキストをこれらと比較してみると、曇林の序文は缺くものの、本文は『傳燈録』と全同である。ただ、末尾に新たに偈文が附加されている點は異なるが、これは、先に論じたように、同じ『傳燈録』卷三の達磨章から文章を抜き出して偈文の形に仕立てたものにほかならず、明らかに『少室六門』編輯の際に體裁を整えるために加えられたものであるから、なんら問題はない⁽⁹⁷⁾。

續藏に収められる別行本は、椎名氏によると、江戸期の刊本を底本にしているとのことであるが⁽⁹⁸⁾、『景德傳燈録』と比較すると、標題を同じくするばかりか、本文や曇林による序文もほとんど同文であるから、これも、明らかに『傳燈録』に基づくものである。従って、『景德傳燈録』の卷三〇からは、二種の別行本が行われたわけであるが、それら相互の間には、何の関係もなかったようである。

次に、『安心法門』であるが、このテキストとしては、『宗鏡録』卷九七、『正法眼藏』卷第二之上、『宗門聯燈會要』卷二、『諸方門人參問語録』にも含まれているほか⁽⁹⁹⁾、別行本の存在も知られている⁽¹⁰⁰⁾。

このうち、『諸方門人參問語録』のものについては、妙叶の跋文によって、洪武七年（1374）に、これが初めて刊行された際に附されたものであることが分かるが、その出典についても、標題の下に、「出聯燈會要」と註記されており、兩者を對校してみても、ほとんど完全に一致するから、問題とすべき點は何もない。

『少室六門』所収のものも、その標題下に「宗鏡及正法眼藏載之」という註記を有するが、『宗鏡録』のテキストと『正法眼藏』のそれとの間には、文字に多少の出入りが認められるし、『聯燈會要』所収のものとの間にも、また、わずかながら相違が見られるのである。しかし、それらを『少室六門』本と對照してみれば、それが、『正法眼藏』に基づくものであることは明白である⁽¹⁰¹⁾。

『少室六門』は、この末尾にも頌を附しているが、これも、前に論じたように、『血脈論』末尾の頌の一部と、『景德傳燈録』卷三の達磨章に見える頌を接合したものに過ぎず、やはり、『少室六門』編輯の際の附加と見做すことができる⁽¹⁰²⁾。

以上、見てきたように、『少室六門』に関しては、日本傳來の寫本以外では、宋版と見るべき、『血脈論』、『悟性論』、『景德傳燈録』、『正法眼藏』、ならびに『人天眼目』をそのソースと考えることができるのであるが、ここでは、既に論じた『血脈論』と『悟性論』を除く、残る諸本について、當時の流布の状況を探っておきたい。

まず、『景德傳燈録』であるが、これは、周知のごとく、景德元年（1004）に道原によって編纂されたものであり、楊億などの刊削を経て、大中祥符四年（1011）、敕版大藏經に入藏されて刊行されたほか、その後に関版された、東禪寺版大藏經、開元寺版大藏經、金刻大藏經、磧砂版大藏經、普寧寺版大藏經にも入藏しているので、日本へは、それらの大藏經とともに早くから渡來していたし、元の延祐三年（1316）刊本、泰定元年（1324）刊本などの單行本の流入もあった⁽¹⁰³⁾。そして、延祐三年刊本は、貞和四年（1348）に五山版として日本で翻刻されている⁽¹⁰⁴⁾。

次に、紹興一七年（1147）に大慧宗杲によって著された『正法眼藏』については、南北朝時代（1336～1392）極初期の刊行とされる、覆宋版の五山版が存在する⁽¹⁰⁵⁾。

『人天眼目』については、『少室六門』が、直接、それに基づいたかどうかについては問題が残るが、一應、ここで一瞥しておこう。『人天眼目』は、宋の淳熙一五年（1188）に、晦巖智昭が、編輯、出版したものであり、その後、寶祐六年（12

58)に、佛初大觀によって重修されたが、それが日本に流入して、乾元二年(1303)刊本を初めとして、五山版として、しばしば覆刻されたことが知られている⁽¹⁰⁶⁾。

上に述べたことから明らかなように、これらは、いずれも、『少室六門』が編輯された鎌倉時代(1192～1333)末期には、既に日本に流入していたと考えられるのであって、『少室六門』を日本で編輯することは、その資料の點からいえば、十分に可能であったはずなのである⁽¹⁰⁷⁾。

ところで、『二種入』や『安心法門』は、『少室六門』の編輯に当たって、他の文獻の中から取り出されたものと考えられるが、それは、必ずしも編者の獨創というわけではなかったようである。というのは、當時の文獻に、これらが、しばしば言及されており、既に、達磨の言葉として有名であったと推測されるからである。例えば、『二種入』については、虎關師鍊(1278～1346)の『濟北集』に次のように見える。

師曰。菩提達磨大乘入道四行。古有議焉。或言非達磨語也。或言祖師且垂誨誘。非西來旨也。因此。禪者不敢過目也。況措意乎。予讀傳燈。至此篇。加嘆而言。是實祖師之微言也。古來何謾議乎。其文有理入。有行入。此二入者。三世諸佛説化之通格也。⁽¹⁰⁸⁾

一方、『安心法門』に関しては、孤雲懷奘(1198～1280)撰の『光明藏三昧』に、

少林大師安心法門曰。問。世間人種種學問。云何不得道。答。由見己故。不得道。己者我也。至人逢苦不憂。遇樂不喜。由不見己故。⁽¹⁰⁹⁾

と引用されているし、納富常夫氏によれば、金澤文庫古文書六八四〇號には、劍阿(1261～1338)によって、

達磨安心法要云。諸方ノ有ハ即自心ノ有ナリ。諸法ノ無ハ即自心ノ無□□。

という書き込みがされているとのことであるが⁽¹¹⁰⁾、これは、恐らく、『安心法門』の、

見一切法有。有自不有。自心計作有。見一切法無。無自不無。自心計作無。乃至。一切法亦如是。竝是自心計作有。自心計作無。⁽¹¹¹⁾

という文章の取意であろうと思われる。

ここに掲げた諸文献の成立年代は不明であるが、『光明藏三昧』については、著者の生没年からして、『少室六門』以前と考えて間違いないだろうし、『濟北集』も、『傳燈錄』によって『二種入』に言及しているところから見て、恐らく、その刊行以前と見做してよいであろう。劔阿の書き込みについては、何とも言えないが、少なくとも、『少室六門』の編輯時期と、ほぼ並行する時期のものであることは確かである。

このような事実から見て、鎌倉時代の末期には、これらに対する認識は十分に高まっていたはずであって、達磨の語録の集成としての『少室六門』編輯の氣運は、既に熟していたと見ることができるのである。

従って、『少室六門』が出版された後は、それが、かなりの勢いで流布したであろうことは想像に難くない。大燈國師、宗峰妙超(1282~1336)の「大徳寺開山示寂原皇后假名法語」には、『血脈論』、『悟性論』、『破相論』からの引用がかなりの長文に互って見られるが⁽¹¹²⁾、恐らく、これらは、この五山版に基づいたのであろう。

九 叡山文庫本と五山版『達磨大師三論』の變化について

上に、『達磨大師三論』と『少室六門』が、日本において編輯、出版されるに至った経緯を考察したが、この二つが、いったん成立してしまうと、それが待望のものであっただけに、その影響力は禪宗を風靡し、それ以前には個別に取り扱われることの多かった各所収文献も、『達磨大師三論』、あるいは『少室六門』の一部として見られるようになっていった。そして、これら文献の書寫や刊行も、常に、『達磨大師三論』、『少室六門』という枠組みの中で行われるようになったし、引用も、ほとんど全て、『達磨大師三論』、あるいは『少室六門』に基づいて行われるようになっていったのである⁽¹¹³⁾。

従って、この二つの叢書が成立した後に書寫された寫本や刊本は、全てが、この兩刊本を承けるものであると云ってよいのであるが、上に論じたように、これらは、使用した底本が異なり、文字にもかなりの相違が見られるので、それら後代の諸本も、單純に一方だけに基づいて成立した場合は少なく、大抵は、他方、あるいは他の寫本を参照しているのである。

次に、これら諸本の系統を探ってみたいが、その前に、ここで、從來、全く注目されていない『達磨大師三論』の異本である叡山文庫所藏本を紹介するとともに、五山版『達磨大師三論』の本文自體が辿った變遷を一瞥しておかなくてはならない。

1 叡山文本について

この寫本は、叡山文庫の天海藏に収められる、縦 243mm、横 180mm、全五〇丁の綴葉装一冊本であり、表紙、ならびに裏表紙に「達磨血脈」と記されている。各葉八行一七字で、『血脈論』、『悟性論』、『破相論』の順に、端正な文字で書寫されており、全體に、返り點、送り假名が施され、脱字が補われているので、校正を経ていることが知られる。そして、末尾の『破相論』の尾題の下には、誰のものかは分からないが、花押が押され、それに續いて、本文とは異筆と思しき文字で、次のような跋が付されている。

モノノホンハハンギニテサフラフラ

ワレラウツシ□□

慶長九年閏八月二十三日ニウツシアゲ□

カンエモン（花押）

これによって、この寫本が、「カンエモン」なる人物を中心とする人々によって、慶長九年（1604）に、刊本を底本として寫されたものであることを知ることができる。

この寫本については、『山門藏本目録 又名天海藏』に、

達磨血脈 一冊 ⁽¹¹⁴⁾

と見えるのが、正しくこれに当たると考えられるのであるが、この目録は、末尾に、承應三年（1654）の大僧正公海の跋文を有し、その中に、

這箇一切經一藏。從一位右大臣源朝臣家綱公。爲佛法興隆所於御寄附。是實聰明智習而掌普天下。所以歸依三寶恩惠僧徒也。叡嶽之衆宜於感戴之。⁽¹¹⁵⁾

と見えるので、これが、徳川家綱から贈られたものであることが知られる。

ところで、この寫本には、五山版『達磨大師三論』に特徴的な割行文字の多くをそのままの體裁で書寫している所以、その刊記は寫されていないものの、これが基ついた刊本が五山版であることは間違いない。ところが、本文を比較してみると、次に掲げるように、實に多くの違いが見られるのである。

	五山版三論	叡山文庫本	箇所
血脈論	自由	自由分	181/11
	輪廻□	輪廻只（只は異筆）	181/19
	語言道斷	語言□□	184/1
	本性體上	本相體上	184/12
	嘆悲	嘆喜	186/3
	〈一切〉法	一法	186/5
	自爾	不假	186/21
	質礙	質界	187/14
	身是無□	身是無情	187/16
悟性論	心無動離	離無心動	187/19
	序文あり	序文なし	188/12 ~9/11
	〈若能〉返照	能返照	189/17
	捨身	捨心	190/3
	無心相處	妄想無處	190/9
	不一不異	不一不二	190/11
	解與不解	□解不解	191/13
	大道中證	大道中語	192/13
	更見涅槃	更求涅槃	192/14
	自〈本來未〉就文字	自來就文字	193/3
	〈亦如〉魚生於水	亦魚生於水	193/10
	爲三夏所消	爲三夏所清	193/14
	〈不在中〉流	中流	194/3
	□□亦云應身	化身亦云應身	194/5
	修智惠〈時即〉報身現	修智惠即報身現	194/5~6

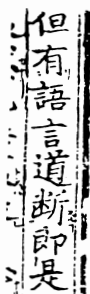
	五山版三論	叡山文庫本	箇所
悟性論	□□□□成道〈者報〉身佛	者即是雪山成道報身佛	194/6~7
	湛然常住〈者法〉身佛也	湛然常住法身佛也	194/7
	此謂三身者	此言三身者	194/8
	但據人智〈也人有〉上中下說	但據人智有上中下說	194/8
	知三身與萬法	知三心與萬法	194/10
	此之謂矣	此之爲矣	194/12
	業〈不造〉衆生	業造衆生	194/13
	妄說無報	妄說諸報	194/17
	若以至少而理	若以聖妙而理	194/17
	〈□經云心〉也	〈此經者心〉也	195/3
	受慕空中佛像	愛慕空中佛像	195/3
	何須生滅滅無餘	何須生滅滅生渠	195/9
	不起憶想同真性	不起憶想真如性	195/11
	五更般若照無邊	五更般若照無量	196/2
	なし	三界所尊者謂之道萬法同視者謂之門	196/3 の後
破相論	自誑於凡	有誑於凡	196/9
	不與牝牛同群	不與特牛同群	201/8

このような文字の相違は、いったい、どのように考えるべきであろうか。五山版『達磨大師三論』を元とし、それに他本を校合して本文を改めたと考えるべきであろうか。しかし、ここで重要なことは、先にも述べたように、叡山文庫本では、底本にあったと思われる割行部分や空白部分がそのままに寫されており、このことが、その書寫が極めて原本に忠實なものであることを示唆しているという事実である。従って、その底本であった刊本は、この通りの内容であったと考えるべきであろうと思われる。

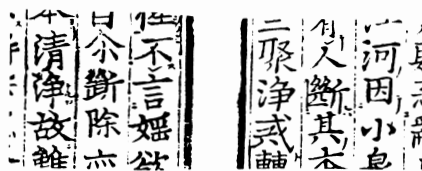
では、そのような刊本を、いったい、いかに位置付けるべきかというに、恐らく、現存する五山版である慶應大學藏本や駒澤大學藏本の祖型をなす刊本であると考えられるべきであろう。というのは、上に掲げた一覧に明らかなように、慶應大學藏本や駒澤大學藏本で割行になっている部分でも、叡山文庫本では、いまだ割行になっていない例がいくつか見えるが、先に論じたように、割行部分は本文を補正した痕と見られるのであるから、このことは、叡山文庫本が、原五山版が慶應大學藏本や駒澤大學藏本に改変される、その途上の形態を留めるものであることを示すものと考えられるからである。そして、このことを実証すると思われるのが、慶應大學藏本、駒澤大學藏本の相當箇所に見られる字體の相違である。

たとえば、『血脈論』では、叡山文庫本で「語言□□」となっている部分(184/1)において、五山版は「語言道斷」と、空白部分に「道斷」の二字を入れているのであるが、ここで使用されている「斷」という文字は、今日、我々が用いる略字體(當用漢字)となっている(圖5参照)。ところが、他の箇所に使われている文字は、後に言及する『悟性論』の序文を除いて、全て、圖6に掲げた二つの字體のいずれかなのである。

(圖5)



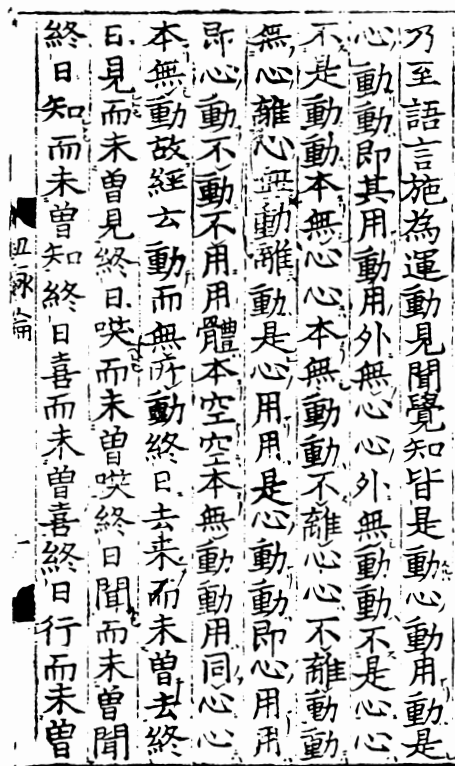
(圖6)



また、同じく『血脈論』において、叡山文庫本が「離無心動」とするところが、五山版では、「心無動離」となっているのであるが(187/19)、この部分の文字は、明らかにその周囲の文字とは書體が異なり、拙劣な文字となっている(圖7参照。寫眞の四行目の上から四～七字目)。

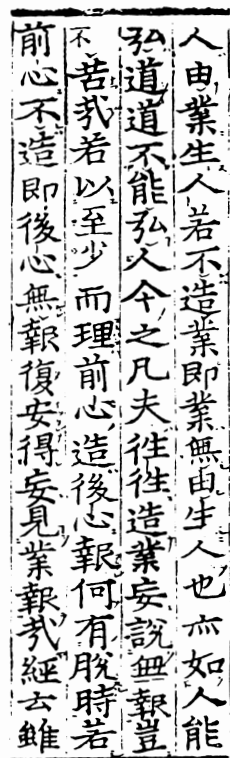
特に、「無」の字の上部が大きく、足の部分が一本の横線で表現されていることが目を引くが、これと同種の文字は、『悟性論』の「妄說無報」(194/17)の「無」の字でも用いられており、これが、同時の補刻であることは明らかである(圖8参照。寫眞の二行目の下から三字目)。

(圖7)



乃至語言施為運動見聞覺知皆是動心動用動是
心動動即其用動用外無心心外無動動不是心
不是動動本無心心本無動動不離心心不離動
無心離心無動離動是心用用是心動動即心用用
即心動不動不用用體本空空本無動動用同心心
本無動故經云動而無所動終日去來而未嘗去終
日見而未嘗見終日笑而未嘗笑終日聞而未嘗聞
終日知而未嘗知終日喜而未嘗喜終日行而未嘗

(圖8)



人由業生人若不造業即業無由生人也亦如人能
弘道道不能弘人今之凡夫徃徃造業妄說無報豈
不苦哉若以至少而理前心造後心報何有脫時若
前心不造即後心無報復安得妄見業報哉經云雖

また、同じく『悟性論』で、叡山文庫本が「無想無處」に作るところを、五山

版が「無心相處」とする部分(190/9)に見られる「無」の字も、その周囲のものとは、明らかに異なっており、やはり、その全體的な印象には、先の補刻部分のそれと共通するものが認められる(圖9参照。寫眞の二行目、下から七字目)。

いま一つ注目すべきことは、叡山文庫本が『悟性論』の序文を欠いていることであって、五山版のこの序文は、先に論じたように、版式の面から、後の補入と考えられるのであるから、このことは、やはり、叡山文庫本が、古形を留めている證據と見做すことができるであろう。特に、この序文に見られる「斷」の時が、先に補刻と推定した部分と共通することは重要と思われる(圖10参照。寫眞のはほぼ中央)。

(圖9)

名出家不受後有名得道不生妄想名涅槃不處無
明為大智慧無煩惱處名般涅槃無心相處名為彼
岸迷時有此岸若悟時無此岸何以故為凡夫一向

(圖10)

一心萬法一心誰論權實從本無迷縛誰始立悟解
凡聖平等凡聖絕名何謂斷縛開解迷迷迷迷無迷
迷悟悟悟悟無悟悟于爰南天香至大王第三王子

このように考えてくると、叡山文庫本が、現存する五山版に勝るとも劣らない、極めて重要な寫本であることが知られるわけだが、ここで注目すべきは、慶應大學藏本に見られる書き込みの存在である。即ち、この本には、『悟性論』と『破相論』に関して、全部で八箇所互に欄外に書き込みが行われているが、これは、「イ本」という異本との校合の結果を記したものであって、いま、その記載によって、「イ本」の本文を他本と対照しながら掲げれば、次のようになる。

『悟性論』

慶大イ本	五山版 『三論』	五山版 『六門』	金沢文庫本	叡山文庫本	箇所
不二	不異	不異	不異	不二	190／11
求涅槃	見涅槃	見涅槃	見涅槃	求涅槃	192／14
來	〈本來未〉	來	來	來	193／3
聖妙	至少	至理	至少	聖妙	194／17
愛慕	受慕	愛慕	受慕	愛慕	195／3

『破相論』

慶大イ本	五山版 『三論』	五山版 『六門』	金沢 文庫本	禪門撮要	叡山 文庫本	箇所
則自埋佛性	自埋佛性	序文なし	自埋佛性	序文なし	自埋佛性	196／7
有誑於凡	自誑於凡	序文なし	有誑於凡	序文なし	有誑於凡	196／9
事隨獲變	事隨權變	事隨權變	事隨獲變	事相外變	事隨權變	203／19

この対照表を見て気付くことは、『悟性論』に関しては、慶應大學藏本のいわゆる「イ本」が、叡山文庫本の本文と完全に一致しているということである。このことは、慶應大學藏本が對校に用いた本が、叡山文庫本の底本となった、より古い形態を留める五山版であったことを示すものである。つまり、慶應大學藏本は、他の刊本や寫本と對校したのではなく、甚だ興味深いことに、同じ至徳四年の刊記を持つ五山版同士、あるいは、それに基づく謄寫本と校合したことになるのである。そして、このことは、慶應大學藏本の空白部分に見られる

書き込み（これについては、本論文の第二節を参照せよ）の多くが、叡山文庫本の本文とよく一致するという事実をうまく説明してくれるのである。即ち、慶應大學蔵本は、いわゆる「イ本」と對校を行ったが、それと並行する形で、底本に見られる空白部を缺落と見做し、それを、一部、イ本によって補ったと考えられるのである。

ただ、上の一覧によって知られるように、『破相論』については、慶應大學蔵本の「イ本」は、叡山文庫本とは必ずしも一致しない。その字句から見ると、恐らくは、この場合、金澤文庫本系の寫本と對校しているのであろうと思われる。

慶應大學蔵本の「イ本」の存在は、私が先にその存在を推定した、叡山文庫本の底本たる、古い形態を留める五山版が存在したことの一つの有力な證據となるが、今一つ、これを實證するものとして、椎名氏が前掲論文において紹介されている、いわゆる「河村本」（伊勢修成氏舊蔵本）の存在がある。

この本については、氏によって、既に、「參道學道書」と題される慶長二年（1597）以前の寫本で、五山版の割行文字の若干が存在し、また、『悟性論』に序文がなく、夜坐偈の末尾に「三界所尊者謂之道。萬法同視者謂之門」の十六字が存在するということが明らかにされていた⁽¹¹⁶⁾。

これらの特徴は、全て、叡山文庫本と一致するので、私は、この本が叡山文庫本と系統を同じくする可能性はないかと考えていたが、その後、河村氏の御厚意によって、その實物を見る機会を得た。それを叡山文庫本と對校したところ、両者が極めて近い関係にあることを知ることができ、先の假説を確かめることができた。両者は、書寫年代も近いので、恐らく、全く同一の刊本に基づいたものと推測される。しかし、その本文は全同ではない。即ち、以下のような相違點が認められるのである（異體字や、寫誤と認められるものなどは除き、有意味と思われるもののみを掲げる）。

		叡山文庫本	河 村 本	箇 所
表 紙		達磨血脈	參禪學道書	—
血 脈 論	A	達磨血脈論序	達磨大師血脈論之序	180／1
	B	并黃檗傳心法要二說	なし	180／7
	C	自由分	自由	181／11
	D	〈外覓〉	外覓	181／13
	E	輪廻〔只〕	輪廻縁	181／19
	F	佛無持犯	佛無犯持	182／18
	G	〈作如〉	作如	183／2
	H	語言□□	語言道斷	184／1
	I	經云	故經云	184／16
	J	作業	作業者	187／6
	K	達磨大師血脈論一卷	達磨大師血脈論之終	188／11
悟 性 論	A	□解不解	解與不解	191／13
	B	見色者	見色性者	192／6
	C	如來種□	如來種子	192／15
	D	男相	男子相	193／7
	E	□□如來	如來如來	194／3
	F	妄說諸法	妄受諸法	194／17
	G	夜坐偈云	夜坐偈曰	195／8
	H	非有非無	滅有非無	195／15
	I	達磨大師悟性論	達磨大師悟性論終	196／4
破 相 論	A	始生□	始生子	197／3
	B	六度者運也	六度者是運也	200／11
	C	六波羅蜜喻若船筏	六波羅蜜者喻若船筏	200／11～12
	D	鏡益有情	以鏡益有情	202／16
	E	能避諸風	能避諸虱	205／10
	F	達磨大師破相論	達磨大師破相論終	208／1

ここで、先ず、気づくことは、叡山文庫本に見られる空白部分が、全て、なんらかの文字で埋められているということであろう。しかし、その文字は、必ずしも、刊行当初の、元來の形態を留めるものではないようである。

確かに、『血脈論』のE、Hは、『禪門撮要』本と、また、『悟性論』のEは、金澤文庫本と一致することによって、それらの文字が、當初、そこに刻されていた當のものであると考えられるのであるが、残された他の箇所 — 『悟性論』と『破相論』 — では、古形を伝える金澤文庫本のその箇所に在する文字と相違するばかりか⁽¹¹⁷⁾、『悟性論』のCでは、現存するどの異本とも一致しないのである。従って、河村本は、これらの部分においては、決して叡山文庫本以上に古い形態を伝えるものではないと言わねばならない。つまり、この本の場合も、『達磨大師三論』の多くの寫本がそうであるように、底本とした刊本にあった空白部に、後から文字を書き入れていると考えられるのである。

では、そこに書き入れられた文字には、何か基づくところがあったのかといえ、必ずしもそうではなかったようである。というのは、この本には、筆寫した者が獨自の見識によって本文を改めていることを窺わせる點がしばしば見受けられるからである。

先ず注目すべきは、『血脈論』のBの部分であって、河村本は、叡山文庫本で「惟
有達磨血脈論并傳心法要二説最爲至論」となっている任作哲撰の序文の一節から、「并傳心法要二説」という句を除いているということである。椎名氏の言われるように⁽¹¹⁸⁾、この序文は、任作哲が『血脈論』と『傳心法要』を一冊にして出版した際のもので、この一節は、『達磨大師三論』の一部たる『血脈論』の序文としては、甚だふさわしくないものであるから、河村本は、その邊のことを考えて、問題の一節を故意に削除したものと考えられるのである。

また、『血脈論』のJや、『悟性論』のB、『破相論』のB、C、Dなどでは、文字が補われているが、そこからは文章を整えようという意圖をはっきりと見て取ることができるし、『血脈論』のAやK、『悟性論』のI、『破相論』のFなどで、各文献の標題や尾題を改めているところにも、筆寫者の獨自性を窺うことができるのである。

このように見てくると、河村本を筆寫した人物は、單なる寫字生に留まるものではなく、一家言をもった人物で、校訂というほどのものではないにしても、みずからの私見に基づいて、一部、底本を改めていることが知られるのである。とすれば、

『禪門撮要』や金澤文庫本との一致は、単なる偶然と見なくてはなるまい。

いずれにせよ、上に述べきったところによって、河村本が、叡山文庫本と同系統に属するものではあるものの、その本文には、一部、独自の視点からする修訂が施されていることは明らかになったかと思う。従って、河村本は、原本の忠實な謄寫本と見られる叡山文庫本以上に古い形態を伝えるものとはいえないものの、叡山文庫本の本文も完璧ではないので、その共通の底本の本文を復元するためには、河村本との校合は是非とも缺かすことはできない。この點からしても、河村本の存在意義は、極めて重いと言えよう。

ところで、河村本が、底本の空白部分に書き込んだと見られる文字に注目してみると、極めて興味深いことが知られる。すなわち、わずか一例を除いて、その全てが、慶應大學藏本において空白部分に書き込まれている文字と一致しているのである⁽¹¹⁹⁾。

上に述べたように、慶應大學藏本が、叡山文庫本と同系統の本を参照していることは確かであり、一方、いま述べたように、河村本のこれらの部分は、その筆寫者の独自の見解に基づくものと考えられるのであるから、恐らく、慶應大學藏本が参照した本とは、外ならぬ、この河村本そのものであったと考えるべきであろう。そして、『血脈論』や『破相論』の空白部分への書き込みが、慶應大學藏本と一致しているということは、慶應大學藏本による河村本の参照が、『悟性論』に留まらなかったことを示すものである。

2 五山版『達磨大師三論』の本文の變遷について

上のように叡山文庫本を位置付けることによって、五山版『達磨大師三論』が、少なくとも二度の改變を経ていることを知ることができる。というのは、叡山文庫本は、確かに慶應大學藏本や駒澤大學藏本より古い形態を留めてはいるものの、既に、その一部に割行部分や空白部分を有し、また、叡山文庫本が慶應大學藏本や駒澤大學藏本と共通する部分においても、明らかに他の部分と字體の異なる部分が見られるので⁽¹²⁰⁾、これらの部分については後からの補刻と見做すことができるからである。

従って、当初は、これらの全くない本文が刊行され(a本)、その後、その不備に氣付き、それを訂正することによって叡山文庫本の底本が成立し(b本)、その後、更に、一部、修訂を施すことで、慶應大學藏本や駒澤大學藏本が成立したのである(c本)。

五山版『達磨大師三論』所収の各書については、先に、一應、割行部分や空白部分に着目しつつ、その成立を探究したが、ここで、再度、その後、明らかになった諸事實を踏まえたうえで、五山版『達磨大師三論』が辿った変化を示すとともに、その改変の際に依拠した文獻についても考察しておきたい。

先ず、例によって、後で文字が改められたと考えられる箇所本文の變化を一覧の形に示すことにする（なお、a 本については、當該部の文字數と異本との對照による私の推定であり、b 本は、主に、叡山文庫本に據った。また、← は、左と同じで變化がないことを、－ は、當該部が存在しないことを示す。なお、ここでは文字のみを問題にし、割行や空白の表示は省略する）。

		五山版『達磨大師三論』			参 考				箇 所
		a 本	b 本	c 本	五山版 「六門」	金澤文庫	禪門撮要	大谷大本	
血 脈 論	A	自由？	自由分	自由	自由分	－	自由	自由	181／11
	B	外	外覓	←	外覓	－	外	外覓	181／13
	C	輪迴縁	輪迴	←	輪回	－	輪迴縁	輪迴縁	181／19
	D	如是	作如是	←	作如是	－	如是	作如是	183／2
	E	其中	其中事	←	其中事	－	其中	其中事	183／18
	F	語言道 斷	語言	語言道 斷	語言	－	語言道 斷	語言道 斷	184／1
	G	？	本相	本性	本相	－	本相	本相	184／12
	H	除	除障	←	除障	－	除	除	185／11
	I	嘆喜	←	嘆悲	嘆悲	－	嘆喜	嘆悲	186／3
	J	一法	←	一切法	一切法	－	一法	一切法	186／5
	K	第一	第一於	←	第一於	－	第一	第一於	186／10
	L	無識	皆無識 佛	←	皆無識 佛	－	無識	皆無識 佛	186／11
	M	不假	←	自爾	自爾	－	不假	自爾	186／21
	N	質界	←	質礙	質界	－	質界	質礙	187／14
	O	無情	←	無	無情	－	無情	無精	187／16
	P	離無心 動	←	心無動 離	離無心 動	－	離無心 動	心無動 離	187／19

		五山版『達磨大師三論』			参 考				箇 所
		a 本	b 本	c 本	五山版 「六門」	金澤文庫	新刊懸吐 禪門撮要	大谷大本	
悟 性 論	A	序文なし	←	序文あり	序文なし	序文なし	序文なし	序文あり	188/12 ~9/11
	B	?	可以	←	可以	可以	可以	可以	189/15
	C	能	←	若能	能	能	能	能	189/17
	D	捨心	←	捨身	捨心	捨心	捨心	捨身	190/3
	E	妄想無處	←	無心相處	無相處	無想處	無相處	無相處	190/9
	F	不二	←	不異	不異	不異	不異	不異	190/11
	G	空間	←	空閑	空閑	空閑	空間	空閑	190/18
	H	乃*	乃名	←	乃名	乃爲	乃名	乃名	191/9
	I	?	解不解?	解與不解	解與不解	解與不解	解與不解	解與不解	191/13
	J	中語	←	中證	この部分なし	中語	この部分なし	この部分なし	192/13
	K	求涅槃	←	見涅槃	見涅槃	見涅槃	見涅槃	見涅槃	192/14
	L	種心	種	←	種	種心	種子	種	192/15
	M	亦可道	←	只可道	只可道	只可道	只可道	只可道	192/15
	N	可	不可	←	不可	可	不可	不可	192/16
	O	來	←	本來未	來	來	來	未	193/3
	P	男女相	男相	←	男相	男女相	男相	男相	193/7
	Q	亦	←	亦如	亦如	亦如	亦如	亦如	193/10
	R	別無菩提	←	無別菩提	無別菩提	無別菩提	名爲別菩提	無別菩提	193/15
	S	爲	化爲	←	化爲	爲	化爲	化爲	193/17
	T	如來如來	如來	←	如來	如來如來	如來	如來	194/3
	U	中流	←	不在中流	不在中流	中流	不在中流	不在中流	194/3

		『達磨大師三論』			参 考				箇 所
		a 本	b 本	c 本	五山版 「六門」	金澤文庫	新刊懸吐 禪門撮要	大谷大本	
悟 性 論	V	化身亦 云應身	←	亦云應 身	なし	亦云應 身	なし	なし	194/5
	W	即	←	時即	即	なし	即	即	194/6
	X	者即是 雪山	←	なし	修善雪 山	者即是 雙林	修善雪 山	修善雪 山	194/6 ~7
	Y	報身	←	者報身	者報身	報身	者報身	者報身	194/7
	Z	法身	←	者法身	者法身	法身	者法身	者法身	194/7
	a	無	尚無	←	尚無	無	尚無	尚無	194/8
	b	有	←	也人有	有	人有	有	有	194/8
	c	佛智	←	佛	佛是	佛	佛是	佛是	194/10
	d	三心	←	三身	三身	三心	三身	三身	194/10
	e	爲	←	謂	謂	爲	謂	謂	194/12
	f	造	←	不造	造	造	造	造	194/13
	g	諸報	←	無報	報	報	無報	報	194/17
	h	聖妙而 理	←	至少而 理	至理而 論之	至少而 理	至義論 之	至理而 論之	194/17
	i	云心	此經者 心	經云心	此經者 心	云心	此經者 心	此經者 心	195/3
	j	愛慕	←	受慕	愛慕	受慕	愛慕	愛慕	195/3
	k	生渠	←	無餘	生渠	生滅	生渠	生渠	195/9
	l	眞如性	←	同眞性	眞如性	同眞性	眞如性	眞如性	195/11
	m	無量	←	無邊	無邊	無量	無邊	無邊	196/2
	n	三界所 尊者謂 之道萬 法同視 者謂之 門	←	なし	なし	三界所 尊者謂 之道萬 法同視 者謂之 門	なし	なし	196/3 の後

		『達磨大師三論』			参 考				箇 所
		a 本	b 本	c 本	五山版 『六門』	金澤文庫	禪門撮要	大谷大本	
破 相 論	A	有誑	←	自誑	序文なし	有誑	序文なし	自誑	196/9
	B	生及	生	←	生及	生及	生	生子	197/3
	C	胡	胡言	←	胡言	胡	胡名	胡言	198/20
	D	云	名六	←	云六	云	名六	名云六	199/9
	E	?	誓度	←	誓度	誓度	誓度	誓度	199/10
	F	苦行	←	行	行	苦行	菩薩行	苦行	199/12
	G	持一切 淨戒對 於貪毒 誓斷一 切惡常 修一切 善	斷一切 惡故常 持戒對 於貪毒 誓修一 切善故 常習定	←	斷一切 惡故常 持戒對 於貪毒 誓修一 切善故 常習定	持一切 淨戒對 於貪毒 誓斷一 切惡常 修一切 善	持三聚 淨戒常 修戒對 於貪毒 誓斷一 切惡故 常修定 對 瞋毒誓 修一切 善故常 修慧	斷一切 惡故常 持戒對 於貪毒 誓修一 切善故 常習定	199/12 ~13
	H	特牛	←	牴牛	特牛	特牛	特牛	牴牛	201/8
	I	?	不相應	←	不相應	不相應	不相應	不相應	205/16
	J	?	無是處	←	無是處	無是處	無是乎	無是處	206/9
	K	外*	外明	←	外明	外明	常明	外明	207/5

*は眞福寺文庫本による推定である。

先ず、『血脈論』についてであるが、a本からb本への變化の過程で改められたことが確かなのは、BからFまでの五つと、H、K、Lの三つの、併せて八箇所である（AとGについては疑問が残るので、ここでの考察においては除外する）。

これらの變更箇所のうち、B、D、E、K、Lについては、五山版『少室六門』と宋版系の大谷大學本とで共通するが、C、F、Hにおいては、五山版『少室六門』とのみ一致するので、この際に依據した對校本が五山版『六門』であったことは明らかである。

これに對して、b本からc本への變更點は、A、F、G、I、J、M、N、O、Pの九箇所において認められるが、このうち、A、F、N、Pの四箇所によって、それが、宋版系の本に基づくものであったことが判明する（Oの箇所は、恐らく、「精」という宋版系の文字に改められたが、後にその部分が脱落してしまったのであろう）。

次に、『悟性論』であるが、明らかにa本からb本への過程での變更點と知られるのは、B、H、L、N、P、S、T、a、iの九箇所であって、これらの部分では、變更された後の文字は、全て、五山版『少室六門』と一致している。従って、この場合も、『六門』によって本文を修正したことが窺われる（大谷大學藏本とも一致するが、この本は、基本的には『少室六門』に基づくものであるので、これは當然といえる）。

一方、b本からc本への變化は、全部で、二十六箇所も認められるが、そのうちの多くは、やはり、五山版『少室六門』と共通する。しかし、A、C、D、E、J、O、V、W、X、b、c、f、g、h、i、j、k、lの十八箇所では、それと一致しない。このうち、V、c、f、h、j、lなどは、金澤文庫本と一致し、また、b、iなども、金澤文庫本に近いから、このことは、金澤文庫本系統の寫本を参照したことを示すものであろう。

しかし、逆に、金澤文庫本と共通する部分が改められている例も多いが、これらのうち、かなりの部分は、五山版『少室六門』と共通するので、引き續き、それに基づいて補正されたのであろう。また、A、C、D、E、J、O、W、X、f、kなど、日本傳來の諸本とは全く異なっている例も見出される。このうち、Aで新たに銀海撰の序文が加えられているのは、宋版に依據したものであろうが、本文の改變に関しては、必ずしも典據があったとはいえないことは、前述のごとくである。

最後に、『破相論』について考えてみよう。この場合、a本からb本への變化は、A、F、H以外の八箇所で認められるが、その大部分は、五山版『少室六門』と共通するので、やはり、この場合も、これに基づいたと考えることができる。

しかし、BとDの部分では、五山版『少室六門』とは一致せず、『禪門撮要』本とのみ一致している。このことは、その祖本である高麗本、あるいは朝鮮本を参照した可能性を示唆するものである。

一方、b本からc本への改變部については、Aは大谷大學藏本、Fは五山版『少室六門』とのみ一致し、Hについては、『禪門撮要』本、ならびに大谷大學藏本と一致する。しかし、このうち、Hについては、a本、b本の「特牛」が誤りであることは明ら

かであるし、Aについても、この句が、この少し前に出てくる「自欺於聖」と對句をなすものであることを考えれば、a本、b本の「有」が「自」の誤りであることは明白である。従って、これらについては、必ずしも、その典拠を求めるには及ばないであろう（無論、このことは、『禪門撮要』本の祖本などを引き續き參照した可能性を否定するものではない）。しかし、Fについては、そのままでも誤りとはいえないものであるから、何か基づくものがあつたと考えざるをえない。従って、この段階における改變にあつても、五山版『少室六門』が參照されたことは間違いないであろう。つまり、一部の修正漏れを、再度、それによって正したのである。

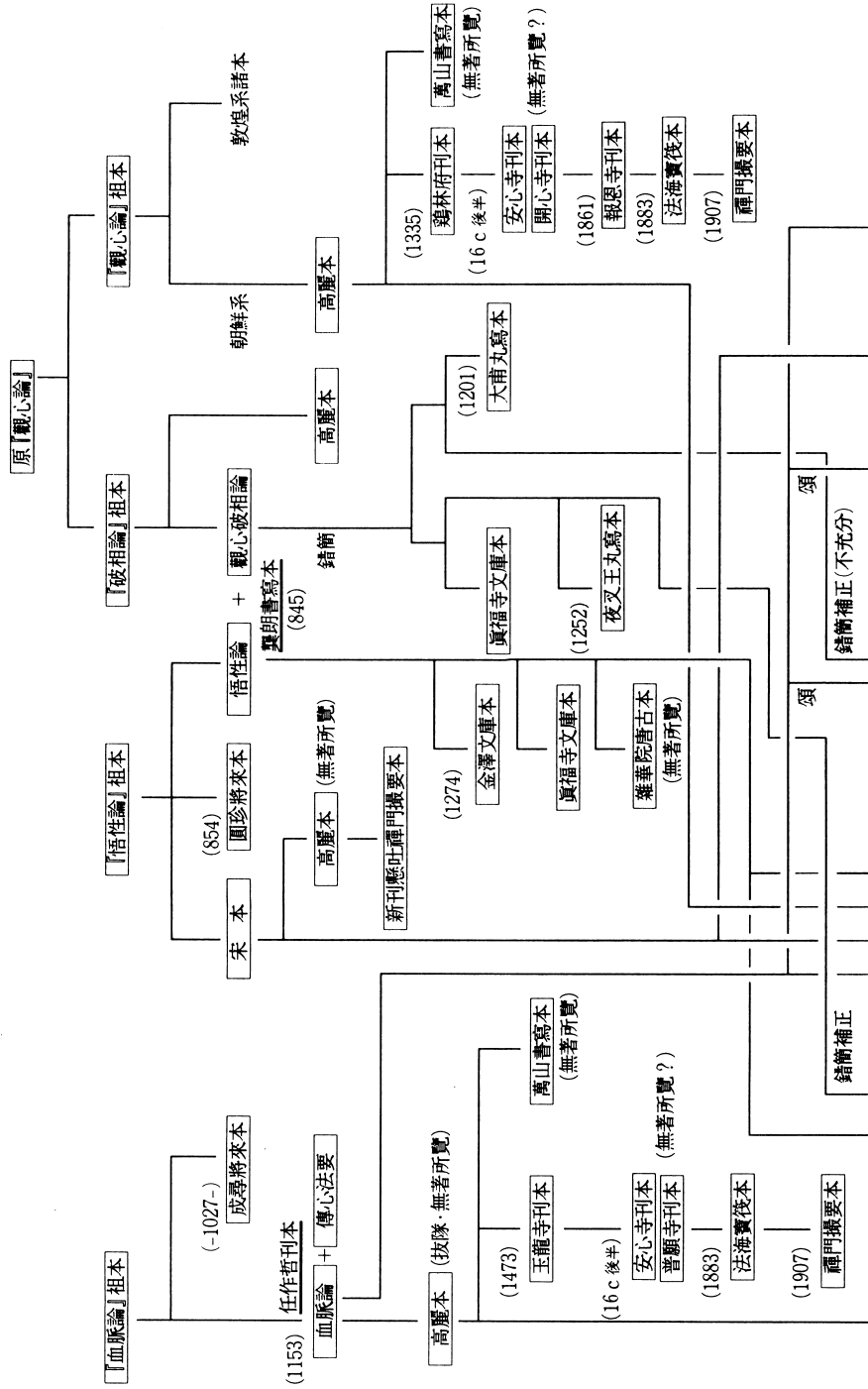
以上、見てきたように、五山版『達磨大師三論』の本文の補正は、a本からb本への第一段階では、『少室六門』に基づいて行われ、b本からc本への第二段階では、引き續き、『少室六門』に基づいて補正漏れを正すとともに、『血脈論』と『悟性論』に関しては、新たに目視することができた宋版も參照したと考えられるのである。

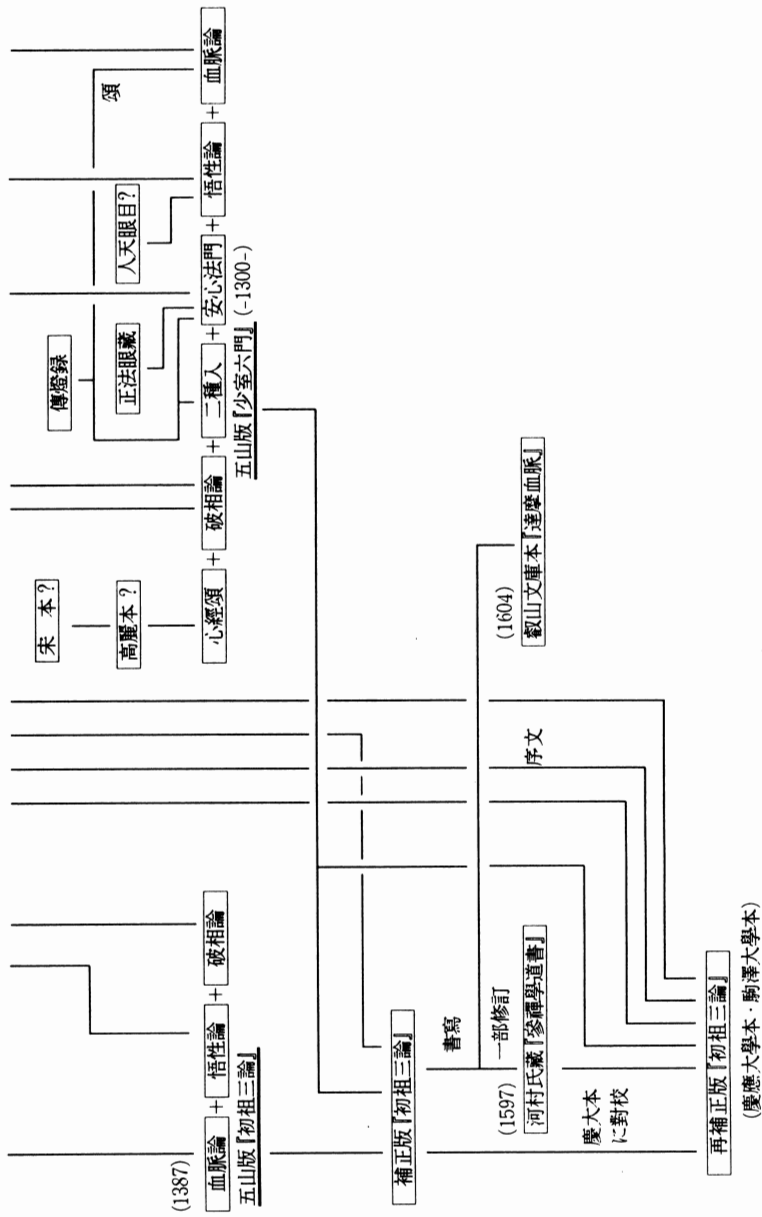
『破相論』については、高麗本を見たことを窺わせる形跡は認められるものの、その影響が甚大だったとは、とても言いえない。先にも言及したように、朝鮮系の諸本は、いずれも『觀心論』系に屬し、日本傳來の『破相論』系とは大いに本文を異にしているので、五山版『達磨大師三論』の編輯や補訂に携わった人々が、たとえ、それを見ることができたとしても、それによって本文を補正することは、少なくとも補刻という形でそれを行う以上、不可能であつたであろう。これが、『破相論』に補刻部分が少ない根本原因であらうと思われる。

無著の言を信ずれば、『觀心論』以外に、『破相論』にも高麗本があつたことになるが、五山版『達磨大師三論』の本文の變遷の上から見ると、それが參照された形跡は、全く認められないのである。それゆえ、そのような本がかつて存在したとしても、その本は、他系統の諸本に對しては、全く何の影響をも及ぼさなかったと考えられるのである。

次に、今までに論じてきたことに基づいて、五山版の『少室六門』と『達磨大師三論』の成立に至る諸本の系統を圖に示しておきたい（次頁參照）。

『初祖三論』と『少室六門』





一〇 『達磨大師三論』の諸寫本と古活字本について

以上で、五山版の『達磨大師三論』と『少室六門』についての考察をひと通り終えたので、次に、上の論點を踏まえながら、『達磨大師三論』の諸寫本、並びに二種の古活字版（そのうちの一本は續藏本の底本である⁽¹²¹⁾）の系統について考えておきたい。叡山文庫本と河村本については、既に上で論じたので、残るは大谷大學藏本、東北大學藏本、それに二種の古活字版の計四本である。

1 大谷大學藏本

先ず、大谷大學藏本であるが、これについては、先に述べたように、任作哲刊行の「血脈論+傳心法要」と、日本傳來の『悟性論』と『破相論』を併せたものと見られ、『血脈論』については、宋版そのものと見るべきであるから、今、問題とすべきは、『悟性論』と『破相論』の素性である。

椎名氏が既に述べられているように、この寫本は、「文字語句が五山版と大きく相違」するが、「この相違箇所が前述の五山版『六門』本に多く一致」し、また、『破相論』に限れば、『六門』系統には大きな錯簡が存在するというべきであり、他本では大谷本のみがこれを踏襲する⁽¹²²⁾。しかし、五山版『少室六門』には、三論のいずれにも序文がないのに、この寫本には、三つとも存在するから、これが五山版『少室六門』を承けるものであることは間違いのないにしても、そのみに基づいて成立したと考えるわけにはいかないのである。

更に、『破相論』については、次のような例も見られる。即ち、五山版『少室六門』で、「名之爲度。故知」となっている部分が、大谷大學藏本では、「故名解脱。則知名之爲度。故知」となっているのであるが、当該部分の五山版『達磨大師三論』は「故名解脱。則知」（200/3）であって、大谷大學藏本は、あたかも『少室六門』と『達磨大師三論』の文を併記した形になっているのである。同様なことは、『少室六門』が「誠知所言」に、『達磨大師三論』が「成佛如此言」（201/3）に作るのを、大谷大學藏本が「成佛如是。誠知所言」としているところについても言いうるのである。これらは、恐らく、もともと校異註であったものが、本文中に紛れ込んだものであろうが、大谷大學藏本は、その末尾に、「此論何點雖不如意也。任本書寫之。後見之人取捨之」と記しているので、このような不備は、大谷大學藏本が書寫された時に生じたのではなく、それが據った底本に既に存在したのであろう。

いずれにせよ、以上に述べたことから、大谷大學藏本は、『悟性論』と『破相論』

とについては、『少室六門』を主體とし、それに、『達磨大師三論』を對校するとともに、その文章の一部を混入していると考えることができるのであるが、ここで、次の二つのことが問題となろう。即ち、一つには、前述のごとく、五山版『達磨大師三論』には、本文の補正によって種々の異本が存在するが、大谷大學藏本が参照したものは、どの段階のものかということであり、いま一つは、このような對校が行われたのは、いかなる本においてであるかということである。

先ず前者について考えてみるに、『悟性論』に序文があることや、先に掲げた一覧で、c本のみと共通する字句が見出されること⁽¹²³⁾によって、それが再補正版に基づいたことは、ほぼ間違いない。

後者については多くの問題があり、確實なことは言えないのであるが、一應、考察しておこう。

先ず、確認しておかなくてはならないことは、先に述べたように、大谷大學藏本は、ある本をそのまま書寫したと考えられるのであるから、その系統の祖本（これを假にx本とする）において、宋版の『血脈論』+『傳心法要』と、『少室六門』中の『悟性論』+『破相論』が併せられたと考えなくてはならないが、では、そのx本の編者が、この對校を行ったと考えるべきかというに、恐らく、決してそうではないであろう。というのは、もしそうであれば、彼の手元には、もともと、對校に用いた『達磨大師三論』が存在したはずであるから、それをそのまま書寫すればよいので、何もわざわざ二系統の本を併せる形で『三論』を編輯する必要などなかったはずだからである。従って、その編者が取り込んだ『少室六門』自體に、既に『達磨大師三論』との對校に基づく書き込みかなされていたと考えるべきなのである（これを假にy本とする）。

今までに私が目視した『少室六門』の諸本には、このy本と同系統と認めうるものは存在しないのであるが、大谷大學藏本からは、どうしてもそのようなものが存在したと考えざるをえないように思われる。しかも、次に述べる東北大學藏本の祖本や、成實堂文庫所藏の古活字本の編者もこの系統の異本を見ていたようであるから、そのような『少室六門』は、一時期、かなり廣く流布していたとも考えられるのである。

2 東北大學藏本

次に、東北大學藏本について考えてみたい。これは、天正十八年（1590）の筆寫本であるが、これについて、椎名氏は、前掲の論文で、「五山版に基づく、ほぼ忠實な謄寫本であるから、ここで特記すべきものはない」と述べておられる⁽¹²⁴⁾。確か

に、この寫本の末尾には、五山版の刊記が書き寫されており、また、本文中にも、五山版特有の割行文字の若干が、そのままの形で書寫されているから、この寫本が五山版に基づくものであることは間違いない。しかし、本文の文字を一つ一つ對照していくと、かなり重大な相違が見られるのである。確かに、これらの相違のいくつかは、明らかに書寫の際の下手際と見るべきであるが、その多くは、他本との比較からして、決してそのように見ることは許されない。今、そのような箇所を、列擧すれば、次の一覧ごとくになる。

		五山版 『三論』	東北大學本	五山版 『六門』	大谷大學本	箇所
血 脈 論	A	序文あり	序文なし	序文なし	序文あり	180/2 ~11
	B	即	性即	性即	性即	181/15
	C	輪廻□	輪廻縁	輪回	輪廻縁	181/19
	D	眼睹	眼見	眼見	眼見	185/20
悟 性 論	A	序文あり	序文なし	序文なし	序文あり	188/12 ~9/11
	B	常在佛國	故常在佛國	故常在佛國	故常在佛國	192/9
	C	種□	種心	種	種	192/15
	D	男□相	男女相	男相	男相	193/7
	E	〈化爲〉	爲	化爲	化爲	193/17
	F	□□如來	如來	如來	如來	194/3
	G	□□亦云應身	化身亦云應身	この句なし	この句なし	194/5
	H	□□□□□	者即是雙林	修善雪山	修善雪山	194/6 ~7
	I	佛□	佛是	佛是	佛是	194/10
	J	なし	三界所尊者謂 之道萬法同視 者謂之門	なし	なし	196/3 の後
破 相 論	A	生□	生子	生及	生子	197/3
	B	亦	界	界	亦	197/8
	C	前	斯	斯	斯	198/1

		五山版 『三論』	東北大學藏本	五山版 『六門』	大谷大學藏本	簡 所
破 相 論	D	由	猶	猶	猶	198/4
	E	苦	苦海	苦海	苦海	198/6
	F	〈胡言〉	胡	胡言	胡言	198/20
	G	三毒成	三毒心也成	三毒心成	三毒心成	199/7
	H	所說	所說經	所說經	所說經	199/12
	I	修□行	修苦行	修行	修苦行	199/12
	J	名爲	名之爲	名之爲	名之爲	200/2
	K	故名解脫則知	故名解脫則知 名之爲度故知	名之爲度故知	故名解脫則知 名之爲度故知	200/3
	L	波羅蜜	六波羅蜜	六波羅蜜	六波羅蜜	200/7
	M	縱逸	放逸	放逸	放逸	200/9
	N	口賊	舌賊	舌賊	舌賊	200/10
	O	成佛如此言	成佛如此誠知 言所	誠知所言	成佛如是誠知 所言	201/3
	P	修	修造	修造	修造	202/3
	Q	豈遣	豈是遣	豈是	豈是遣	202/4
	R	三聚	以三聚	以三聚	以三聚	202/5
	S	得	可得福	可得乎	可得乎	202/15
	T	宣說	演說	演說	演說	202/16
	U	誤	若誤	若誤	若誤	202/19
	V	傷	傷損	傷損	傷損	202/20
	W	是	是故	是故	是故	202/21
	X	六時	晝夜六時	晝夜六時	晝夜六時	203/6
	Y	塔是	塔者是	塔者是	塔者是	203/7
	Z	當令	當修	當修	當修	203/7
	a	涅槃	涅槃時	涅槃時	涅槃時	203/8
	b	所爲內外	所謂內外	所謂內外	所謂內外	203/13
	c	觸	作解	作解	作解	203/16
	d	若有破	若亦有破	若亦有破	若亦有破	203/16

		五山版 『三論』	東北大學藏本	五山版 『六門』	大谷大學藏本	箇所
破 相 論	e	學	覺	覺	覺	204／3
	f	放縱	放逸縱	故縱	放逸縱	204／4
	g	能辟諸風	能避諸風	障風	避諸風	205／10
	h	彼	彼岸	彼岸哉	彼岸哉	206／4
	i	所修	所修念佛	所修念佛	所修念佛	206／9
	j	虚役	虚促	虚促	虚促	207／2
	k	無相	無爲	無爲	無爲	207／4

一見して、東北大學藏本に見られる、五山版『達磨大師三論』との相違箇所が、五山版『少室六門』や大谷大學藏本と、よく一致することが知られるが、『破相論』のK、O、Q、fなどの箇所によって、東北大學藏本が、本文の改變の際に基づいた本が、大谷大學藏本の系統に屬することが確認できる。

また、東北大學藏本には、本文は改められていないものの、「イ本」という形で、他本との校合の結果を行間に註記している例を二箇所見ることができる。

即ち、『悟性論』の夜坐偈の第二句、「怡神寂照泯同虚」（195／9）の「泯」字に對して、「胸、イ本ニアリ」という註記が見え、また、『破相論』の第二の問答の「不了心而修。費功而無益」（197／4）の「修」の字の下に、「イ本ニアリ、道則」と註記されているのである。

これらのうち、後者については、『少室六門』、大谷大學藏本、更には、金澤文庫本にも該當するが、前者については、大谷大學藏本にのみ該當する註記であるから（兩者とも、次に掲げる成實堂文庫所藏の古活字版とも共通するが、これも同系統である）、ここでいう「イ本」が、大谷大學藏本の系統の寫本を指すことは間違いない。つまり、東北大學藏本は、大谷大學藏本と系統を同じくする「イ本」と對校するとともに、それによって、五山版の本文を一部改めていると考えられるのである。

東北大學藏本の成立が、五山版『達磨大師三論』と、いわゆる「イ本」との存在を前提としているとしても、その二つのみによって、その本文の全てを説明するわけにはいかない。なぜなら、『悟性論』のC、D、E、G、H、Jや、『破相論』のFといった部分は、五山版にも大谷大學藏本にも一致しないからである。このうち、特に、『悟性論』のC、D、E、H、J、『破相論』のFの部分は、金澤文庫本系の諸本とのみ一致する。

それゆえ、恐らく、この本は、金澤文庫本系の古寫本をも参照しているのであろう。

なお、これらの部分については、至徳四年（1387）に刊行された当初の原五山版『達磨大師三論』の本文とも共通するが（元來、五山版は、金澤文庫本系の一寫本によったのであるから、これは當然である）、東北大學藏本が據った五山版は、決してその原刊本ではない。というのは、例えば、東北大學藏本の『悟性論』には、

夫文字者。本性解脱。文字不能就繫縛。繫縛自本來未就文字。（193／2～3）

という文が見られるが、ここの「本來未」は、他の多くの異本では、「來」、あるいは「未」となっており、これを「本來未」とするのは、東北大學藏本の外には、五山版の再補正版（先のc本）のみであり、また、同じく、東北大學藏本の『悟性論』には、

無心相處名爲彼岸。（190／9）

という句があるが、ここが「無心相處」となっているのは、外には、五山版の再補正版と、成實堂文庫所藏の古活字版のみであるから、それが據ったのは、再補正版であったと考えざるをえないからである。

従って、東北大學藏本は、再補正版の五山版『達磨大師三論』、大谷大學藏本系の寫本、金澤文庫本系の古寫本の三つに基づいて成立したとみることができるのであるが、ここで問題となるのは、東北大學藏本と大谷大學藏本との関係は、いったいいかなるものであるのか、ということである。これについては、大谷大學藏本の祖本の成立時期も東北大學藏本の祖本の成立時期も不明であるから、はっきりとした言えないのであるが、一應、先に言うところのx本に基づいたとしておきたい。

このように、東北大學藏本は、數種の異本に基づいて成立したと考えられるのであるが、この本を書寫した人物が、直接、その校合を行ったわけでは決してなからう。この本には、重複や脱漏がしばしば見られ、その書寫態度には、嚴格さを缺くものが見られるので、そのような人物が、わざわざ他本との校合を行ったとはとても考えられないし、もし、實際に對校を行っていたならば、當然、その誤りに氣づいていたはずだからである。それゆえ、二箇所に見える對校註も、恐らく、それが基づいた底本（假に、これをz本としておく）にあったものをそのまま書寫したものと見るべきであろう。それゆえ、東北大學藏本は、『血脈論』や『悟性論』の序文を缺いているが、その書寫者の性格を考えるなら、このことに特別な意味があると考えるには及ばないであろう。

3 古活字本

『達磨大師三論』の古活字本は、大東急記念文庫所蔵のもの（萩洞春寺舊藏）と成實堂文庫所蔵のもの（本漸寺舊藏）との二本が知られている。いずれも『達磨血脈論』と題し、刊記を持たないが、ほぼ同時期の刊行と見られている⁽¹²⁵⁾。椎名氏は、これを全く同一のものであるかのように扱っているが⁽¹²⁶⁾、既に川瀬氏が述べておられるように⁽¹²⁷⁾、この二つは、全くの別版である⁽¹²⁸⁾。そのことは次に掲げる、『破相論』の冒頭部を比較すれば、一目瞭然であろう。

大東急記念文庫所蔵本

達磨大師破相論
論曰若復有人志求佛道者當脩何法最爲省要
答曰唯觀心一法總攝諸法最爲省要 問曰何一
法能攝諸法 答曰心者萬法之根本一切諸法唯
心所生若能了心則萬法俱備猶如大樹所有枝條
及諸花果皆悉依根栽樹者存根而始生子伐樹者
去根而必死若了心脩道則少力而易成不了心而
修費功而無益故知一切善惡皆由自心々外別求
終無是處 問曰云何觀心稱之爲了 答菩薩摩
訶薩行深般若波羅蜜多時了四大五陰本空無我

成實堂文庫所蔵本

達磨大師破相論
道在身心理無繩墨真如幽隱超對治門不用言
無以鑒其幽不立心無以檢法印非迷名滯相則
三界輪廻趣寂沉空自理佛性般若若有而超有
有之因妙用不離乃越空之境住心執有者日
歎於聖不免輪迴滅色取空者自誑於凡沉埋若
若能無念即真求 若有求還不識
三界所學者謂之道萬法同視者謂之門達磨大
師悟性論

この二つは、版が別であるばかりか、實際に對校してみると、その本文自体にも、多くの相違點が見られるのであって、その系統は、それぞれ個別に考察されねばならない。

a 大東急記念文庫蔵本

この本が底本としたのが、再補正版の五山版『達磨大師三論』であることは、本文

の字句から疑いようがない。ただし、これは活字本であるため、それに特有の誤植を免れていない點は、今日の活版印刷となんら異なるところがない。例えば、『血脈論』(186/6)では、「功」を「切」に、『悟性論』(195/7)では、「未」を「來」に誤ったりしているし、『破相論』(200/5~6)では、「自然成就矣。問。如經所說六波羅蜜者」となるべきところを、「自然成就。問矣。如經所說六波羅蜜」と、誤って、違うところに文字を挿入してしまっている例などが見受けられる。しかし、それら誤植や異體字と認めうるものを除けば、その多くは、再補正版の五山版を承けていると言ってよい。

しかし、そのすべてが一致するかと言えば、そうとも言えない。次に掲げる諸點は、明らかに、故意に文章を改めたものと考えざるをえないからである。

		五山版『達磨大師三論』	大東急記念文庫藏古活字版	箇所
血脈論	A	輪廻	輪廻縁	181/19
	B	若自明了	若未悟了	182/5
悟性論	C	序文あり	序文なし	188/12~189/11
	D	□□□□□	者即是雪山	194/6
	E	者報身	報身	194/7
	F	者法身	法身	194/7
	G	眞性頌なし	眞性頌あり	196/4の後
破相論	H	序文あり	序文なし	196/6~13
	I	一切衆生皆有佛性	一切衆生悉有佛性	197/13
	J	自然生滅	自然生滅離苦	198/17
	K	斷一切惡故常持戒對於貪毒誓修一切善故常習定	持一切淨戒對於貪毒誓斷一切惡常修一切善	199/13
	L	是	是故	202/21
	M	虛役人夫	虛促人夫	207/2
	N	なし	而說偈言我本求心心自持求心不得待心知佛性不從心外得心生便是罪生時我本求心不求佛了知三界空無物若欲求佛但求心只這心心心是佛	207/7の後

これらのうち、B、Jなどは、他に全くその例が見られないので、独自の改変と見做すことができる。また、Iも、江戸時代刊行の『少室六門』などには、しばしば見ることができるものであるが、『涅槃經』のこの句が極めて有名であることを考えれば、必ずしもその典拠を想定する必要はなからう。

それ以外のもののうち、G、L、M、Nは、『少室六門』と一致するので、それに據ったのであろうし（なお、この『少室六門』がいかなるものであったかについては必ずしも明らかではないが、その刊行年からすれば、五山版、あるいは、その翻刻と見てよいであろう。『少室六門』の諸本については次節を参照されたい）、E、F、Kについては金澤文庫本と一致するので、その系統を引く古寫本に基づいたのであろう。また、Dについては、金澤文庫本は「者即是雙林」とするので一致しないが、五山版の元來のテキストは、叡山文庫本などに見るように、この古活字版と同様、「者即是雪山」であったのであるから、金澤文庫本の系統でも、その一部の本では、「者即是雪山」になっていたことが知られ、従って、ここも、金澤文庫本系統の寫本に基づいて本文を改めたと見てよいであろう。

このほか、CとHで、『悟性論』や『破相論』の序文を缺いていることが目を引くが、これは、明らかに故意に省いたのである。この刊本は、その實質は『達磨大師三論』でありながら、その全體を「達磨血脈論」と題しているばかりか、『血脈論』の序文のみを、全體の序文であるかのように別丁とし、版心には、全て「脈論」と記すなど、「達磨の血脈」という意味内容に基づくと思われるが、「達磨血脈論」という名稱を極度に重んじており、それを前面に出しているので、この二つの序文は、餘計なものとして削られたと考えられるからである。

以上によって、この古活字本が、五山版『達磨大師三論』を基礎としつつも、『少室六門』や、金澤文庫本系の古寫本に基づいて文字を改めていることが明らかになったが、このようなことが行われたのは、この本の出版に際して、よりよいテキストを提供せんとした配慮であったと思われる。しかし、その結果は、五山版で補正されたものを元に戻すなど、必ずしも善い結果ばかりをもたらしたとは言えぬごとくである。

b 成簀堂文庫藏本

大東急記念文庫の古活字版については、五山版との相違點が比較的少ないので、その系統はわりあい見やすいのであるが、この成簀堂文庫の古活字版については、その相違が餘りに多いし、他本との一致、不一致の關係も千差萬別であって、少なく

とも、現存する少数の異本をそのソースと想定することによって、その本文の全體をうまく説明することは不可能のごとくである。もし、そのようなことを企てるのであれば、恐らく、ほとんど全ての異本を導入しなくてはならなくなるであろう。このことは、この本の成立の複雑さを示すものであり、また、その出版に際して費やされた労力の大きさを窺わしめるものともいえよう。従って、この本の成立を明らかにすることは、事實上、不可能なのであるが、しかしながら、その編輯に際して、参照したことが確實な本を、二、三、指摘することは可能である。

先ず、先にも少し言及したことであるが、この本には、大谷大學藏本や東北大學藏本に見られるような、五山版『達磨大師三論』の本文と、五山版『少室六門』の本文を併記した部分が見られるので、これら諸本と何らかの関係をもっているものと考えざるをえないのである。

大谷大學藏本は、『悟性論』や『破相論』については、基本的には、『少室六門』そのままと言ってよく、『血脈論』については、直接には宋版を承けてはいるものの、『少室六門』の『血脈論』も宋版を承けているため、全體としては、『少室六門』と極めて近い本文となっている。

一方、東北大學藏本は、一部、金澤文庫本系の古寫本や、大谷大學藏本と同系統の異本によって、その本文を改めているが、基本的には、五山版『達磨大師三論』に沿ったものと言える。

それゆえ、この兩者には、多くの文章の相違が見られるわけだが、これら諸本と較べて言うことは、この古活字本の本文は、ある場合には大谷大學藏本に一致し、またある時は東北大學藏本に一致するといった具合で、ちょうど兩者の中間的な位置を占めているように見えるということである。

従って、この本は、この兩系統を何らかの形で承けていることは間違いないのであるが、このことに關聯して先ず言うことは、この本は明らかに東北大學藏本の系統の本に基づいているということである。そのことは、例えば、次のような點から窺うことができる。即ち、『破相論』の文章において、五山版が、「如鉞内燈光不能顯現」(197/12)となっているところにおいて、この古活字版は、「燈光」を「燒光」に作っている。これは、かなり不自然な表現であって、端的に誤りといつてよいようなものであるが、それにも拘わらず、他の諸本の中で、東北大學藏本のみが、やはり、「燒光」としているのである。

また、この古活字本には、一部、金澤文庫本と一致する部分が見られるが、それ

らの部分は、いずれも東北大學藏本と共通するから⁽¹²⁹⁾、直接、金澤文庫本系の古寫本に當ったのではなく、東北大學本經由で取り込まれたと考えることができるのである。しかも、この場合、重要なことは、この本が東北大學藏本が金澤文庫本によって本文を改めたと考えられる部分全てを承けているわけではないということであって、このことは、この古活字本が東北大學藏本の系統を承けたのであって、その逆ではないということを強く示唆する。

このように、この本が東北大學藏本の流れを汲むことが確かであるにしても、それだけでは、その本文の中で、『達磨大師三論』の系統を引くと考えられる部分の全てを説明することはできない。というのは、東北大學藏本は、五山版の一部を改めているのであるが、それらの部分において、この本が五山版とのみ一致する場合が見られるからである⁽¹³⁰⁾。従って、この本は、東北大學藏本の底本である五山版そのものも見ていると考えざるをえないのである。

他方、『少室六門』、あるいは大谷大學藏本の系統に関しては、この本には大谷大學藏本とのみ共通する部分が見られるので⁽¹³¹⁾、その系統の本、あるいは、大谷大學藏本が取り込んだ、五山版『達磨大師三論』との對校註を書き込んだ『少室六門』を、そのソースとして考えざるをえないと思われる一方、大谷大學藏本と一致せず、五山版『少室六門』とのみ一致する部分もあるから⁽¹³²⁾、これも参照していた可能性があるろう。

以上、見てきたように、この古活字本については、一應、五山版の『達磨大師三論』や『少室六門』、東北大學藏本系の本、ならびに大谷大學藏本系の本といった諸本に基づいたと考えられるのであるが、これでは、事實上、全ての先行する異本を承けているということになり、その系統を解明したことにはならない。ただ、言えることは、この本の編輯者が、できうる限りよい本文を提供しようと、目視しえた諸本の全てを校合に用いたであろうということのみである。

最後に、纏めとして、以上の考察によって明らかになった、『達磨大師三論』の諸本の系統を次頁に圖に示しておく。

『達磨大師三論』諸本の系譜

金澤文庫本系寫本

悟性論+破相論

任作哲刊本 (1153)

血脈論+傳心法要

五山版『少室六門』(-1300-)

再補正版『初祖三論』

血脈論+悟性論+破相論

心經頌+破相論+二種入+安心法門+悟性論+血脈論

心經頌+破相論+二種入+安心法門+悟性論+血脈論

y本『少室六門』

(-1630-)

大東急記念文庫『達磨血脈論』

破相論+血脈論+悟性論+傳心法要

x本『初祖三論』

z本『初祖三論』

(1590)

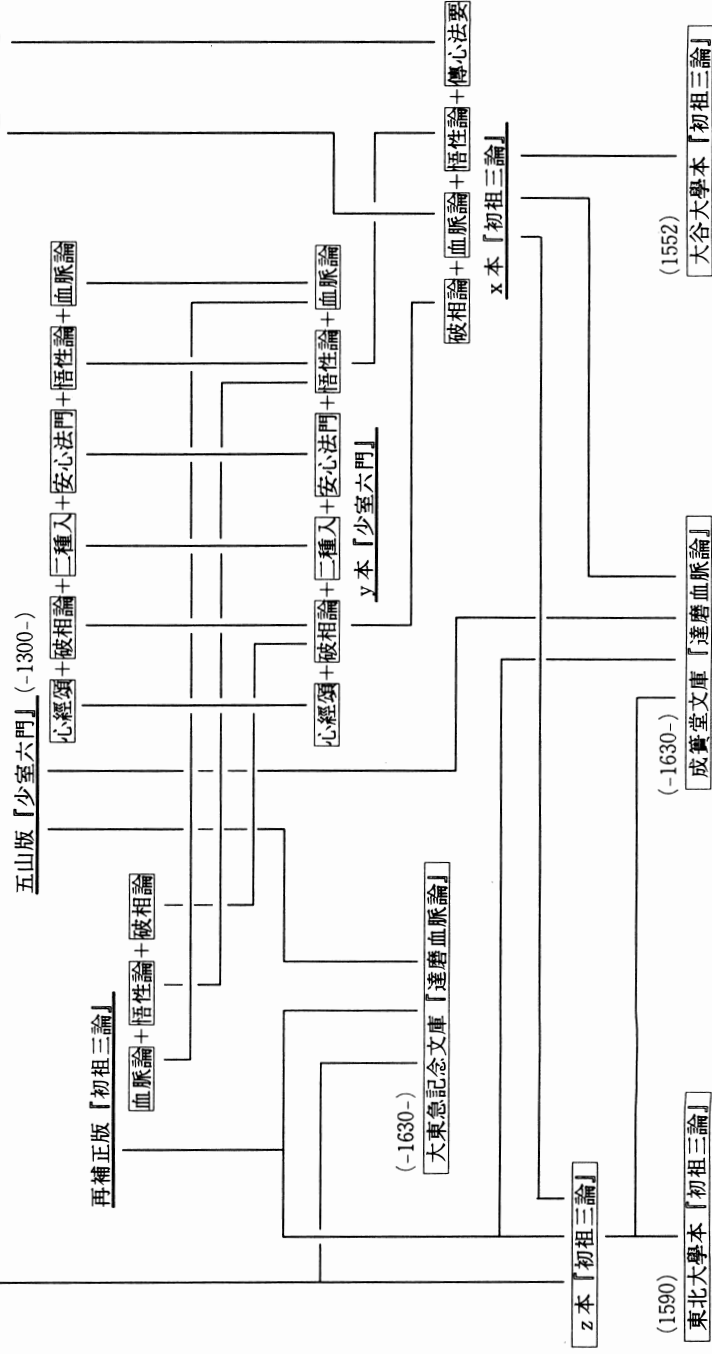
東北大學本『初祖三論』

(-1630-)

成實堂文庫『達磨血脈論』

(1552)

大谷大學本『初祖三論』



――『少室六門』の諸本について

『少室六門』の刊本として、私が現在までにその存在を確認しているのは、次に掲げる七種である⁽¹³³⁾（これらのうち、無刊記本については、以下、これを區別するために、便宜的に駒澤大學圖書館の圖書番号を用いて表示することにしたい）。

a 有刊記本

- 1 正保四年（1647）、江戸左太郎刊一冊本（駒澤大學圖書館 121. 2-7〈長徳寺舊藏本〉、早稻田大學圖書館 文庫7-595〈正福寺舊藏本〉）
- 2 寛文七年（1667）刊一冊本（駒澤大學圖書館 121. 2-1）
- 3 延寶三年（1675）、秋田屋五郎兵衛刊三冊鼈頭本（國立國會圖書館 821-145〈圓光寺舊藏本、一冊本に改裝〉、駒澤大學圖書館 121. 2-3）

b 無刊記本

- 1 刊年不明一冊刊本（駒澤大學圖書館 121. 2-8〈長徳寺舊藏本〉、叡山文庫 天海藏31-11、叡山文庫 眞如藏24-22、叡山文庫藥樹院藏6-120、叡山文庫 金臺院藏6-79）
- 2 大正藏所収、宗教大學藏、刊年不明刊本
- 3 刊年不明一冊刊本（駒澤大學圖書館 忽-107）
- 4 刊年不明一冊刊本（駒澤大學圖書館 121. 2-2）

一方、寫本では、次の二本が知られている。

- 1 内閣文庫所藏、書寫年不明一冊寫本（林羅山舊藏本）
- 2 河村孝道氏所藏、書寫年不明一冊寫本（安養寺舊藏本）

ここで問題とすべきは、これら諸本が、いつ、また、何に基づいて成立したかであるが、それについては、既に、椎名氏にひととおりの論及が見られる⁽¹³⁴⁾。しかし、私の見るところ、氏の議論には、なお、十分でない點が多く残されているように思われる。

例えば、氏は、なぜか、これら諸本において極めて重要な位置を占める、121. 2-8の無刊記本に言及しておらず、そのために諸本の位置付けが正確にはなされないままとなっている。

ところがその一方で、大正藏所収本に對して、その底本の存在を確認していないためか、「『少室六門』の正藏本を安易に資料として用いるのは、問題である」と不

信感を露わにしているのであるが⁽¹³⁵⁾、他本との関係を考える時、この刊本の存在には重要な意味があったと考えるので、明確な根拠もなく、その存在を抹殺しようとするのは、行きすぎであろうと思われる。

私は、次に、この問題を考察するに当たって、できうる限り客観的に叙述したいので、例によって、諸本の字句そのものを比較することで、その系統を明らかにして行きたいが、その全體に互る比較を行うことは、煩わしいばかりか、意味もないと思われるから、ここでは、末尾の『血脈論』のみを問題とし、それで解決できない問題が生じたときのみ、その他の部分を参照するといった方法を取りたいと思う。

先ず、次に、『血脈論』において、その系統を探るために重要と思われる本文の相違点のいくつかを、一覧表の形で列挙してみよう（次頁参照）。

この一覧を見て、先ず気づくことは、正保四年刊本、寛文七年刊本、延寶三年刊本、無刊記本の忽－１０７と、同じく１２１．２－２の五本の本文が極めて近いということであろう。これが、いわゆる、流布本に当たるわけであるが、特に、無刊記の忽－１０７と１２１．２－２は、その全てにおいて一致していることが注目される。そこで、この二つを比較してみると、字句のみでなく、その版式も一致するばかりか、文字の形、送り假名などの細部まで共通していることが知られる。このように両者は非常によく似ているが、明らかに版は異なる。そのことは、版心の部分に表示されている丁数が、前者が六門のそれぞれに個別に丁数を振っているのに対して、後者は通し番號になっていることから疑い得ない。従って、この二つは、一方が他方によって模刻したものであること明らかなのであるが字體や、丁数の付け方などから考えると、恐らくは、１２１．２－２が、忽－１０７に基づいて翻刻したのであろう。

延寶三年刊本については、一部に文字の相違が見られるが、それらの多くは、異體字とも見うるようなものであるから、なにか基づくものがあつたのではなく、恐らくは、読みやすくするために獨斷によって改めたに過ぎまい。

それ故、こらら諸本の関係を考察するうえで重要なのは、ＡとＵの二つの部分であることになる。この二つの部分において、雙方とも古形を保っているのは正保四年刊本であり、Ａの部分でだけ古形を保っているのは寛文七年刊本と延寶三年刊本、雙方ともに改められているのが、無刊記の忽－１０７と１２１．２－２ということになる。そして、この順序は、そのまま、それらの成立の順序を反映するものと言える。

刊年	「少室六門」										五山版 「三輪」	箇所
	刊 本								寫 本			
	五山版	121.2-8	大正藏 所収本	121.2-7	121.2-1	忽-107	121.2-2	121.2-3	内閣文 庫蔵本	河村本		
刊年	1300頃	?	?	1647	1667	?	?	1675	?	—	1387	
A	只是言	←	只言	只是言	←	只言	←	只是言	只是言	←	只言	181/9
B	若也	←	若又	←	←	←	←	←	若也	←	若也	181/1
C	盡皆	←	盡是	盡皆	←	←	←	←	盡皆	←	盡是	182/6
D	受法	←	受報	←	←	←	←	←	受法	受報	受報	182/15
E	輪回	←	輪廻	輪回	←	←	←	輪廻	輪回	←	輪廻	182/15
F	現在	←	見在	現在	←	←	←	←	現在	←	見在	183/5
G	廣大	←	曠大	廣大	←	←	←	←	廣大	曠大	曠大	183/11
H	惣是	←	總是	惣是	←	←	←	總是	惣是	←	惣是	183/16
I	若有	←	若	若有	←	←	←	←	若有	←	若	183/20
J	本身	←	本自	←	←	←	←	←	本身	本自	本自	184/6
K	只	云只	只	←	←	←	←	←	只	云只	只	184/6
L	敬禮	←	禮敬	敬禮	←	←	←	←	敬禮	←	禮敬	184/10
M	本相	←	本性	←	←	←	←	←	本相	本	本性	184/12
N	妄想	←	妄相	妄想	←	←	←	←	妄想	←	妄相	184/15
O	諸相	←	相	諸相	←	←	←	←	諸相	←	相	184/18
P	是成佛道	←	是成道	是成佛道	←	←	←	成佛道	是成佛道	←	是成道	185/19
Q	或夜	或	←	←	←	←	←	←	或夜	←	或夜	185/20
R	煩惱境	←	煩惱障	←	←	←	←	←	煩惱境	←	煩惱障	185/22
S	直會	←	真會	直會	←	←	←	←	真會	←	真會	186/5
T	自爾	←	不假	←	←	←	←	←	自爾	←	自爾	186/21
U	恩愛	←	因愛	恩愛	因愛	←	←	←	恩愛	←	恩愛	187/1
V	長短	←	短長	長短	←	←	←	←	長短	←	短長	187/2
W	只言	言	只言	←	←	←	←	←	只言	言	只言	187/7
X	汝即	即	←	←	←	←	←	←	汝即	←	汝即	187/12
Y	質界	←	質礙	←	←	←	←	←	質界	←	質礙	187/14
Z	是心用動	←	なし	←	←	←	←	←	是心用動	←	是心動	187/17
a	離無心動	←	心無動離	←	←	←	←	←	離無心動	←	心無動離	187/19
b	—	誦經	←	←	←	←	←	←	講經	←	講經	188/3

特に正保四年刊本は、第一門の『心經頌』が各行二十字であるのに對して（これは、明らかに、その基づいた121. 2-8の體裁を繼承したものである）、第二門以下は、全て、各行が十八字となっており、版式が一定しないばかりか、（これは、刻字工が異なるためと思われるのであるが）その部分部分で文字の字體が異なっているなど、不統一が目立ち、流布本の中では、その出版が古いものであることを物語っている。

従って、『新纂禪籍目録』が、忽-107を寛永年間（1624～1644）のものとして諸本の筆頭に掲げ⁽¹³⁶⁾、また、椎名氏が、「正保版と行格が一致」することのみを根據に、「流布本中では古版に屬する」とし、寛文七年刊本より古いものとして扱っていること⁽¹³⁷⁾に對しては、どうにも同意しかねるのである。

次に問題とすべきは、内閣文庫所蔵の寫本、ならびに、無刊記の121. 2-8と、五山版との類似であろう。

このうち、内閣文庫藏本については、椎名氏が、既に、「内閣文庫藏書の源流をなす、最古層の部類に屬する貴重な古寫本」で、「每半葉一〇行、每行二〇字（稀に二一字）の行格はもとより、文章のほぼ一字一句すべてが五山版と一致」し、それゆえに、「五山版にもとづく忠實な謄寫本と斷ぜられる」と述べておられるが⁽¹³⁸⁾、實地調査によっても、氏の主張の正しさは裏付けることができた⁽¹³⁹⁾。『血脈論』に限ってみても、上の一覽表で知られるように、兩者の字句は、ほぼ完全に一致する。唯一の例外はSで、五山版が「直會」とするのを「眞會」としている箇所であるが、この寫本は、「直」と「眞」を明確に區別していないらしく、他にも同様の例を認めることができるので⁽¹⁴⁰⁾、特に問題とするには及ばないであろう。

また、121. 2-8と五山版との間には、確かに若干の相違は認められるが、これら二つは、B、D、J、M、R、T、U、Y、Z、aなどの諸點において、いわゆる流布本とは顯著的な相違を示しているし、『血脈論』以外の部分を見ても、例えば、『心經頌』では、全ての刊本の中で、この兩者のみが、頌の前に「頌曰」の二字を有しており⁽¹⁴¹⁾、この二つが密接な關係にあることを示している。また、版式を較べると、五山版が一頁十行であるのに、この本は九行であるという相違は見られるものの、一行二十字であることは共通する。

121. 2-8には、「輪回」を「轉回」としたり、「日光」を「目光」とするようなお粗末な誤りが見られるほか、『悟性論』においては、五山版が「色生於心。心生於色」（192/7～8）とするのを、121. 2-8は、「色不生於心。色不生於色」

と改めている例を見ることができる。これなどは、明らかに、故意よりする改変であるが、私の見ることできた諸本のなかで、「色不生於心。心不生於色」とするのは、『新刊懸吐禪門撮要』所収本のみであるから、恐らく、この改変に際しては、朝鮮系の本が参照されたものと考えられる。しかし、それら少数の例を除けば、基本的には、その本文は五山版と同一と言ってよいので、五山版を改版したうえで、その極く一部のみを改めて翻刻したものと見做すことができよう。

このことから想定されることは、この刊本が、江戸時代の『少室六門』の中では、最も古いものの部類に属するであろうということであるが、実際、叡山文庫天海蔵に蔵されるこれには、その末尾に次のような書き入れを見ることができるのである。

弁海僧正求之

寛永十四年菊月十一日

これによって、この本が、遅くとも、寛永一四年（1637）以前の刊行であることが知られるのである⁽¹⁴²⁾。

この本は、一時期、かなりの流布を見たようである。というのは、叡山文庫に四本を蔵しているばかりか、大正蔵所収本、正保四年刊本、河村氏蔵本のいずれもが、五山版そのものではなく、その翻刻たる121. 2-8を承けているからである。

先ず、大正蔵所収本であるが、Q、X、cの三箇所において、121. 2-8による変更（というより、寧ろ、その多くは、端的に「誤り」といってよい）を承け継いでいるので、これが、その系統に属することは間違いない。しかし、この本には、他の箇所において、かなりの文字の相違が見られるのも事実である。しかし、それらは、ほとんど完全に『達磨大師三論』に一致するので、その系統の本によって、本文を補正したのであろう。ただ、Tの部分のみは例外であり、この部分が、「不假」となっているのは、古版の五山版『達磨大師三論』と、朝鮮系諸本のみであるから、あるいは、朝鮮本を参照しているのかもしれない。

次に、正保四年刊本について見てみると、その多くが、五山版や121. 2-8と共通していることが知られるので、そのいずれかを承けていることは確實であるが、一方、B、D、J、M、R、T、Y、Z、aなどでは、それらとは一致せず、却って、大正蔵所収本と一致しており、特に、BやT、Zでは、五山版『達磨大師三論』とも異なるにも拘わらず、この両者が文字を等しくしていることは、この二つの間に何らかの関係があったことを物語っている。

これらの間の関係を探るに当たって、先ず明らかにしなくてはならないのは、こ

の本が基づいたのは、五山版『少室六門』か、その翻刻の121. 2-8のどちらであるかということである。『血脈論』だけからでは、それは明らかにならないが、『破相論』の部分を見るに、五山版『少室六門』が「其相法相也」(204/2)とする所を、121. 2-8は、「其相即法相也」と、「即」の字を加えているが、正保四年刊本でも、121. 2-8と同様、「即」の字がある。また、先述のごとく、『悟性論』で、五山版の「色生於心。心生於色」を、121. 2-8は、「色不生於心。心不生於色」と改めているが、この場合でも、正保四年刊本は、121. 2-8に等しい。いずれの場合も、大正蔵所収本は五山版と一致しているから、それとの関係がどうであれ、正保四年刊本が121. 2-8を承けるものであることは間違いのないところである。

問題は、この本と大正蔵所収本との関係である。それについては次の二つの場合が考えられよう。即ち、

- 1 正保四年刊本が121. 2-8と『達磨大師三論』系の一本に基づいて成立し、大正蔵所収本は、この正保四年刊本に基づくとともに、再び、『達磨大師三論』系の本に據って、本文を改めた。
- 2 大正蔵所収本が121. 2-8と『達磨大師三論』系の一本に基づいて成立し、正保四年刊本は、121. 2-8を主体としつつも、この大正蔵所収本によって、一部、文字を改めた。

このうち、前者については、正保四年刊本と大正蔵所収本の雙方が、個別に『達磨大師三論』系の本を参照したと考えることになり、必要以上に複雑な系譜を想定しなくてはならないし、正保四年刊本と五山版とで共通する部分が、全て、大正蔵所収本とも共通するというのも偶然とは思えないから、恐らく、後者を是とすべきであろう。ただ、これが基づいた『達磨大師三論』が何であったかは必ずしも明らかでないが、一應、五山版と見ておくことにする。

最後に、河村本であるが、初めてこの本の存在を紹介された椎名氏は、五山版の覆刻たる、121. 2-8の存在を知らなかったがために、五山版と字句がほぼ一致すること、序跋が存在しないこと、『心経頌』の頌の前に「頌曰」の二字が存することを根據に、「かくして、本書もまた、直接か間接かは不詳ながら、五山版にもとづく謄寫本とみてよい」と言われたが⁽¹⁴³⁾、これらの特色は、五山版のみか、121. 2-8にも共通し、しかも、『血脈論』の字句を見るに、K、W、bなどによって、

それが直接基づいたのが、五山版そのものでなく、121. 2-8であることが判明する。

このように、河村本が121. 2-8を承けていることは確かではあるが、そのみで、その本文の全てが説明できるわけではない。というのは、D、G、Q、R、aなどでは、121. 2-8とは異なり、五山版『達磨大師三論』と一致しているからである。つまり、この本は、121. 2-8を底本としつつも、その一部を、『達磨大師三論』系の本に基づいて改めていると考えられるわけであるが、では、その『三論』は、いったいどれであったのかと言えば、恐らくは、大東急記念文庫所蔵の古活字版と同一のものであろう。というのは、この古活字版の『悟性論』末尾の「眞性頌」は、通常のものとは異なり、いくつかの註記や「○」「△」「□」といった符號が附され、また、「常」と「忘」、「極」と「滅」、「性」と「淨」の間に、計三本の直線が引かれている特徴あるものであるが、河村本のそれも、多くの點で、それと共通するからである。

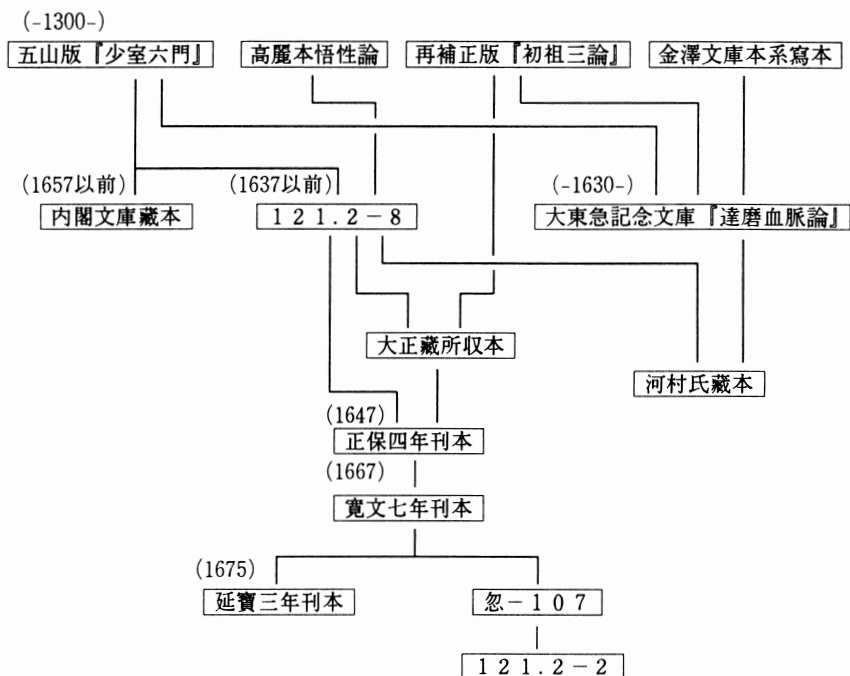
以上、見てきたように、これら、三種の異本は、いずれも、五山版そのものではなく、その覆刻たる121. 2-8を承けていることが知られるのである。

いったい、五山版の『少室六門』の現存するものは、六地藏寺本、ただ一本であり、その発見そのものも昭和の四十年代に入ってからで⁽¹⁴⁴⁾、長く、その存在が知られていなかったのであるが、このような状況は、江戸時代も同様であつたらしく、諸本の索搜に盡力し、五山版『達磨大師三論』をも實見している無著道忠ですら、この本の存在には全く言及していないのである。

五山版に據ったことが確かなのは、121. 2-8と内閣文庫藏本のみであつて、その成立は、いずれも、江戸時代初期と見るべきであるから、五山版の流布は、その時期に限られ、正保四年刊本が出版された十七世紀半ばには、既に、ほとんど見られなくなっていたのであろう。それゆえ、江戸時代の出版者たちの多くも、やむをえず、次善の策として、その翻刻たる、121. 2-8を用いたものと推測される。しかし、先にも述べたように、この本には、多くの単純なミスが見られるのであるから、これを承けた三種の異本が、出版や書寫に際して、いずれも他本を参照しているのも、いわば、當然の措置と言いうるのであろう。

以上で明らかになった、『少室六門』の諸本の関係を圖に示せば、次のようになる。

『少室六門』諸本の系譜



従って、諸本の成立年代については、おおよそ、次のように見積もって大過ないであろう。

五山版	1300年頃
内閣文庫藏本	1600年頃
121.2-8	1620年頃
大正藏所収本	1630年頃
河村本	1640年頃
忽-107	1680年頃以降
121.2-2	1690年頃以降

一二 無著道忠所覽の『少室三論』について

最後に、江戸時代を代表する學僧の一人で、『達磨大師三論』の研究にも、大きな足跡を残した無著道忠の業績に觸れておこう。

無著は、五山版『達磨大師三論』（その底本が五山版であったことは、末尾に、その刊記を寫しているうえに、それを「天龍三會古刊」と呼んでいることから疑い得ない。なお、彼は、これを「少林三論」の名で校寫している）を底本として、當時、閱覽することができた諸本を對校して、これを校寫するとともに、その校合の記録を、『少林三論并四品校讎』として残した。これらの記録は、極めて貴重なものであり、これによって、現在、見ることのできない諸本の内容を多少なりとも垣間見ることができるのである。

そこでは、『少室六門』を初め⁽¹⁴⁵⁾、以下のような諸本が校合、あるいは言及されている。

『血脈論』

- 1 南涌院藏、朝鮮刊本（安心寺刊本？）
- 2 養華院萬山和尚手寫本（高麗本の謄寫？）
- 3 興聖寺伯瑛和尚藏、高麗本

『悟性論』

- 1 雜華院藏、唐古本
- 2 興聖寺伯瑛和尚藏、高麗本

『破相論』

- 1 南涌院藏、朝鮮刊本
- 2 養華院萬山和尚手寫本
- 3 興聖寺伯瑛和尚藏、高麗本

これら諸本については、既に、本論文でしばしば觸れたので、ここでは、無著が底本とした五山版がどのようなものであったかについてのみ問題にすることとしたい。

さて、『少林三論并四品校讎』の内容であるが、二、三、その例を挙げれば、例えば、『悟性論』について、無著は、みずから校寫した『少林三論』の丁數と行數を、五丁左一行目と明示したうえで、

則無善惡 則此本作即 依六門改。又例上文。⁽¹⁴⁶⁾

という記載を残している。これは、椎名氏の翻刻では、一九二頁の一二行目に当たる部分であるが、無著のいうところは、要するに、五山版では、「即無善惡」とするが、『少室六門』に従って、「即」を「則」に改める、このほうが、すぐ前の「則有善惡」という表現とも呼応し、よりふさわしい、という意味である。

また、同じく、『悟性論』の、六丁右七行目に、「言不離默。默不離言」とある部分（椎名氏の翻刻では、一九二頁二二行目に当たる）について、

默不離言 此本脱此四字 依六門補入。⁽¹⁴⁷⁾

と記しているが、これは、この一句は、原本にはないが、無著が校寫に当たって『少室六門』に基づいて補ったという意味である。

このように、無著は、極めて詳細な記録を残しているのであるから、原本の文字を改めた場合には、原則的に、全て註記されているものと見做すことが許されるであろう。従って、『少林三論』と『校讎』という二つの著作によって、彼の見た『達磨大師三論』の本文を、ほぼ正確に復元することができるのである。

ところが、このような復元の結果、得られる本文は、その一部において、慶應大學藏本などの現存する諸本と一致しないのである。例えば、『悟性論』の本文で、椎名氏の翻刻で「求男相」となっている部分（193/7）について、無著は、次のように言う。

求男相 此本作男女相。恐女衍文。今從六門。⁽¹⁴⁸⁾

これは、『達磨大師三論』の『悟性論』の「求男女相」という句に對して、「女」の字は衍字であろうから、『少室六門』に従って削ったというのであって、無著の見た『達磨大師三論』が「求男女相」となっていたことを示すのである。

また、同じく、『悟性論』の「涅槃者。涅槃而不生。槃而不死。出離生死。名般涅槃」（190/16～17）という文章の、「涅槃者」、「般涅槃」という二句について、次のように言う。

涅槃者 此元本。者涅槃 文倒 今依六門改。

般涅槃 上此本槃 六門般 今改。⁽¹⁴⁹⁾

ところが、この無著の記述は、現存する五山版に該当しないばかりか、いかなる異本にも合致しないのである。

實は、このような箇所は、他にも多々見られるのであって、それを列挙すれば、以下ようになる。

		五山版 『三論』	無著 所覽本	箇 所
血 脈 論	A	輪廻	輪廻縁	181／19
	B	見在	現在	183／5
	C	惣是	總是	183／16
	D	示見	示現	184／20
	E	從凡入聖	入凡入聖	186／3
	F	若於	爲於	187／3
	G	非論	非<論輪>	187／9
	H	生天	生天堂	188／2
悟 性 論	A	殺那	刹那	189／10
	B	涅槃者	者涅槃	190／16
	C	般涅槃	槃涅槃	190／17
	D	折樹	拆樹	192／3
	E	種□	種子	192／15
	F	<本來未>	<本來>未	193／3
	G	男□相	男女相	193／7
	H	鳥頭	鳥頭	193／16

		五山版 『三論』	無著 所覽本	箇 所
悟 性 論	I	隨宜	隨空	194／6
	J	□□□□ □	者即是雪 山	194／6 ～7
	K	俱生	但生	194／15
	L	受慕	愛慕	195／3
	M	少力	本省	197／4
破 相 論	A	染體	染心	197／9
	B	修□行	修苦行	199／12
	C	鎔鍊	鍊鎔	202／6
	D	齋者齊也	齊者齋也	203／10
	E	齊正	齋正	203／10
	F	所爲	所謂	203／13
	G	齊食	齋食	203／15
	H	放縱	放逸縱	204／4
	I	燒火	燒香	205／5
	J	此之	此如	207／4

これらの中には、『血脈論』のB、Dや、『悟性論』のA、Lなどのように、『校讎』に明示されていないだけで、實際は、無著が校訂して改めたと思われるものも含まれているが、わざわざ、その違いを明記している場合もあるので、その多くは、無著が見た本自體が、そのようになっていたと考えざるをえないのである。そのうち、特に、『血脈論』のA、『悟性論』のG、J、『破相論』のBなどは、金澤文庫本などと一致し、五山版の刊行當初の形態と推定されるものとも共通する。しかも、この

無著の見たテキストでは、『悟性論』のBやCにおいて、「涅槃者」を「者涅槃」、「般涅槃」を「槃涅槃」とするような初歩的な誤りが見られたのであるから、これらの部分だけを見れば、これが極めて古い形態を留めるものであったようにも考えられるのであるが、実際には、その他の部分においては、慶應大學藏本など、第二段階の補正を経た後の、最も新しいテキストをそのまま承けているので、先に掲げた、金澤文庫本などとの一致は、慶應大學藏本や駒澤大學藏本同様、その版本に後代の書き込みがなされた結果と見るべきであろう。そして、そのことは、『悟性論』のEの部分で五山版の原初の形態が「種心」であったと考えられるのに、この本が、慶應大學本の書き込みと同じ、「種子」としていることから、窺うことができるのである。

このように考えてみると、先に掲げた、BやCの部分に関する、「涅槃者 此元本。者涅槃」などの無著の記載は、端的に誤りであると見ざるをえないであろう。

無著道忠ほどの人が、後代の書き込みを判別できなかったばかりか、わざわざ誤りを註記したなどということは不思議に思えるかもしれないが、實は、それには、次のような理由があった。つまり、この段階で無著が見ていた本は、原刊本そのものではなく、それに基づく謄寫本であったのである。そのことは、『少林三論并四品校讎』に、

右達磨三論。前妙心廣山和尚依天龍三會院所刊之本親寫之。在南涌院。院主蒙山座元示余。余借得謄之。元本訛差不成義不可讀者。余對校於六門集所載。及朝鮮雕本觀心論・血脈論。改字或補入。別作校訛一本。而錄其補正之意。

(中略)

享保二十年乙卯二月初七日始謄。二十六日畢功。還元本。

八十三翁無著道忠識。

搜索天龍古刊本于天龍寺不獲之

元文四年己未三月。書家持天龍古刊本來。贖得之。⁽¹⁵⁰⁾

とあることから知られる。つまり、無著が、廣山和尚手寫の南涌院本によって『達磨大師三論』を校寫し、『少林三論并四品校讎』を著したのが、享保二十年(1735)であったのに對して、それが基づいた刊本を手にしたのは、元文四年(1739)だったのである。従って、無著の指摘の誤りは、そして、空白部分への後代の書き込みを原刊本と區別できなかったことも、無著自身の責任というよりは、むしろ、廣山和尚にその原因があったと見るべきなのである。

しかし、いずれにせよ、無著の文獻校訂にかける情熱は凄まじく、彼の並み外れた努力によって、今では見ることのできなくなってしまった諸本の内容を曲がりなりにも窺いうるのであって、我々は、今日も、その恩恵に與かっていると言えるのである。

結 論

以上の論述によって、『達磨大師三論』、ならびに、『少室六門』については、以下のような諸点を明らかにしえたと思ふ。

A 『達磨大師三論』

- 1 五山版『達磨大師三論』は、當初、『血脉論』に關しては高麗本を、『悟性論』と『破相論』に關しては、古く日本に傳來していたテキストを底本として至徳四年（1387）に刊行された。
- 2 五山版『達磨大師三論』の底本となった『悟性論』と『破相論』は、もともと一體のものとして傳えられ、その祖本は、唐の會昌五年（845）に龔朗なるものが、日本の和尚に與えた寫本であつた。
- 3 『悟性論』と『破相論』を託された日本の和尚は、慧萼であつた可能性が強い。
- 4 このようにして傳えられた『悟性論』と『破相論』のうち、『破相論』に關しては、かなり早い時期に錯簡が生じた。
- 5 五山版『達磨大師三論』の『破相論』には、錯簡は認められないものの、これも、後に補正した結果と見ることができる。
- 6 五山版『達磨大師三論』は、その後、五山版『少室六門』や宋本などと校合され、補刻という形で、少なくとも二度に亘つて、本文が補正された。
- 7 叡山文庫本『達磨大師三論』は、第一回目の補正を経たのちの形態を、ほぼそのまま傳えるものと見做すことができる。また、河村本も、これと同種のものと考えられる（ただし、河村本は、本文が一部改められている）。
- 8 現存する二つの五山版『達磨大師三論』、即ち、慶應大學藏本と駒澤大學藏本は、二度目の補正を経た後の、最も新しい本文を傳えるものであ

る。

- 9 慶應大學藏本に「イ本」として對校されているものは、外ならぬ河村本そのものであったと考えられる。ただし、『破相論』に関しては、外に金澤文庫本系の異本も参照しているらしい。
- 10 『傳心法要』と合綴されている大谷大學所藏の『達磨大師三論』は、基本的には、『少室六門』中から『悟性論』と『破相論』を取り出し、それに、任作哲刊行の『血脈論』+『傳心法要』というテキストを加えたものと見做することができるが、一部、五山版『少室六門』の文を取り込んでいる部分がある。
- 11 東北大學藏本は、再補正版の五山版『達磨大師三論』を底本に、大谷大學藏本系の寫本や、金澤文庫本系の古寫本を對校することで成立したと見られる。
- 12 『達磨大師三論』には、二種の古活字版が存在するが、全くの別版であって、その本文の系統も異なる。
- 13 大東急記念文庫の古活字版は、再補正版の五山版を底本にしつつも、『少室六門』や金澤文庫系の古寫本によって、一部、本文を改めている。
- 14 成篋堂文庫の古活字版の性格は複雑であるが、再補正版を主とし、それに東北大學藏本系の寫本などの諸本を校合したものと見られる。

B 『少室六門』

- 1 五山版『少室六門』は、そこに含まれる『破相論』が、日本で生じた錯簡を承けているので、日本における編纂と考えざるをえない。
- 2 『少室六門』の編輯の際に底本とされたのは、第一門『心經頌』、第五門『悟性論』、第六門『血脈論』では、宋本、あるいは高麗本、第二門『破相論』については、古來、日本に傳わっていた寫本であったと考えられる。また、第三門『二種入』、第四門『安心法門』は、それぞれ、宋版の『景德傳燈錄』と『正法眼藏』から抽出されたものである。
- 3 五山版『少室六門』は、第一門の『心經頌』を除いて、各門の末尾に偈頌を附すという形態を採っているが、これらの多くは、『傳燈錄』などに載せる達磨の言葉を取り出すなどしたもので、『少室六門』編輯の際に、體裁を整えるために附加されたものである。

- 4 『少室六門』には、種々の刊本があるが、正保四年刊本以降の流布本と、それ以前の古版とに大別することができる。
- 5 内閣文庫蔵本は五山版の謄寫本であり、また、121. 2-8は、基本的には五山版の翻刻と認められる。
- 6 河村氏蔵本は、121. 2-8を底本に、大東急記念文庫蔵本と同一の古活字版『達磨大師三論』によって、一部、文字を改めたものである。
- 7 大正蔵所収本は、121. 2-8を底本に、再補正版の『達磨大師三論』と校合したテキストと見られる。
- 8 流布本は、いずれも、正保四年刊本を祖本とするが、この本は、121. 2-8を底本とし、それを大正蔵所収本によって修訂を加えたものと見做しうる。

つまるところ、『達磨大師三論』や『少室六門』は、日本における編集であって、その編集の際に、底本として用いられたのは、当時、達摩の名のもとに日本に伝えられていた種種の寫本、刊本だったのであり、兩書は、達摩の著作を綜合し、後世に残すという同一の企圖に出たものといえる。そのために、編者達は大變な努力を拂ったのであって、それは、とりわけ、『少室六門』の編輯過程や、『達磨大師三論』における、二度に亙る本文の補正に端的に現れている。このこと自體、日本禪宗史における一つの成果であるといえよう。

不思議にも、相い前後して編輯された、この二つの叢書の間に、當初は、いかなる関係もなかったようであり⁽¹⁵¹⁾、その用いた底本にも相違があった。このことについては上に細かく論じた通りであるが、考證の結果、その底本と、補正に用いられた校本とをある程度特定できたことは、多少なりとも、今後の研究に資するものと思う。

以上の考察によって明らかとなったことのうち、思想的に見て特に重要と思われるのは、『悟性論』と『破相論』とが、既に唐代において、一緒に傳持されていたらしいということである。『悟性論』や『破相論』、更に『血脈論』といった、いわゆる達摩論の成立や、その思想については、別に論じなくてはならないが、この事實には、初期禪宗史を考える上で、甚だ興味深いものがある⁽¹⁵²⁾。

また、『觀心論』の一異本である『破相論』系の諸本が、少なくとも日本傳來本は、全て會昌五年に龔朗が書寫したものをその祖本としているということも、北宗禪の

思想を考える上で重要であろう。この本には、敦煌出土本や朝鮮傳來の『観心論』系の諸本とはかなりの相違が見られるのであって、その唐代における一形態を伝えるという点で極めて重要な意味を持つものである。

以上で、とにかく、『達磨大師三論』、ならびに『少室六門』についての私の考えは、ひと通り述べ終わった。その議論は多岐に及び、繁雑を極めたが、その根本原因は、五山版『達磨大師三論』に特有の、割行部分や空白部分の存在にあり、これによって、その本文に関して様々な問題が生じたため、それを解きほぐすために、多言を要せざるをえなかったのである。しかしながら、その反面、このような頭を悩ます問題があったればこそ、それを糸口とすることで、多くの事実を解明することができたということも確かなのである。そして、ここで明らかとなった事實は、ひとり、『達磨大師三論』のみに関わるものでなく、他の五山版禪籍について考える場合にも、必ずや、考慮しなくてはならないものであらうと思われる。この意味でも、五山版『達磨大師三論』の存在意義は、極めて重いと言えよう。

- (1) 『駒澤大學佛教學部論集』の第八號(昭和五二年)、ならびに第九號(昭和五三年)所収。
- (2) 從來の考え方については、例えば、禿氏祐祥氏の論文、「少室六門集に就て」(「龍谷學報」三〇九號、昭和九年)では、「支那や朝鮮には『少室六門集』として編次されたものが行はれた事を聞かないし、またこの書の傳來に關する記事を載せた序跋のないのも異例であるから、寧ろ我國でかくの如き體裁に作ったものと考へるのが最も事實に近い様である。年代も餘り古いものではなく、多分江戸時代の初期に何人かが集めて置いたのが出版されて廣く行はれる様になったのであらう」と言う(二二三頁)。『望月佛教大辭典』(世界聖典刊行協會、昭和十一年)の「少室六門集」の項にも、これを承けてか、「編者詳ならざるも、恐らく本邦に於て纂輯せられたるものならん」と見える(二六二五頁中段)。
 なお、椎名氏は、最近、これまでの研究を總決算する形で、『宋元版禪籍の研究』(大東出版社、平成五年)を公刊されたが、五山版の『達磨大師三論』と『少室六門』に關しては、やはり、覆宋版であるとの立場を堅持している(三五頁、九六頁など)。また、『少室六門』に關しては、同氏の「六地藏寺所藏禪籍目録及び解題」(「書誌學」新二六、二七合併號、昭和五六年)も參照せよ。
- (3) 阿部氏は、「本書は禪宗の基本宗典の一つであるから、五山版で當然開板されてしかるべきであるが、從來五山版の存在を知られていなかった。こゝに新出の五山版を紹介し得ることを喜ぶ。所掲本は蟲損汚損甚だしいが、かなり精巧な宋版の翻刻で、刊年は南北朝初を下らぬものと推定する」と言うのみであるし(「六地藏寺法寶典籍について」<「斯道文庫論集」五號、昭和四一年>、三七九頁)、川瀬氏も、「卷末半葉を缺落してゐるのは惜しいが、精刻の覆宋刊本として版式が古雅ですぐれてゐる。恐らく鎌倉の地で刊行されたものであらう」と言うのみである(『五山版の研究』<日本古籍商協會、昭和四五年>八五頁)。
- (4) 柳田聖山氏は、「いったい、日本で『達磨三論』が注目を呼ぶのは、平安末より鎌倉時代の初めにかけて、謂わゆる鎌倉新佛教のさきがけとなる、日本達磨宗の運動と關係している」と言われる(「語録の歴史」<「東方學報」五七號、昭和六〇年>二五七頁)。
- (5) 高橋秀榮「鎌倉初期における禪宗の性格(序)－日本達磨宗の禪の性格－」(「宗

學研究」一三、昭和四六年）、同「大日房能忍の行實」（『日本佛教史學』一五、昭和五四年）、山内舜雄『正法眼藏聞書抄の研究』（大藏出版、昭和六三年）六九頁、四二一頁、五六七頁、前掲「語録の歴史」二五七頁などを参照。

- (6) 『永平正法眼藏蒐書大成』一二巻、三三〇頁。なお、『正法眼藏抄』のこの箇所には傍註があり、「悟性論」と「血脉論」に對しては、それぞれ、「唐書」、「同上」と言っているのに、「破相論」に對しては、「日本書歟」と註しているのは、注目に値する。なぜなら、このことは、今日のみならず、經豪の當時においても、『破相論』の宋本や高麗本の存在が知られていなかったことを示しているからである。
- (7) 『金澤文庫資料全書』第一巻、禪籍篇（金澤文庫、昭和四九年）、解説、二七三頁参照。
- (8) 同上、一九〇頁。なお、これは、椎名氏の翻刻では、一九一頁二〇行目に當たる、「罪因疑惑而生」の引用と見ることができる。
- (9) 『日蓮宗學全書』一四、三〇六～三一〇頁。なお、これについては、石川力山氏の「日蓮の禪宗觀 —『金剛集』における禪宗批判の根據とその史料」（『印度學佛敎學研究』四二—一、平成五年）で既に指摘されている。
- (10) 前掲「語録の歴史」二五八頁。なお、同氏は、同論文において、「いったい、『達磨三論』と『少室六門』をくらべると、一往は前者の編集が古いとみられる。いずれも、宋代の再編であるが、早く日本で覆刻される。……曾ては、日本で編集したものと見られたが、六地藏寺本によって、宋版の覆刻であることが確認される」と言い（二五五頁）、その部分の註で椎名氏の論文の名を掲げているが、一方で、このように、當時の種々の状況から見て、『達磨大師三論』が日本における編集であってもおかしくないという考えも表明している。しかし、私が、以下に述べることによって、椎名氏の論據を覆すことができれば、このような、『達磨大師三論』の成立を巡る論述の二重性は必要なくなるはずである。

ところで、氏は、上の引用で、『達磨大師三論』の方が『少室六門』より成立が古いと述べておられるが、これら雙方が日本における編輯であり、それが出版を前提としたものであったとすれば、事實上、その刊行年を編輯時期と見做しうるから、『少室六門』の方が成立は古いと考えざるをえない。

- (11) 『血脉論』については、北宋の嘉祐五年（1060）頃成立した『新唐書』藝文志や、慶暦元年（1041）成立の『崇文總目』に著録されているばかりか（前掲『宋元版禪籍の研究』四一〇頁、四一二頁、四一五頁参照）、後に論ずるように、日本

にも、たびたび齎されていたことを知ることができる。また、『二種入』や『安心法門』については、後に、『少室六門』のソースについて論じる際に明らかになるはずである。

- (12) 例えば、『悟性論』には、次のような一節がある。

「天女於十二季中求女相。了不可得。即知於十二季中求男相。亦不可得。十二季者。即十二入是也。」(193/6~7)

- (13) ただし、慶應大學蔵本は、『悟性論』、『血脈論』、『破相論』の順に配列されている。これは、恐らく、後代の綴じ換えであろう。

なお、前掲の『五山版の研究』(昭和四五年)によれば、『達磨大師三論』の五山版には、この外に、三井家舊蔵本が二本あるということであり、川瀬氏自身、その實物を見ているらしいが、現在、その所在は不明であり、残念ながら、その内容を窺うことができない。

また、『新纂禪籍目録』(駒澤大學圖書館、昭和三七年)の「達磨三論」の項にも、同じ五山版として、春光院蔵本と幸田氏蔵本があるとする(三〇九頁)。このうち、幸田氏蔵本については、吉澤義則氏の『日本古刊書目』(帝都出版社、昭和八年)二〇七頁によって、これが、幸田成友氏の蔵本であることが知られるが、いずれも、現在の所在については明らかでない。あるいは、川瀬氏のいう三井家舊蔵本の二本がこれらに当たるかとも思われるが、詳細は不明である。川瀬一馬氏の『古活字版之研究』(安田文庫、昭和一二年)には、この幸田成友氏蔵本のほか、杉浦三郎兵衛氏蔵本を掲げているが、これは、現在の駒澤大學本に外ならない。

- (14) 前掲「『少室六門』と『達磨大師三論』」二一三~二一六頁。

- (15) 同上、二一四、二一六頁。

- (16) 例えば、大谷大學蔵本には、五山版『達磨大師三論』同様、「故經云。凡所有相皆是虚妄」(184/16~17)という一節があるが、五山版『少室六門』は、これを缺いている。

これと同様なことは、「縦有餘習。不能爲害」(186/22)や、「用即心動」(187/19)、「終日行而未嘗行。終日住而未嘗住」(187/22)という一節についても言えるし、大谷大學蔵本や五山版『達磨大師三論』が、「頓教大乘即心是佛」(187/10)とするのを、五山版『少室六門』が、「一心」の二字に作っているなども顕著な相違といえる。

- (17) なお、椎名氏は、前掲「諸本對校『達磨大師三論』」において、中途にも缺紙があ

るとして、その部分を内閣文庫蔵本によって補っているが(184/16～185/9)、これは何かの誤りであろう。少なくとも、私が見た慶應大學の斯道文庫所蔵のマイクロフィルムには、このような缺紙は存在しない。

(18) 五山版『少室六門』によって、これらの頌をかがげれば、以下の通りである。

『安心法門』

即説頌曰。

心心心難可尋。

寬時遍法界。窄也不容針。

亦不觀惡而生嫌。亦不觀善而勤措。

亦不捨智而近愚。亦不拋迷而就悟。

達大道兮過量。通佛心兮出度。

不與凡聖同躋。超然名之曰祖。

『破相論』

而説頌言

我本求心心自持。求心不得待心知。

佛性不從心外得。心生便是罪生時。

我本求心不求佛。了知三界空無物。

若欲求佛但求心。只這心心心是佛。

なお、『安心法門』の頌の第四句以下は、明らかに、『景德傳燈錄』卷三の達磨章に次のように言うのを採用したものである。

又曰。弟子歸心三寶。亦有年矣。而智慧昏蒙。尚迷真理。適聽師言。罔知收措。願師慈悲開示宗旨。師知懇到。即説偈曰。

亦不觀惡而生嫌。亦不觀善而勤措。

亦不捨智而近愚。亦不拋迷而就悟。

達大道兮過量。通佛心兮出度。

不與凡聖同躋。超然名之曰祖。(大正藏五一、二二〇頁上)

(19) 『二種入』末尾の頌は、次のごとくである。

説偈言

外息諸緣。內心無喘。心如牆壁。可以入道。

明佛心宗。等無差誤。行解相應。名之曰祖。

既に、忽滑谷快天氏の『禪學思想史』(玄黃社、大正一二年)三一八頁に指摘さ

れているが、これは、『景德伝灯録』卷三の達磨章で、慧可への傳法を述べた部分に註して、

別記云。師初居少林寺九年。爲二祖說法。祇教曰。外息諸緣。內心無喘。心如牆壁。可以入道。慧可種種說心性理。道未契。師祇遮其非。不爲說無念心體。……(大正藏五一、二一九頁下)

というのと、同じく、達磨章で、楊街之との問答を記して、

有期城太守楊街之。早慕佛乘。問師曰。西天五印師承爲祖。其道如何。師曰。明佛心宗。行解相應。名之曰祖。(同上、二二〇頁上)

というのを組み合わせたものである。「等無差誤」の一句は見えないが、恐らく、四句にするために、特に創作されたのであろう。

(20)『景德傳燈録』の文は以下の通りである。

街之聞偈悲喜交并曰。願師久住世間。化導群有。師曰。吾即逝矣。不可久留。根性萬差。多逢患難。街之曰。未審何人。弟子爲師除得。師曰。吾以傳佛秘密。利益迷途。害彼自安。必無此理。街之曰。師若不言。何表通變觀照之力。師不獲已。乃爲譏曰。

江槎分玉浪。管炬開金鎖。

五口相共行。九十無彼我。

街之聞語。莫究其端。默記于懷。禮辭而去。師之所譏。雖當時不測。而後皆符驗。(大正藏五一、二二〇頁上)

(21)『禪門撮要』は、『禪學叢書之二』(中文出版社、1974年)に収められて、廣く見られるようになった。この書の編者を、韓國の圖書館の目録では、「釋休靜」とするのが一般的であり、日本でも、これを承けてか、『禪學大辭典』(大修館書店、昭和五年)の「禪門撮要」の項などでは、同様の記載をしている。休靜は、1520～1604年の人であるから、これが確かであれば、『禪門撮要』は、十六世紀後半の成立ということになる。

しかし、『禪門撮要』自体には、編者は明記されていないので、これらが何に基づくのか明らかでない。思うに、これは、この叢書の末尾に収められた「禪教釋」が休靜の撰述であることから言われるようになったもので、確たる根拠があるわけではないのであろう。

この書に収録された文獻の多くが、1883年に成立した『法海寶筏』所収のものと共通し、しかも、『禪門撮要』の方が、収録點數が多いことを考えると、柳

田聖山氏が既に言われているように（世界古典文學全集36B『禪家語録II』〈筑摩書房、昭和49年〉451～452頁）、その編輯は、『法海寶筏』以降と見るべきではなかろうか。恐らく、その成立は、その刊年（1907）をそれほど遡るものではなかろう。

(22) これは、神尾弼春氏の言及されるところであるが、現在、その所在は不明である。

「観心論私考」（『宗教研究』九一五、昭和七年）九九頁参照。

(23) 現在、韓國國立中央圖書館に蔵されている。『韓國中央圖書館古書目録1』（國立中央圖書館、1970年）六六頁参照。

(24) なお、『韓國典籍綜合目録』第一輯（國學資料保存會、1974年）一二五頁によると、このほかに、韓國には、現在、成化九年（1473）に刊行された、「全羅道光陽白雲山玉龍寺住權一牛書」なる刊記を持つ『達磨大師血脈論』が存在するもようである。とすれば、これを安心寺刊本の祖本と見做しうるかも知れない。なお、前掲の目録には、所蔵者は書かれていないが、『延世大學校中央圖書館古書目録』（延世大學校中央圖書館、1977年）の六六頁、『貴重圖書目録』（高麗大學校中央圖書館、1980年）五三頁に掲げられている『達磨大師血脈論』が、正しくこれにあたると思われるので、延世大學校、ならびに高麗大學校に蔵されていることが知られる。

また、時代は降るが、『血脈論』は、光緒九年（1883）に劉雲によって編輯、刊行された『法海寶筏』にも含まれている。この書は、『観心論』『血脈論』『信心銘』『最上乘論』『傳心法要』『宛陵錄』『真心直説』『修心訣』『禪警語』から成る、全一〇五丁の活字一冊本であって、韓國國立中央圖書館、ソウル大學校、高麗大學校などに蔵されている（『韓國中央圖書館古書目録』〈國立中央圖書館、1970年〉、『奎章閣圖書中國本綜合目録』〈ソウル大學校圖書館、1982年〉、『漢籍目録（舊藏）』〈高麗大學校中央圖書館、1984年〉などを参照）。また、日本では、東洋文庫にその寫本を蔵している。

(25) ここに挙げた無著所覽の諸本については、註32、註52に掲げる『少林三論并四品校讎』の文を参照せよ。

(26) 大日本佛教全書本、七頁上段。

(27) 關靖『金澤文庫の研究』（講談社、昭和二六年）二二二頁。なお、この目録の成立時期について、關氏は、劍阿（1261～1338）が稱名寺の住持になった少し後か（劍阿が住持になったのは1308年）、元弘三年（1333）のことである

うとしている（同書、二一六頁）。

(28) 大正藏七七、七一六頁上。

(29) 大正藏七四、九六頁上。

(30) 日本思想大系16『中世禪家の思想』（岩波書店、昭和四七年）二一〇頁、ならびに、日本の禪語録11『抜隊』（講談社、昭和五四年）一一一～一二頁、二二〇～二二一頁。このうち、前者については、既に、柳田聖山氏の指摘するところである（前掲「語録の歴史」二五八～二五九頁）。ただし、氏は、抜隊が『達磨大師三論』を引いているように書いているが、実際のところ、そこには、『血脈論』の文を見るのみである。

なお、この『鹽山和泥水集』には、抜隊の生前の至徳三年（1386）の刊本も存在し、その成立は、五山版『達磨大師三論』編輯の直前と見られる。従って、抜隊の引用は、それ以前のテキストに基づいて行われたことになるが、恐らく、高麗本によるものであったであろう。

上の一覽表に掲げたように、椎名氏の翻刻で言えば、一八一頁の一九行目には、「輪廻□」という部分が存在するのであるが、抜隊の引用では、これが「輪廻縁」となっており、『少室六門』とは異なるが、高麗本の系統を引く『禪門撮要』所収本とは一致しているからである。これについては、宋版の系統を引く大谷大學藏本とも共通するが、上述のごとく、五山版のこの部分も元來は「輪廻縁」であったと考えられ、それが高麗本に基づくことはほぼ確實であるから、それと同時期の成立である『鹽山和泥水集』も、高麗本に基づくと考えerほうが自然であろう。そして、このことは、當時、この高麗本が、かなり廣く流布していたことを示すものに外なるまい。

(31) 『昭和法寶總目錄』三、九六九頁下。なお、この目錄の成立時期については原本に明記がないが、椎名氏の前掲論文「『少室六門』と『達磨大師三論』」では、1353年としている（二二三頁）。

(32) 『少林三論并四品校讎』に、三論の序文を抄寫し、「昔年。興聖寺伯瑛和尚携達磨三論來曰。余欲雕之流通。請和尚作辯言。三論者。即血脈論・悟性論・破相論。而高麗本也。各有序。余適有長州之行。不得留書。與刊行六門集對校。只寫三書之序。而返璧。而約自長歸相議矣。其後。伯瑛遷化。不識三論在何處。可太遺憾哉。右所錄三序是也」と言う（『禪學叢書之二』二二七頁上段～二二九頁上段）。

(33) 『第四回大藏會陳列目錄』（大正七年）七一頁に次のように見える。

- (34) 前掲「『少室六門』と『達磨大師三論』」二二〇頁。
- (35) 前掲「『少室六門』と『達磨大師三論』」の末尾に、附録として、その本文が収められている。
- (36) これについては、後に觸れる。本論文の第七節を参照せよ。
- (37) 『高山寺聖教目録』上（『昭和法寶總目録』三、九一六頁上）、ならびに、『建仁寺兩足院藏書目録』（同上、九七八頁上）。
- (38) 川瀬一馬『石井積翠軒文庫善本書目』（昭和一七年、石井光雄）一九頁に列名されており、『石井積翠軒文庫善本圖録』には、その冒頭と末尾の寫眞を収めている。
- (39) 關靖「金澤文庫書誌論考」（『金澤文庫研究紀要』二、昭和三九年）一六四頁。
- (40) ここで、眞福寺文庫本の書誌に觸れておくと、「菩提達磨悟性論」と題されるこの寫本は、縦 157mm、横 134mmの綴葉裝本で、各葉六行、各行一〇～一三字で寫されており、序文はなく、冒頭から、椎名氏の翻刻でいえば、一九三頁の二行目までを有するが、それ以下の部分は缺紙となっている。
- (41) 前掲『少林三論并四品校讎』二二〇頁下段。
- (42) 同上。
- (43) 前掲『金澤文庫資料全書』解説、二八〇頁。
- (44) ただし、金澤文庫本では、「禮者運」の下に「也」字があり、また、「豈慮難成」の「成」を「入」に、「萬法同觀者」の「觀」を「視」に作る。
- (45) ただし、このうち、標題や尾題によって、確實に書名が知られるのは、スタイン二五九五號とベリオ四六四六號のみである。

なお、私は、先に、「『大乘開心顯性頓悟眞宗論』の依用文獻について」（『印度學佛教學研究』四一—一（平成四年））と題する論文において、スタイン二五九五號が『達磨大師三論』中の『破相論』と同系統であると論じたが、これは誤りであるので、ここで訂正しておきたい。

その論文では、ベリオ二四六〇號の『觀心論』で、

爲對三毒。發三誓願。持三淨戒。對於貪毒。誓斷一切惡。故常脩戒。對於嗔毒。誓脩一切善。故常脩定。對於癡毒。誓度一切衆生。故常脩惠。

となっている部分の、「發三誓願。持三淨戒。對於貪毒」という一節が、スタイン二五九五號では缺落していることを示すとともに、それと『大乘開心顯性頓悟眞

宗論』（以下、『眞宗論』）が依用する『觀心論』や、『達磨大師三論』の『破相論』との類似性を指摘し、それらが同系統であるとまで論じたのであるが、その間に類似性が見られ、「持三淨戒。對於貪毒」の一節を缺いたことが、『眞宗論』や『達磨大師三論』のようなテキストが成立した原因であることは認めてよいものの、同系統であるとしたのは、確かに勇み足であった。

『眞宗論』や『達磨大師三論』では、スタイン二五九五號で缺いている「發三誓願」の一節があるうえに、他の部分においては、スタイン二五九五號は、他の敦煌本とよく一致し、『達磨大師三論』のテキストとは共通点が少ないので、このスタイン本を『達磨大師三論』の『破相論』と同系統と見ることはとても不可能と思われる。従って、全く同じ一節が脱落したのも、偶然の一致と見なくてはなるまい。しかし、なお、『眞宗論』と『破相論』の間になんらかの関係があった可能性は否定されないが、それについても、十分な検討が必要であろうと思われる。

(46) ソウル大學校のみに藏される天下の孤本である。『奎章閣圖書韓國本綜合目錄』（ソウル大學校圖書館、1983年）一三一四頁参照。

(47) 安心寺刊本については、金九經氏の『畫園叢書』（1934年刊）を参照されたい。
なお、この金九經氏の覆刻本の原本と思われる本が、高麗大學に藏されている。
『貴重書目錄』（高麗大學校藏書目錄、第15輯、高麗大學校中央圖書館、1980年）七頁参照。

(48) 韓國國立中央圖書館と東國大學校に藏されている。『韓國中央圖書館古書目錄1』（國立中央圖書館、1970年）六六頁、ならびに『古書目錄』（東國大學校中央圖書館、1981年）二八九頁参照。

(49) 私の知る限り、日本では、早稲田大學圖書館に一本を藏するのみであり（ハ5-3148）、その體裁は以下の通りである。

縦275mm、横183mmの袋綴本で、各半葉九行、各行一七字、白文で、全一五丁。匡郭内は、縦180mm、横125mm、四周單邊。版心には、「心論」、ならびに丁数が刻されており、その末尾には、次のような刊記が見られる。

咸豐十一年辛酉夏寶蓋山石臺重刊移鎮

于廣州奉恩寺

この本は、『誠庵文庫目錄』（『韓國典籍綜合目錄』第四輯、國學資料保存會、1975年）二四七頁にも載せられているので、韓國にも一本が伝わっていることが知られる。

(50)『法海寶筏』については、註24を参照せよ。

(51)『禪門撮要』については、註21を参照せよ。

(52) 前掲『少林三論并四品校讎』の二一頁下段に、「享保乙卯（二〇年）正月。又視觀心血脈最上乘。是昔龍安養華院萬山手寫者。血脈論有任哲序。與前年伯瑛所示本序全同」と見えるが、無著は、同じ箇所、「享保甲寅之冬。觀達磨觀心論・血脈論・五祖最上乘論爲一冊者。朝鮮刻本。在南涌院。借得而寫之。……血脈論無序」と述べており、その前年に見た同じ構成の南涌院本を「朝鮮刻本」であったとするのだから、この萬山手寫本も朝鮮系の本と推測される。そして、その南涌本には、『血脈論』に序文がなかったのに、この萬山手寫本には任哲の序文があったというのだから、それのない南涌院本より古い形態を留めるものと考えられる。従って、それは、高麗本か、あるいは、より古い朝鮮刊本と見做すことができよう。

なお、無著の言葉によって、『觀心論』、『血脈論』、『最上乘論』を合冊した朝鮮本がかなり流布していたことが窺われるが、これは、神尾式春氏が前掲の「觀心論私考」において、「隆慶年間（1567～1572）安心寺開版にかゝる現存經論」として、『達磨大師觀心論』、『達磨大師血脈論』、『最上乘論』の名を掲げているのとはよく對應する。従って、無著が見た朝鮮本は、この安心寺刊本だったのではないかと臆測される。

(53) 私が実際に對校できたのは、上の六本のうち、2、4、6の三本のみであるが、その本文は、基本的には同一と認められる。恐らく、他の三本についても同様に言いうるであろう。

一方、無著の言及する本については、前掲の『少林三論并四品校讎』二〇九頁下段～二一〇頁上段に『少室六門』との對校記録があるので、それによって、その本文を窺うことができる。

(54)『眞如觀』には、「達磨宗ハ、諸法ハタゞ、性ノミアリ、相ハ無ト言フ。サレバ達磨和尚破相論作、諸法相ヲ破シテ性ヲ見セリ」とある（日本思想大系9『天台本覺論』一三六頁）。なお、この文獻の成立時期については、田村芳朗氏によって、一二〇〇年ころと推測されている（同上、解説、五六六頁）。

(55) 前掲「金澤文庫書誌論考」一七三頁。

(56) ただし、末尾に近づくにつれて、むしろ、1の方に誤りが目立つようである。

(57) 前掲『金澤文庫資料全書』解説、二五七頁。

(58) 眞福寺文庫本「達磨和尚觀心破相論」は、縦247mm、横152mmの綴葉装本で、

各葉七行、各行一六～二〇字で書かれており、奥書などはない。

- (59) 前述のごとく、『悟性論』の書寫者は、關氏によって、願行房憲靜と推定されている（前掲『金澤文庫書誌論考』一六四頁）。一方、『達磨和尚觀心破相論』は、上述のように、その奥書から、大甬丸、夜叉王丸の書寫と知られる。
- (60) 前掲『金澤文庫資料全書』解説、二八一頁、ならびに、前掲「諸本校『達磨大師三論』」一九五頁、對校註参照。
- (61) 前掲「少室六門集に就て」一一頁。
- (62) 前掲「『少室六門』と『達磨大師三論』」二二二頁。
- (63) 鈴木大拙氏が、『禪思想史研究 第二』（岩波書店、昭和二六年）で、金澤文庫本『悟性論』について、「『破相論』に屬すべきものさへも誤って寫されて居る」と言われたのは（『鈴木大拙全集』第二卷、一三九頁）、これを指すものと思われる。
- (64) 前掲『金澤文庫資料全書』解説、二八一頁、ならびに、前掲「諸本校『達磨大師三論』」一九六頁、對校註参照。
- (65) 前掲『金澤文庫資料全書』三頁上段。
- (66) 前掲『少林三論并四品校讎』二二八頁下段。
- (67) 前掲『金澤文庫資料全書』一〇頁下段。
- (68) ただし、ある時期に日本で一つに纏められ、その後、それが再び二つに分割されたと考えることもできないわけではないので、なお、検討の餘地は残されている。
- (69) 現存する五山版『達磨大師三論』の『悟性論』の末尾は、『破相論』の序文の冒頭を混じた形になってはいないが、後に叡山文庫本を提示することによって明らかになるように、實は、これは、當初あったのを後に削ったのである。従って、『達磨大師三論』の場合、そこに収められている『悟性論』と『破相論』が、金澤文庫本と同系統であることは、疑う餘地がない。
- (70) 前掲『少林三論并四品校讎』二一八頁下段。
- (71) 柳田聖山氏は、前掲の「語録の歴史」において、「日本開版の三論の『悟性論』には、常樂院銀海の序がついている。銀海の傳は不明であるが、日本僧であることは、ほぼまちがいないから、日本でつけられたのである」と言う（二五八頁）。『悟性論』の序文が後代の附加であるという意味では、私の見解と共通するが、銀海を日本人とすることについては同意できない。
- (72) 前掲「『少室六門』と『達磨大師三論』」二一四頁。
- (73) これについては、註6を併せて参照せよ。

- (74) 小野勝年『入唐求法巡禮行記の研究』第四卷（鈴木學術財團、昭和四四年）、一一一～一一三頁。
- (75) 同上、五三頁。
- (76) 小野勝年『入唐求法行歴の研究 智證大師圓珍篇』上（法藏館、昭和五七年）、一六～一九頁。
- (77) ただし、圓載が、人に託して日本に送ったということが考えられないわけではない。即ち、宗叡の『新書寫請來法門等目錄』に、『都利聿斯經』や刊本の『玉篇』などを連ねたあと、「右雜書等。雖非法門世者所要也。大唐咸通六年。從六月迄于十月。於長安城右街西明寺日本留學僧圓載法師院求寫雜法門等目錄具如右也。日本貞觀七年十一月十二日。却來左京東寺重勘定。入唐請益僧大法師位^{爲後記之}」と言うので（大正藏五五、一一一一頁下）、咸通六年（865）に彼の得た書籍が日本で流通したことが知られるからである。
- (78) 大正藏五五、一〇九五頁上。
- (79) 前掲『入唐求法行歴の研究 智證大師圓珍篇』上、一二七頁。
- (80) 同上、一三八～一四一頁。
- (81) 同上、一五三頁。
- (82) 前掲『入唐求法巡禮行記の研究』第四卷、二〇一頁。
- (83) 同上、二〇六頁。
- (84) 金子彦二郎『平安時代文學と白氏文集 — 道眞の文學研究篇第一冊 —』（講談社、昭和二三年）一一三～一二八頁、ならびに花房英樹『白氏文集の批判的研究』（彙文堂書店、昭和三五年）一〇一頁、一〇五頁参照。
- (85) 慧萼の入唐回数については諸説あるが、金子氏によれば、次の四回である（前掲『平安時代文學と白氏文集 — 道眞の文學研究篇第一冊 — 』一〇三～一一三頁）。
- 1 承和（834～848）初入唐、同九年歸朝。
 - 2 承和十一年春以前入唐、同十四年七月歸朝。
 - 3 齊衡（854～857）初入唐、天安（857～859）二年頃歸朝。
 - 4 貞觀（859～877）四年九月入唐、同六年四月頃歸朝。
- このうち、『白氏文集』の書寫を行ったのは、第二回目の入唐期間中のことであるが、『悟性論』+『破相論』を授けられたのが、果たして慧萼であったとすれば、それも同じく、第二回目の入唐期間中のこととなる。
- (86) 橋本進吉『慧萼和尚年譜』（『大日本佛教全書』、遊方傳叢書第四、仏書刊行會、

大正一一年)五三一～五三五頁、前掲『平安時代文學と白氏文集 — 道眞の文學研究篇第一冊 — 』九七～一〇一頁、前掲『白氏文集の批判的研究』九六～一〇八頁など参照。

- (87) ただし、この二つは、全く別ルートで金澤文庫に入ったのであろう。金澤文庫本の『悟性論』の書寫年は文永一一年(1274)、『観心破相論』のそれは建仁元年(1201)、建長四年(1252)であるが、金澤文庫の禪籍の多くは、稱名寺第二世劍阿(1261～1338)の時代(1308～1338)に収集されたものとされている(納富常天「道元の鎌倉行化について」<「駒澤大學佛教學部研究紀要」三一、昭和四八年>一九四頁)。

一方、『白氏文集』については、金子氏によって、寛喜三年(1231)から貞永二年(1233)にかけて、京都で、豊原泰重、唯寂房を中心とする人々によって書寫されたことが明らかにされている(前掲『平安時代文學と白氏文集 — 道眞の文學研究篇第一冊 — 』一二八～一三九頁)。これが、金澤文庫に入った時期は全く不明であるが、關靖氏によれば、現存する金澤文庫本『白氏文集』には、五種類の「金澤文庫」印が押されているが(前掲『金澤文庫の研究』四八一～四九三頁、五三九～五四三頁)、それらの中には、關氏によって第二類に分類された古い印も含まれているから、顯時時代(1276～1301)には、既に、金澤文庫に入っていたと考えてよいのであろう。

従って、両者は、その性格を全く異にしている上に、金澤文庫に入った時期も相違するから、全く異なる経路を経て金澤文庫に入ったものと考えられるが、ほぼ同時期に、中國の相い近接する地方で書寫された二つの文獻が日本に傳わっていることは、それだけでも、兩者の間の關聯を窺わしめるものといえよう。

- (88) 建長四年、夜叉王丸書寫本については、『金澤文庫資料全書』所収のものに、紙の継ぎ目が明記されている。また、建仁元年、大甫丸書寫本については、駒澤大學所藏の寫眞によって確認した。

- (89) 従って、鏡島元隆氏は、この兩寫本について、關靖氏が前掲「金澤文庫書誌論考」で「恐らく兩書はその書寫の原本を異にしていることが察せられる」(一七三頁)と言われたのを批判し、「兩書を比較すると、些少文字の出入があるが、いずれも龔朗が會昌五年日本僧に淨書し與えた原本についての書寫であるから、關靖氏が判定しているような《書寫の原本を異にしてゐる》ものとは考えられない」と述べておられるが(前掲『金澤文庫資料全書』解説、二五七頁)、系統を同じくするか

どうかということと書寫の原本が同じであるかどうかということはおのずと別問題であって、少なくとも、「書寫の原本」については、關氏の見解を是とせざるをえない。

なお、眞福寺文庫本は、「惱塵」という句を有し、また、「眞門」としているから、夜叉王丸書寫本や『達磨大師三論』と同系統に属することが知られる。

(90) 大正藏四八、三三三頁中。

(91) 大正藏五一、五四六頁下。

(92) 『禪思想史研究 第二』（鈴木大拙全集第二卷、岩波書店、昭和四三年）、一〇八～一六一頁参照。

(93) 「二入四行」の敦煌寫本としては、今までに、次の七本が知られている。

- | | |
|-------------|-------------|
| 1 スタイン二七一五號 | 2 スタイン三三七五號 |
| 3 ペリオ二九二三號 | 4 ペリオ三〇一八號 |
| 5 ペリオ四六三四號 | 6 ペリオ四七九五號 |
| 7 北京宿九九號 | |

また、外に、チベット譯が存在することが、沖本克己氏によって明らかにされている（「チベット譯『二入四行論』について」〈『印度學佛教學研究』二四—二、昭和五年〉）。

(94) 朝鮮本『二種入』は、敦煌本の中途までを有し、『安心法門』に抜き書きされるものは、全て、ここまでに含まれている。なお、朝鮮本としては、『禪門撮要』所収本が從來から知られているが、この祖本と見做しうる天順八年（1459）に朝鮮國刊經都監によって印行された刊本が、天理大學圖書館に藏されている（188.7—イ111）。恐らく、これこそは、柳田聖山氏が、前掲論文「語録の歴史」の二五六頁で言及している、石井積翠軒文庫舊藏本に他ならぬであろう。この本は、長く、その所在が不明であったが、今回、このような極めて資料價值の高い稀覯書の所在を確認しえたことは、今後の研究に資するものと思う。

(95) 順に、大正藏五〇、五五一頁中～下、大正藏五一、四五八頁中～下、大正藏四九、五四八頁上～中。

(96) 續藏二—一五—五。

(97) 註19を参照せよ。

(98) 前掲『宋元版禪籍の研究』三六八頁。

(99) 順に、大正藏四八、九三九頁中～下、續藏二—二三—一—二七c～d、續藏二乙

—九—四—二二九d～二三〇b、續藏二—一五—五—四三二b～c。

- (100) 澁谷亮泰『昭和現存天台書籍綜合目録(増補版)』(法藏館、昭和五三年)下巻の一一七二頁に、正保二年(1645)に舜興が書寫した『達磨大師安心法門私註』を掲げるほか、六地藏寺には室町中期の寫本を蔵している。

この六地藏寺本は、椎名宏雄氏によれば、「流布本の『少室六門』中のものとは字句の異同が見られ、『宗鏡録』卷九十七中に存するそれとは完全に一致する」とのことであるから(前掲「六地藏寺所藏禪籍目録及び解題」三九頁)、『正法眼藏』によった『少室六門』とは、別個に抽出されたことが知られる。

- (101) 従って、柳田聖山氏は、前掲の「語録の歴史」において、「いったい、『少室六門』の『安心法門』は、『宗鏡録』卷九七に収める、此土初祖菩提達摩多羅の『安心法門』による」と言うが(二八一頁)、これが、その直接の出處が『宗鏡録』であるという意味なら、誤りとせざるをえない。

- (102) 註18を参照せよ。なお、『聯燈會要』では、『安心法門』が終わった後、引き続き、「期城太守楊街之竭誠參扣。乞示宗旨。師說偈云。亦不親惡而生嫌。亦不觀善而勤措。亦不捨智而近愚。亦不拋迷而就悟。達大道兮過量。通佛心兮出度。不與凡聖同躋。超然名之曰祖」と、『傳燈錄』の頌を引用しているから、『少室六門』の編者が、この『聯燈會要』を参考にした可能性もあろう。

- (103) 前掲『宋元版禪籍の研究』の「第二章 宋元代の大藏經と禪籍」、ならびに、「附録一 宋金元版禪籍所在目録」の「景德傳燈錄」の項を参照。

- (104) このことは、五山版に延祐三年刊本の刊記をそのまま寫していることから疑いえないと思われる(『國立國會圖書館所藏貴重書解題』第一卷〈國立國會圖書館、昭和四四年〉三九～四二頁参照)。川瀬氏も、前掲『五山版の研究』一〇五～一一二頁、三七〇～三七七頁でそのように述べているが、どういうわけか、椎名氏は、前掲『宋元版禪籍の研究』九四頁で、磧砂版大藏經所収本の覆刻であるとしている。

- (105) 前掲『五山版の研究』一一四～一一五頁、三九七頁。

- (106) 同上、七七～七八頁、四二四～四二五頁。

- (107) なお、先學の研究によれば、道元(1200～1253)が依用、あるいは批判の対象とした文獻の中に、『傳燈錄』、『正法眼藏』(大慧宗杲)、『人天眼目』があるということであるので、これらは、一三世紀前半には、既に日本に流入していたと考えてよい。これについては、鏡島元隆「道元禪師と引用語録」(「印度學佛教學研究」九—、昭和三六年)、同「道元禪師の引用燈史・語録一覽表」(「駒澤

大學佛教學部論集」一七、昭和六一年)、石井修道「『宗門統要集』と眞字『正法眼藏』—眞字『正法眼藏』の出典の全面補正—」(「宗學研究」二七、昭和六〇年)などを参照せよ。

- (108) 下村觀光編『五山文學全集』(六條活版製造所出版部、明治三九年)、二四五頁。
 (109) 大正藏八二、四五七頁上。
 (110) 納富常夫『金澤文庫資料の研究』(法藏館、昭和五七年)四二九頁、註62。
 (111) 大正藏四八、三七〇頁中。なお、大正藏本は、江戸時代の刊本を底本とするが、五山版『少室六門』も全くの同文である。
 (112) 水野弘元・平田高士編『佛教教育寶典—道元 臨濟禪家集—』(玉川大學出版部、昭和四七年)二八七～二九三頁、平野宗淨著、日本の禪語録6『大燈』(講談社、昭和五六年)五二～六五頁などに指摘されているが、兩者の對應關係については、いまだ十分でない点が見受けられるので、次に、兩者を對照させて掲げることとする。なお、「示萩原皇后假名法語」のテキストは、早苗憲生「蓬左文庫本『聖一假名法語』の研究(一)本文篇」(「禪文化研究所紀要」六、昭和四九年)を用いることとする。

「示萩原皇后假名法語」	『達磨大師三論』
<p>唯一心則是佛ナリ。心外ニ別ニ佛アリト思ハ外道ナリ。佛ヲ以佛ヲ禮スル事ナリ。佛ハ經ヲモヨマス。佛戒律ヲモ持タス。又戒タイヲモ犯サス。善惡ヲモ作ズ。モト眞佛ニ値タテマツラントホツセハ見性スヘシ。若見性セスンハ念佛讀經シテ戒タイヲタモットモイタツラ事ナリ。</p> <p>達磨大師説玉フナリ。見性セサル人ハ善知識ニ逢タテマツリテ生死ノ根本ヲアキラムヘシ。見性セズンハ。タトヘハ十二部經ヲ讀得タリトモ。又生死輪廻ヲ免ズシテ三界ニ苦ヲ受クヘシ。昔ハ善星比丘ト云人アリ。十二部經ヲヨ</p>	<p>若知自心是佛。不應心外覓佛。佛不度佛。將心覓佛。不識佛。但是外覓佛者。盡是不識自心是佛。亦不得將佛禮佛。不得將心念佛。佛不誦經。佛不持戒。佛不犯戒。佛無持犯。亦不造善惡。若欲覓佛。須是見性。即是佛。若不見性。念佛誦經。持齋持戒。亦無益處。念佛得因果。誦經得聰明。持戒得生天。布施得福報。覓佛終不得也。若自己不明了。須參善知識。了却生死根本。若不見性。即不名善知識。若不如此。縱說得十二部經。亦不免生死輪廻。三界受苦。無出期時。昔有善星比丘。誦得十二部經。猶自不免輪廻。爲不見性。(『血脈論』181/12～19)</p>

ミ得タリ。雖然不悟シテ。佛ノ説ヲキ
給フロマ子ヲノミシテ佛ノ内心ヲ知ラ
ス。依テ地獄ニ墮スルナリ。

(二八九頁上)

…(中略)…

アル人達磨大師ニ問フ。地獄トハ何ノ
処ソヤ。

答云。唯汝カ心中ノ貪瞋癡ノ三毒是ナ
リ。

問云。貪トハ貪着ノ念ナリ。瞋トハイ
カル心ノ念ナリ。癡トハ愚癡ノ念ナ
リ。只此三毒善惡ノ法ヲツクリ出スナ
リ。別ニ地獄トテ世界ノアルヘキト思
ハ迷ノ者也。

又問云。極樂淨土ト申ハ何ノ處ソヤ。
境界ニテサウラウヤ。

答云。極樂淨土トテ外ニアルベカラ
ス。唯汝カ心中ニアリ。前ノ三毒汚穢
不淨トテ清カラサル物ナリ。彼三毒不
淨ヲケハラウ所則淨土ナリ。色々ノヨ
コレタル妄念□拂イ捨ル所ヲ淨土トハ
云ナリ。別ニ淨土ヲ求ムベカラス。

アル人達磨大師ニ問。佛一切ノ衆生ヲ
シテ伽藍ヲ修造シ佛像ヲ建立セシメ。
燒香禮拜セシメ。六時二行道シテ皆佛
道ヲ成ヘシト説玉フ是ナリ。

答云。佛ノ所説經ハ無量ノ方便也。一
切ノ衆生ハ鈍根下劣ニシテ微妙ノ法ヲ
悟ス。暫ク伽藍ヲ修造シ佛像ヲ建立セ
シメ。其結縁ニ依テ眞實ノ伽藍エモイ
タリテ。眞佛ヲモ見タテマツラン事疑

無妄想時。一心是一佛國。有妄想時。一
心是一地獄。衆生造作妄想。以心生心。
故常在地獄。菩薩觀察妄想。不以心生
心。常在佛國。若不以心生心。則心心入
空。念念歸靜。從一佛國。至一佛國。若
以心生心。則心心不靜。念念歸動。從一
地獄歷一地獄。…(中略)…心中有三毒
者。是名國土穢惡。心中無三毒者。是名
國土清淨。經云。若使國土不淨。穢惡充
滿。諸佛世尊汚中出者。無有此事。不淨
穢惡者。即無明三毒是。諸佛世尊者。即
清淨覺悟心是。(『悟性論』192/8~21)

問。經中所説。佛令衆生修造伽藍。鑄寫
形像。燒香散花然燈。晝夜六時遶塔行
道。持齋禮拜。種種功德。皆成佛道。若
唯觀心。總攝諸行。說如是事。應虛妄
也。

答。佛所説經。有無量方便。以一切衆
生。鈍根狹劣。不悟甚深之義。所以。假
有爲喻無爲。若復不修內行。唯只外求。
希望獲福。無有是處。言伽藍者。西國梵

アルベカラストテ。カヤウニハ説玉フナリ。

問云。眞佛伽藍トハ。汝カ三毒ノ不淨ノ念ヲ除キ六根ヲキヨメ。身心湛然トシテ内外清淨ナルヲ眞實ノ伽藍殿堂トハ申ナリ。サテ伽藍ノ本尊トハ心佛ノ明ニシテアラワレ給フヲ眞佛ト云ナリ。唯妄念ノ不淨ヲ拂ハ、眞佛アラハレ出ナリ。是ヲ伽藍ヲ作り眞佛ノ形ヲ建立スル人ト云ナリ。

達磨大師如是説玉フ故ニ。伽藍ヲ修造シ佛像ヲ建立セハ。其功力ニヨリ必ス眞ノ伽藍ニイタリ眞佛ニ逢タテマツラン事決定タルヘシ。

(二八九頁下～二九〇頁下)

..(中略)..

或人達磨大師ニ問。出家ト申ハ。イカヤウナル躰ヲイハンヤ。

答云。鬚髮ヲ剃落シ。衣ヲカヘタルハカリヲ出家ナルヘシト思ベカラス。タトヘ鬚ヲソリ袈裟ヲ着シタリトモ。不悟イマタ家ヲ出サル在家ノ凡夫タルヘシ。

又問。白衣ハ妻子在。姪欲ノゾカス。何ニ依カ成佛スル事ヲ得テンヤ。

答云。只見性ト云モ姪欲ヲキラハス。唯見性セサルタメナリ。唯見性スル事ヲ得ハ姪欲空寂。寂トシテオノツカラ斷除ス。又樂ミ着セズ。タトヘ習心アルモ。イマシメヲナサス。所以者何。心性元ヨリ清□□□□赤肉内ニ在トイヘ

語。此土翻爲清淨地也。若永除三毒。常淨六根。身心湛然。内外清淨。是名修伽藍。鑄寫形像者。即是一切衆生。求佛道也。所爲修諸覺行。仿像如來眞容妙相。豈遣鑄寫金銅之所作也。是故求解脫者。以身爲爐。以法爲火。以智慧爲巧匠。三聚淨戒。六波羅蜜。以爲模樣。鎔鍊身中眞如佛性。遍入一切戒律模中。如教奉行。一無漏缺。自然成就。眞容之像。所謂究竟常住。微妙色身。非是有爲敗壞之法。若人求道。不解如是鑄寫眞容。憑何輒言功德。(『破相論』201/12～202/8)

若見自心是佛。不在剃除鬚髮。白衣亦是佛。若不見性。剃除鬚髮。亦是外道。

問曰。白衣有妻子。姪欲不除。憑何得成佛。

答曰。只言見性。不言姪欲。只爲不見性。但得見性。姪欲本來空寂。自爾斷除。亦不樂著。縱有餘習。不能爲害。何以故。性本清淨故。雖處在五蘊色身中。其性本來清淨。染汚不得。法身本來無受。無飢無渴。無寒熱。無病。無恩愛。無眷屬。無苦樂。無好惡。無短長。無強弱。本來無有一物可得。只緣執有此色身因。即有飢渴寒熱瘴病等相。若不執。即一任作。(『血脉論』186/18～187/3)

トモ染汚スル事アラズ。心性本來ニシ
テ。飢ル□ナク渴スルコトナク。寒熱ナ
ク病ナク。恩愛ナク眷屬ナク。樂ナク善
惡ナク。本來一切ナキナリ。只此身アリ
ト思ニ依テ飢渴寒熱色々ノ病アリ。此
色身本來空ナリト心得バ。時々ニ貪着
ノ心ステラルヘシ。(二九一頁下～二九
二頁上)

- (113) 例えば、日朝(1422～1500)の『四宗要文』は、多くの『血脈論』からの引文を含み(大日本佛教全書、「諸宗要義集」二五七～二五八頁)、また、『二種入』からの引用も見られるが(二五六頁)、本文中に、

達磨著少室六門 而眞僞未決乎。心經頌・破相論・二種入・安心法・悟性論・血脈論
と見えるので、『少室六門』からの引用と知られる(實際、字句は、ほとんど完全に五山版と一致する)。

また、心海(生没年未詳)が、天文三年(1534)に撰した『宗極抄』(續天台宗全書、口傳2所収)にも、『破相論』や『血脈論』の引用が見えるが、これは、恐らく、五山版『達磨大師三論』に基づくものであろう(『破相論』からの引用は、無名僧の序文からのものであるが、この序文は、『少室六門』系の諸本には存在しない)。

更に、既に高橋秀榮氏が指摘されているように(前掲「大日房能忍の行實」二七頁)、義觀(?～1680)の『本朝諸宗要集』には、「抑初祖造三部論。謂。破相論・悟性論・血脈論也」と見えるので(大日本佛教全書、「諸宗要義集」三二四頁)、これも、『達磨大師三論』の存在を前提としたものと見られる。

- (114) 『昭和法寶總目録』三、七八三頁中。

- (115) 同上、七八五頁中。

- (116) 前掲「『少室六門』と『達磨大師三論』」二一七頁。

- (117) これら空白部には、金澤文庫本では、『悟性論』のCは「心」、Dは「女」が、また、『破相論』のAでは「及」が存在する。なお、『悟性論』のAの部分は、叡山文庫本の本文自體に問題があるので、ここでは問題にしない。

- (118) 前掲「『少室六門』と『達磨大師三論』」二一四頁。

(119) その一例とは、椎名氏の翻刻でいえば、一八七頁の一六行目に当たる「無性」の部分であって、先に、第二節で述べたように、この「性」の字は、慶應大學蔵本、駒澤大學蔵本とも空白部に書き込んだものなのであるが、叡山文庫本、河村本とも、この部分には、「情」の字が存在するので、元來は、「情」であったものと思われる。慶應大學蔵本は、それゆえ、参照した本に「情」とあったにも拘わらず、「性」の字を補ったことになるのであるが、五山版『少室六門』など、他の諸本も全て「情」となっているので、恐らく、何か基づくものがあつたのではなく、單に私見に基づいて補つたのであろう。

なお、慶應大學蔵本の書き込みは、上の一例を除いて、全て河村本の本文と一致するのであるが、そのうち、河村本の文字の補填と一致するのは、『血脈論』の「輪廻〔縁〕」(181/19)、『悟性論』の「如來種〔子〕」(192/15)、同じく「男〔子〕相」(193/7)、『破相論』の「始生〔子〕」(197/3)のみで、他の箇所については、叡山文庫本とも共通するので、河村本の書き込みではなく、それらが基づいた刊本自身が、そのような文章であつたと考えられる。

(120) 本論文、第四節の3で、圖1として原刊本の寫眞を示した、Fの部分。

(121) 續蔵本の底本が古活字版であることについては、椎名氏の前掲論文「『少室六門』と『達磨大師三論』」二一八頁参照。なお、椎名氏のいう古活字版とは、大東急記念文庫蔵本のことである。

(122) 前掲「『少室六門』と『達磨大師三論』」二一五頁。

(123) 先の一覧でいえば、『悟性論』のDがこれに當たる。

(124) 前掲「『少室六門』と『達磨大師三論』」二一六頁。

(125) 前者については、川瀬一馬篇『大東急記念文庫貴重書解題』卷二、仏書之部（大東急記念文庫、昭和三年）一八四～一八五頁に、元和（1615～1624）、寛永（1624～1644）中の刊行とされている。また、後者については、川瀬一馬編著『新修成實堂文庫善本書目』（お茶の水圖書館、1992年）六九三頁で、寛永頃の刊行とする。また、川瀬氏の『増補古活字版の研究』（日本古籍商協會、昭和四二年）三四八頁、七八九頁を参照せよ。

(126) 前掲「『少室六門』と『達磨大師三論』」二一三頁。

(127) 前掲『増補古活字版の研究』七八九頁参照。

(128) 大東急記念文庫のものは、縦285mm、横195mm、匡郭内は、縦218mm、横160mm、各半葉一〇行で、各行二〇字。全三〇丁で、『血脈論』のみに序文

がある。版心は、『血脈論』の序の一丁とその本文の第一丁目のみ「脈論序」で、『血脈論』の第二丁以降は、全て、「脈論」となっており、三論のそれぞれに、個別の丁数を割り振っている。

一方、成實堂文庫のものは、縦 280mm、横 190mm の無邊本で、各半葉一〇行、各行一九字、全三七丁となっている。三論の全てに序が附されているが、『血脈論』のもののみが別丁である。版心は、全て、「血脈」と彫られ、丁数は、『血脈論』の序文のみ別で、その本文以下は、通し番號となっている。

- (129) 先に東北大學藏本について論じた際、金澤文庫本のみと一致する箇所として、『悟性論』に五箇所 (C、D、E、H、J)、『破相論』に一箇所 (F) の計六箇所を指摘したが、これらのうち、『悟性論』の C、D、J の三箇所は、この古活字版と共通する。

- (130) 例えば、東北大學藏本が、『血脈論』で「眼見光明」に作るところを、この古活字版は「眼睹光明」としている。大谷大學藏本や五山版『少室六門』も、東北大學藏本と共通するが、五山版『達磨大師三論』のみは、「眼睹光明」としている (185/20)。また、『破相論』では、大谷大學藏本、東北大學藏本、五山版『少室六門』が、いずれも、「説無爲則兀兀如迷」とするにも拘わらず、この古活字版と五山版『達磨大師三論』のみが、「無爲」を「無相」としている (207/4) など、いくつかの例を見ることができる。

- (131) 二、三の例を挙げれば、『悟性論』で、五山版の『少室六門』や『達磨大師三論』、更には、東北大學藏本までも、「無所解者。始名正解」(191/12) としているのに、この古活字版と大谷大學藏本のみが、「正解」を「眞解」としている。また、『破相論』でも、『少室六門』、『達磨大師三論』、東北大學藏本が、いずれも、「對於貪毒。誓修一切善。故常習定」(199/13) としているのに、この古活字版と大谷大學藏本のみが、「習定」を「修定」としている。

- (132) 例えば、『血脈論』で、五山版『達磨大師三論』、大谷大學藏本、東北大學藏本が、いずれも、「既若不別。即此身是汝本法身」(183/10) としているのに、この古活字版と五山版『少室六門』のみが、「即」の下に「是」の字を挿入している。

- (133) 椎名氏は、『江戸時代書林出版書籍目録集成』(井上書房、昭和三七～三八年) を根據に、寛文十年、寛文十一年、天和元年、元禄五年、元禄十二年などの刊本が存在したと述べるが(前掲「『少室六門』と『達磨大師三論』」二二六頁、註 1)、これらの刊年は、『少室六門』を掲載する書籍目録が出版された年であって、その年

に『少室六門』が刊行されたことを示すものではないと言わねばならない。確かに、この『江戸時代書林出版書籍目録集成』によって、江戸時代に幾度か『少室六門』が刊行されたことは知りうるが、出版者の名前が書かれている場合は稀れであるし、刊年については、一切、記載されていないから、そこに掲げられている『少室六門』が、今日傳わるどれに当たるのかを知ることは容易ではないし、まして、今日、失われた刊本の存在を、そこから検出するには、周到な研究を要するはずである。

(134) 前掲「『少室六門』と『達磨大師三論』」二一〇～二一三頁。

(135) 同上、二一三頁。

(136) 前掲『新纂禪籍目録』一八八頁下段。

(137) 前掲「『少室六門』と『達磨大師三論』」二一三頁。

(138) 同上、二一二頁。

(139) 本寫本は、縦 280mm、横 217mmの線裝本で、各半葉一〇行、各行二〇字(一九字、二一字の例も若干見られる)で寫されており、返り點、送り假名、朱點が付されている。椎名氏の言われるように、林羅山(1583～1657)の藏書であることを示す「江雲涓樹」の印が劈頭に押されているので、その書寫は一七世紀中葉を降らないことが知られる。全體は四二丁で、その内譯は、『心經頌』六丁、『破相論』一一丁、『二種入』二丁、『安心法門』二丁、『悟性論』一〇丁、『血脈論』一一丁となっている。

(140) 例えば、『悟性論』には、「非直解於見」(191/10)、「非直解於解」(191/11)という句があるが、この寫本は、これらの「直」も、「眞」と書いている。

(141) 従って、椎名氏が、五山版『少室六門』について、「就中、最大の形式的相違は、第一門『心經頌』の文中、頌の直前の語句に續いてかならず『頌曰』の二字が存することである。江戸期の刊本には、これがまったくみられない」といつているのは、誤りである。なお、朝鮮系の『新刊懸吐禪門撮要』所収本に、この二字があることは先述のごとくである。

(142) なお、観山文庫の圖書カードでは、これを「古活字版」と表記している例があるが(天海藏31-11、藥樹院藏6-120)、その字體からして古活字版とは見えないうえに、返り點、送り假名まで付されているのであるから、明らかに整版であって、活字本ではない。

(143) 前掲「『少室六門』と『達磨大師三論』」二一二頁。

- (144) 五山版『少室六門』の発見は、昭和四十二年、阿部隆一氏によるものである。その経緯については、前掲「六地藏寺法寶藏典籍について」に詳しい。
- (145) この『少室六門』は、椎名氏の調査によれば、江戸期の流布本である。前掲「『少室六門』と『達磨大師三論』」二二三頁。
- (146) 前掲『少林三論并四品校讎』二一五頁下段。
- (147) 同上。
- (148) 同上、二一六頁上段。
- (149) 同上、二一四頁下段。
- (150) 同上、二二六頁上段～下段。
- (151) これについては、刊行時期と刊行地が隔たっていたことが関係したかもしれない。即ち、『達磨大師三論』は、その刊記から、至徳四年(1387)、京都の臨川寺における開版と知られるが、一方、『少室六門』の方は、川瀬氏によって、鎌倉時代末期に鎌倉で刊行されたものと推定されている(前掲『五山版の研究』八五頁)。
- (152) 上で、既に、『破相論』と『悟性論』には思想的に共通するものがあるということに言及しておいたが、柳田聖山氏は、前掲の「語録の歴史」において、『達磨大師三論』に含まれる三つの文獻に関して、次のように言う。

言ってみれば、『破相論』や『悟性論』に比べて、『血脈論』はもっとも新しい。近代の研究によって、『破相論』は神秀の『観心論』にほかならず、破相という改名も、宗密の北宗批判によることが明らかになった。要するに、『破相論』は、北宗系の達磨語録である。『悟性論』も、北宗系の據りどころとされた、『禪門經』の言葉を引いているから、そうした前代を總括し、再編する傾きがある。『血脈論』の主張と、他の二論のあいだには、明らかに開きがある。『血脈論』を生み出す宗派の實態は、今のところ、なおよく判らないが、この本には新しい西天二十八祖説があり、當時、南北二宗の外にあった牛頭法門、もしくは馬祖の洪州宗に關係することは確かである。(二六〇頁)

ここで述べられている氏の主張の多くは、検討を要するが、三論のうち、『血脈論』のみが、その傾向を大いに異にしているということは、そのまま認めてよいと思われる。

(本論は文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である)

附 記

- 1 私は、本論文を書くに際して、できうる限り多くの資料に当たるよう心がけたが、充分と言うには程遠い状況にある。なかんづく、その存在が記録に書き記されており、しかも、諸本間の関係を解明する要の位置を占める、高麗本の『悟性論』と『破相論』を見ることができなかったことは、甚だ遺憾とするところである。これに関して、讀者諸賢に御教示を賜ることができれば幸甚である。
- 2 本論文を書くに当たっては、関係各位に、所蔵資料閲覧の便宜をえた。ここに、その芳名を記して、感謝の意を表する。

大谷大學圖書館 慶應義塾大學圖書館 國立國會圖書館

駒澤大學圖書館 東北大學圖書館 早稻田大學圖書館

叡山文庫 金澤文庫 斯道文庫(慶應義塾大學) 眞福寺文庫

成實堂文庫(お茶の水圖書館) 大東急記念文庫 内閣文庫

河村孝道氏 椎名宏雄氏

- 3 本論文に掲載されている寫眞のうち、五山版『達磨大師三論』は、慶應大學所蔵のものであり、二種の古活字版は、成實堂文庫、ならびに大東急記念文庫所蔵のものである。寫眞の掲載を許可された、慶應義塾大學圖書館、お茶の水圖書館、大東急記念文庫の御配慮に感謝する。
- 4 最後に、本論文が成るに当たっては、駒澤大學の三人の先生方の御厚意が與かつて大きかったことを特に書き添えておきたい。

先ず、河村孝道先生においては、全く面識のなかった筆者が、突然、無理なお願いを申し出たにも拘らず、快く應じてくださり、珍藏される貴重なる寫本の閲覧と複寫を許可された。また、石井修道先生は、河村先生への仲介の勞をおとりくださった。最後に、椎名宏雄先生は、筆者がどうしても見る必要を感じながら、探しあぐねていた『新刊懸吐禪門撮要』の『悟性論』の複寫をわざわざ送ってくださった。

河村氏所蔵の『達磨大師三論』『少室六門』、ならびに『新刊懸吐禪門撮要』が本論文に占める重要な位置は讀まれた方にはすぐにお分かりいただけるであろうが、その部分を書くことができたのは、一重に、上に掲げた三氏の御配慮によるのである。ここに、その経緯を記して、感謝の意を表する次第である。